

琵琶湖博物館 年報

7号

平成14(2002)年度



LAKE BIWA MUSEUM
琵琶湖博物館

ごあいさつ

琵琶湖博物館は、2002年10月に一般公開6周年を迎え、また11月には来館者が延べ400万人に達しました。

2002年度の主な行事としては、先ず7～11月に開いた『中世のむら探検—近江の暮らしのルーツを求めて』の企画展示があります。これは、「伝統的」と考えられる近江の暮らしの原形が固まった中世の庶民生活を知り、いや、身をもって体験して貰おうとの試みであり、また展示の準備段階から、「はしかけ」さんなどとともに作り上げた作品です。幸いに多くの方々に参加して下さり、新しい展示づくりの一つのありかたを示すものになりました。

また、これに関連して、7～9月には『魚の群れ探検—魚はなぜ群をつくる?—』の水族企画展示を行いました。

その他にも企画展示室では、『湖（うみ）の十字路—野洲川平野の弥生・古墳時代』、『今森洋輔「琵琶湖の魚」原画展—うろこの輝きに魅せられて』、『滋賀県環境学習フェア』、『森づくり—琵琶湖をはぐくむ森と人—』の、ギャラリー展示を開きました。これらの展示も企画展示と同様に、多くの人々の協力を得て行なったものです。

さらに、3月に滋賀・京都・大阪で開かれた「第3回世界水フォーラム」に関連して、『今昔写真と生活民具で探る、世界の水辺の暮らし100年』と、大阪にある海遊館・水道記念館と連携した『びわ湖・淀川・大阪湾 水の旅—びわ湖で少なくなった魚と貝—』を開きました。

いっぽう常設展示に関しては、小規模な展示替えはつねに適宜行ってきておりますが、今回、A展示室の「亜熱帯の湖」の部分をはほぼ全面的に取り換えました。ここでは「美しい展示づくり」を心がけ、風景画家のブライアン＝ウィリアムズさんや精巧な模型作家の近洋二さんに関わって頂きました。

前年度から実質的に始まった「はしかけ」制度については、2002年度には「はしかけ」さんが9つのグループに大別され、それぞれ活発に活動されています。また、さまざまな野外の情報を報告して貰う「フィールドレポーター」さんの制度も、質量ともに進んできました。このように、博物館の開く行事に参加するだけではなく、その活動自体に深く関わる方が増え続けていることは、「みんなで作りあげる博物館」を標榜する琵琶湖博物館にとって、来館者の増加にもまして嬉しいことです。

そこで3月には、これらの積極的な方々を中心に、シンポジウム『使える琵琶湖博物館をめざして』を開きました。また、1998年度から行っている琵琶湖博物館中長期計画に関しては、12月に琵琶湖博物館協議会で、『地域だれでも・どこでも博物館をめざして～琵琶湖博物館中長期目標』が決定されました。

以上のようなさまざまな活動が続けてこられたのは、言うまでもなく多くの方々の御協力の賜物であり、深く感謝しております。今後ともさまざまな場面で、いや、特別の行事のときだけではなく、ふだんにいろいろと御意見・御批判を頂きたく、宜しく願い申し上げます。

なお今回から、県任用の職員だけでなく委託・人材派遣・嘱託などの人々、さらに「はしかけ」・「フィールドレポーター」の方々の名まえも、掲載することにしました。それらの人々の働きによってこそ琵琶湖博物館が成り立っていることを、多くの方々に知って頂きたかったからです。いやむしろ、前年度まで掲載しなかった私の不手際をお詫び致したく存じます。

2002年5月31日

滋賀県立琵琶湖博物館

館長 川那部 浩哉

目 次

ごあいさつ	1
I 博物館活動の概要	4
1 研究・調査活動	4
(1) 文部科学省科学研究費申請機関への登録	4
(2) 総合研究	4
(3) 共同研究	4
(4) 専門研究	5
(5) 公表された主な研究成果	6
(6) 研究助成を受けた研究	7
(7) 第5回琵琶湖博物館研究発表会	8
(8) 研究最前線	9
(9) 特別研究セミナー	9
(10) 研究セミナー	9
(11) 特別研究員の受け入れ	11
(12) 海外交流活動	11
2 交流・サービス活動	13
1. 利用者主体の事業	13
(1) フィールドレポーター	13
(2) 「はしかけ」制度の実施状況	14
2. 一般利用者へのサービス事業	16
(1) 観察会・見学会等	16
(2) 博物館講座	17
(3) 体験教室	18
(4) 夏休み相談室・自由研究講座	19
(5) 質問コーナー・フロアトーク	19
3. 学校連携事業および体験学習	21
(1) 教職員研修および視察	21
(2) 博物館体験学習	23
(3) 「体験学習の日」の活動	24
(4) 家族を対象とした環境学習プログラム「エコスクラム 水の旅」の活動.....	25
4. 展示交流事業動.....	25
(1) 水族展示交流活動.....	25
(2) 「展示交流員と話そう」	26
5. 博物館実習動.....	27
6. 来館者との交流会動.....	28
3 情報活動	30
(1) 館内の情報センター（図書室・情報利用室）	30
(2) 通信網を利用した館外サービス	30
(3) 電子交流システム（LBMNET）	32
(4) 情報システムの更新	32

(5) 収藏品データベースの整備	32
(6) 画像情報システムの整備	32
(7) 映像資料の貸し出し	32
(8) 資料整備	36
4 資料整備活動	37
(1) 収蔵資料	37
(2) 新規収集資料	40
(3) 資料の利用	44
(4) 燻 蒸	46
(5) 資料評価委員	47
5 展示活動	48
(1) 常設展示の主な更新	48
(2) 企画展示「中世のむら探検-近江の暮らしのルーツを求めて」	49
(3) 水族企画展示	51
(4) ギャラリー展示	53
(5) 水族トピックス展示	55
(6) 展示関連事業	55
6 国際交流活動	57
7 印刷物	58
II 利用状況	59
1 2002年度入館者数	59
(1) 総入館者数	59
(2) 学校等入館者数	60
(3) 月別・曜日別入館者数	61
2 来館者アンケート調査結果	62
3 新聞掲載記録	65
4 雑誌等掲載記録	71
5 テレビ放映・ラジオ放送記録	73
III 組織および運営	75
1 組 織	75
2 職 員	76
3 予 算	81
4 滋賀県立琵琶湖博物館協議会	82
IV 博物館利用のご案内	84
平成15年度 職員紹介	86

※表紙の写真：企画展示「中世のむら探検-近江の暮らしのルーツを求めて」の展示風景

I 博物館活動の概要

1 研究・調査活動

琵琶湖博物館の事業は、研究事業、交流サービス事業、情報事業、資料整備事業、展示事業という五つを総合的に行ない、特にその中でも研究活動が全ての博物館活動の基礎となる。すなわち、研究の成果の発信として、交流、情報、資料、展示が行なわれ研究の成果とその発信が魅力的であれば有るほど、博物館の他の事業も魅力的なものとなる。

特に琵琶湖博物館の研究事業では、「生命文化複合体」としての琵琶湖の「価値」を明らかにすることを目標に、学際的な総合研究やテーマをしばった共同研究、ならびに個々の学芸員の資質を高める専門研究に取り組んできた。総合研究と共同研究については、研究審査委員会に対して研究計画書を提出し、その審査を受けて、平成14年度は、以下の研究課題が審査を通過して実施された。なお、専門研究については、申請金額の多い研究については申請専門研究として、同じく研究審査会での審査を受けた。

(1) 文部科学省科学研究費申請機関への登録

平成14年度から文部科学省の科学研究費申請機関に登録が認められることになり、この年度は学芸職員2件、特別研究員2件に対して補助金が交付された。

(2) 総合研究

琵琶湖博物館の設立理念を実現することに直接結びつく研究として、総合研究を行った。総合研究のテーマは次の3件であった。

- ・博物館資料の収集・整理・保管と利用に関する研究-博物館資料の利活用の理論化-
(代表者 八尋克郎)
- ・東アジアの中の琵琶湖-コイ科魚類を展開の軸とした-環境史に関する研究 (代表者 中島経夫)
- ・琵琶湖沿岸帯の生物群集における生物間相互作用に関する研究 (代表者 アンドリュー・ロシター)

(3) 共同研究

琵琶湖博物館のテーマにしたがった研究として共同研究を以下のテーマで行った。

- ・博物館展示における「ハンズ・オン」の効果とその意義 (代表 芦谷美奈子)
- ・琵琶湖集水域における中世村落確立過程の研究-考古資料の分析を中心として- (代表 橋本道範)
- ・滋賀県における陸産貝類の分布等に関する研究 (代表 中井克樹)
- ・沿岸域モニタリングのための常設型リモートセンシングの運営に関する基礎的研究
(代表 戸田 孝)
- ・琵琶湖の水生植物の種分化と生態分化 (代表 山川千代美)
- ・滋賀県内の魚類分布調査および琵琶湖博物館収蔵魚類標本の充実 (代表 長田智生)

- ・堅田内湖における魚類の生態に関する研究（代表 井戸本純一）
- ・琵琶湖とその集水域における水生動物の寄生虫相に関する研究（代表 マーク・グライガー）
- ・琵琶湖堆積盆地の後期鮮新世約250万年前前後の古環境変化と古植生変化（代表 百原新）
- ・たんぼにおける大型鰓脚類（ハウネンエビ・カプトエビ・カイエビ類）に関する研究
（代表 マーク・グライガー）
- ・島の動物相の成立過程-古琵琶湖時代の動物相の特殊性解明にむけて-（代表 高橋啓一）
- ・「カワウ問題」に向けての生態学的アプローチ（代表 亀田佳代子）
- ・南湖の富栄養化過程に沈水植物が及ぼす影響の解明（代表 芳賀裕樹）
- ・古代湖および海洋における魚類群構造：そのパターンとプロセス（代表 アンドリュー・ロシター）
- ・琵琶湖水系に生息するイワナの地理的分布とその形成過程（代表 桑原雅之）
- ・東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究（代表 榎永一宏）
- ・外国産シジミ類に関する研究（代表 松田征也）

(4) 専門研究

各学芸職員が、自らの専門分野の研究をおこなった。専門研究は特別な経費を要求した申請専門研究と、通常経費で研究をしたものとに区別している。

<申請専門研究>

- ・房総半島の鮮新統三浦層群を主軸とした、本州中央部の鮮新統に挟在する火山灰の広域対比（里口保文）
- ・琵琶湖等における外来生物（とくにブラックバス問題）に関する研究（中井克樹）
- ・植生と水質調節：一降雨流出時の水質変化の組成解析（草加伸吾）
- ・近江盆地における遺跡の立地環境の解析（宮本真二）

<専門研究>

環境史研究領域

- ・ナウマンゾウの舌骨にみられる変異と種の特徴（高橋啓一）
- ・コイ科魚類の咽頭歯に関する研究（中島経夫）
- ・近江の歴史の固有性と普遍性に関する考古学的研究（用田政晴）
- ・琵琶湖歴史環境の世界史的評価に関する研究（牧野久実）
- ・新生代の大型植物化石の研究（山川千代美）
- ・中世琵琶湖の環境史（橋本道範）
- ・双翅目アシナガバエ科昆虫の系統分類と生物地理（榎永一宏）

生態系研究領域

- ・陸亀における生物地理学，進化，分類（アンドリュー・ロシター）
- ・水域-陸域間の相互作用における鳥類の役割に関する研究（亀田佳代子）
- ・住民参加によるビオトープづくりの可能性と課題（杉谷博隆）
- ・日本産ナマズ類3種の繁殖生態（前畑政善）

- ・甲殻類の系統分類学および海洋無脊椎動物の寄生虫に関する研究（マーク・グライガー）
- ・多自然型川づくりに関する研究（野崎信宏）
- ・水産生物における遺伝的多様性の管理に関する研究（井戸本純一）
- ・里山の再生と活用に関する研究（長崎泰則）
- ・琵琶湖における繊毛虫と藻類の共生関係について（楠岡 泰）
- ・河川改修後の貝類相復元に関する研究（松田征也）
- ・琵琶湖水系におけるピワマスとアマゴの関係（桑原雅之）
- ・歴史的環境保全における地域社会の意思決定（牧野厚史）
- ・貝曳きによる沈水植物帯の低質変化（芳賀裕樹）
- ・地域資源としての淡水魚介類の伝統的利用とその変化（中藤容子）
- ・琵琶湖及び内湖湖岸における水辺利用に関する研究（矢野晋吾）
- ・付着珪藻の分布および環境との対応に関する研究（大塚泰介）

博物館学研究領域

- ・博物館評価の基準策定（布谷知夫）
- ・オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究（八尋克郎）
- ・淡水魚類の音響行動について（特にギギの音響行動について）（秋山廣光）
- ・地域の特性を生かした環境学習教材の開発（森田光治）
- ・博物館事業における水理学分野の位置付けに関する研究（戸田 孝）
- ・イバラモのシュート群動態と雌雄異株性に関する研究（芦谷美奈子）
- ・身近な自然を利用した環境学習について（西垣 亨）

琵琶湖博物館総合研究・共同研究審査委員会 委員

氏 名	現 職
秋 道 智 彌	総合地球環境学研究所 教授
鳥 越 皓 之	筑波大学社会科学系 教授
原 田 英 司	京都大学名誉教授
横 山 俊 夫	京都大学大学院地球環境学堂 三才学林長 人文科学研究所 教授
鷺 谷 いづみ	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
佐々木 亨	北海道大学大学院文学研究科 助教授
三田村 緒佐武	滋賀県立大学環境科学部 教授
吉 村 輝 夫	滋賀県総合教育センター 副主幹
川那部 浩 哉	滋賀県立琵琶湖博物館 館長
重 野 良 寛	滋賀県立琵琶湖博物館 副館長

(5) 公表された主な研究成果

研究業績については、琵琶湖博物館研究業績第7号に収録した。

(6) 研究助成を受けた研究

中島経夫

- ・奈良県田原本町教育委員会「奈良県田原本町唐古・鍵遺跡共同研究」共同研究者
- ・富山第一銀行奨学財団助成事業「学際的観点からの日本海地域文化に関する総合研究—富山からの展望と提言」(代表者中井精一・富山大学) 研究分担者

嘉田由紀子

- ・地球環境研究総合推進費「景観の変化から探る世界の水辺景観の長期的トレンドに関する環境社会学的研究」 研究代表者
- ・文部科学省科学研究費補助金基礎研究B(1)「環境保全における地域システムの役割—コモンズ論・公共性論・生活環境主義の再検討を通して—」 研究代表者
- ・文部科学省科学研究費補助金基礎研究B(1)「人類学的視点から見る環境保全」 研究分担者

牧野久実

- ・文部科学省科学研究費補助金基礎研究A「イスラエル国ガリラヤ湖周辺の宗教文化についての総合研究」(代表者 月本昭男) 研究分担者
- ・文部科学省科学研究費補助金基礎研究A「土壤に含まれる有機遺物の採集・分析法の開発—低湿地遺跡出土の動植物遺体」(代表者 松井章) 研究分担者

芳賀裕樹

- ・河川環境管理財団助成「魚類探知機による沈水植物の分布・現存量のモニタリング手法の開発」
研究代表者

芦谷美奈子

- ・河川環境管理財団助成「魚類探知機による沈水植物の分布・現存量のモニタリング手法の開発」
研究分担者

大塚泰介

- ・河川環境管理財団助成「魚類探知機による沈水植物の分布・現存量のモニタリング手法の開発」
研究分担者

榊永一宏

- ・文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)「大洋島における海洋性アシナガバエの種分化と起源」
研究代表者

矢野晋吾

- ・文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)「日本村落社会における労働の社会学的研究—主観的労働観を通じた再検討と理論化」

亀田佳代子

- ・永井研究助成基金「内水面における生物相互および人間の共生に関する研究—京都府木津川のアユを巡る共生に関する実態究明」(代表者: 中原紘之) 研究分担者

中井克樹

- ・世界自然保護基金日本委員会(WWF ジャパン) 自然保護助成金「里山の水辺におけるプラスの影

響の現状把握：希少水生生物の保全のために」 研究代表者

- ・日本生命財団「外来生物の侵入・定着のリスク評価に対する生態学的研究—新たな外来生物の侵入・定着を予防する」(代表者：遊磨正秀) 研究協力者

(7) 第5回 琵琶湖博物館研究発表会

この年度は、琵琶湖博物館を利用する利用者にとって、どのような状態であれば博物館は使いやすいのかを話していただくためのシンポジウム「使える琵琶湖博物館をめざして」を行った。参加者は、博物館内部の参加者を含めて145人であった。

日時：2003年2月26日

会場：ホール（全体会議、シンポジウム）

会議室、セミナー室、実習室（分科会）

テーマ：使える琵琶湖博物館をめざして

スケジュール

1：00 受付開始

1：30 シンポジウム開始（ホール）

館長挨拶

趣旨の説明（研究部長 布谷）

1：45 それぞれの分科会会場に分かれる

1：50 分科会開始

「個人と博物館」（セミナー室）

進行とりまとめ 木下達文 氏（京都橘女子大学）

「学校と博物館」（実習室2）

進行取りまとめ 山口不二夫 氏（高等学校理科部会）

「研究団体と博物館」

進行とりまとめ 井坂尚司（蒲生野考現倶楽部）

3：00 分科会終了

3：15 分科会からの報告：（木下達文，山口不二夫，井坂尚司）

4：00 討論

司会：牧野厚史

演者：嘉田由紀子（琵琶湖博物館・精華大学），ブライアン・ウィリアムズ（画家），岡村喜明（滋賀県足跡化石研究会），津屋結唱子（子どもの美術教育をサポートする会）

5：15 閉会の挨拶（布谷）

挨拶 重野副館長

(8) 研究最前線

琵琶湖博物館の研究内容を広く公開するために、平成13年度から連続講座を行っている。平成13年度は学芸職員全員が短時間ずつ講演を行うという形であったが、平成14年度は環境史領域の学芸職員が大テーマの下で講演を行った。参加者の総数は、11日間で494人であった。

テーマ「琵琶湖の環境史：私たちの暮らしと環境の成り立ちを探る」

6月2日から8月11日までの日曜日、14:00～16:00

6月2日 里口 保文「地層から昔の環境や出来事をさぐる」

6月9日 八尋 克郎「琵琶湖のまわりの昆虫がたどった歴史」

6月16日 山川千代美「植物化石からわかる琵琶湖周辺の気候変化」

6月23日 中島 経夫「琵琶湖の魚のおいたち」

6月30日 高橋 啓一「琵琶湖のまわりの生き物の生き立ちをさぐる」

7月7日 宮本 真二「自然環境の変遷と人間活動」

7月14日 用田 政晴「原始・古代の琵琶湖と人間」

7月21日 橋本 道範「中世の村探検」(企画展示関連)

7月28日 牧野 久実「中世探検隊のはなし」(企画展示関連)

8月4日 内藤又一郎「なつかしい田んぼの風景」(企画展示関連)

8月11日 矢野 晋吾「村のはなし」(企画展示関連)

(9) 特別研究セミナー

第35回 (2002年7月9日(火)) 神谷敏詩(東北大学理学研究科)・島本昌憲(東北大学総合学術博物館)「カワニナ属(主に *S.libertina*, *S.reniana*)の携帯変異と遺伝的変異について」

第36回 (2003年1月21日(水)) クレア・シャイン(Clair Shine)(国際自然保護連合・環境法専門家)「侵略的外来種に対処するための政策上・制度上の整備:世界の国・地域の事例から(Developing policy and legal tools to address invasive alien species: examples from other countries and regions)」

(10) 研究セミナー

毎月1回第3金曜日に、内部での研究セミナーを開催している。今年度の第1回は4月であったが、発表順番としては前年度の続きであったため、昨年度の年報で公表している。そのため、今年度の年報では、年度の第2回のセミナーにあたる5月から記録する。

第1回(5月17日)

前畑 政善 「日本産ナマズ属魚類3種の繁殖生態」

芳賀 裕樹 「南湖の水草の増加は何をもたらすか？」

戸田 孝 「博物館情報発信の最近の動き」

第2回(6月21日)

矢野 晋吾 「環境管理における小規模沿岸漁業の位置」

高橋 啓一 「300万年前の日本の動物相をタイに訪ねて」

布谷 知夫 「博物館評価をめぐる研究について」

第3回 (6月19日)

中島 経夫 「ワタカは琵琶湖・淀川水系の固有種？」

中藤 容子 「本館に収蔵する琵琶湖の漁獲データについて」

芦谷美奈子 「博物館における”ハンズ・オン”展示へのハンズ・オン手法の導入とその検証について」

第4回 (8月16日)

八尋 克郎 「三重県で新たに発見されたミカワオサムシ個体群の形態」

用田 政晴 「出現期前方こう方墳研究の課題」

楠岡 泰 「変身する繊毛虫*Pelagodileptus trachelioides* の摂餌生態」

第5回 (9月27日)

亀田佳代子 「琵琶湖のカワウの食性解析Part2」

里口 保文 「火山灰の広域対比から見た古琵琶湖形成時期の検討」

栴永 一宏 「溪流性アシナガバエ *Diostracus* 属の分子系統」

第6回 (10月18日)

宮本 真二 「琵琶湖の水位・汀線変動と人間活動」

牧野 久実 「中世なんでも探検隊の活動について」

牧野 厚史 「ローカル・コモنزの崩壊と再生—守山市木浜における内湖再生活動—」

第7回 (11月15日)

山川千代美 「中期更新世後半における伊吹山麓周辺の古植生」

松田 征也 「滋賀県で確認された外来水生生物—魚類・貝類・甲殻類・両生類・爬虫類—」

中井 克樹 「琵琶湖沿岸域の魚類群集の現状～外来魚の優占状況の定量的データ～」

第8回 (12月20日)

Mark J. Grygier 「A Problem in the Wording of the International Code of Zoological Nomenclature, with a Monstrilloid Copepod Example.」

野崎 信宏 「彦根市における降雨特性の変動について」

井戸本純一 「セタシジミ増殖の現状と課題」

第9回 (1月17日)

桑原 雅之 「琵琶湖水系におけるイワナの分布に関する研究について」

草加 伸吾 「現在までに森林伐採でわかってきたこと」

杉谷 博隆 「マザーレイク21計画の理念から見た住民参加型ビオトープづくりの課題と可能性 (マキノ町海津地先における事例から)」

第10回 (2月21日)

西垣 享 「生き物を出発点とした環境学習1～小中学校における環境教育の変遷と課題・博物館での体験学習プログラムの開発について～」

高橋 鉄美 「統計的種道程システムの開発」

大原 健一 「ヒナモロコ *Aphyocypris chinensis* (G.nther. 1868) の遺伝的多様性の評価」

第11回 (3月28日)

森田 光治 「地域の特性を生かした環境学習教材の開発 —淡水微小藻類を用いた生物教材の開発—」

秋山 廣光 「博物館における静止画資料の整理と利用Ⅱ」

(11) 特別研究員の受入れ

- ・高橋鉄美 (日本学術振興会科学技術特別研究員・日本学術振興会特別研究員)

2002年4月1日～2003年3月31日

テーマ: アフリカ産カワスズメ科魚類の系統分類的研究

- ・大原健一 (日本学術振興会特別研究員)

2002年4月1日～2003年3月31日

テーマ: DNA多型を用いたギンプナの進化と多様化に関する研究

- ・相原光人 (北海道大学大学院水産科学研究科)

2002年8月7日～9月11日

テーマ: タンガニイカ湖カワスズメ科魚類の分類学的研究

- ・曹 志新 (中国湖南省森林植物園)

2002年9月～2003年3月

テーマ: 自然林の保全とエコ・ツーリズム

(12) 海外交流活動

1) 研究に関する国際交流

- ・川那部浩哉

2002年9月1日～9月9日 ロシア 国際学会参加

2002年11月18日～11月28日 スペイン 国際学会参加

- ・中島経夫

2002年5月10日～5月11日 中国 研究調査

2002年8月24日～9月1日 イギリス 国際学会参加

- ・高橋啓一

2002年4月28日～5月6日 タイ 研究調査

2002年7月1日～7月15日 インドネシア 研究調査

2002年8月3日～8月15日 インドネシア 研究調査

- ・アンドリュー・ロシター

2002年6月28日～7月15日 アメリカ 研究調査

2002年12月1日～12月24日 南アフリカ 研究調査

2003年1月6日～3月4日 ザンビア 研究調査

- 亀田佳代子

2002年8月10日～8月25日 中国 研究調査

- 梶永一宏

2002年7月1日～7月8日 台湾 研究調査

2002年12月1日～12月21日 ハワイ諸島 研究調査

- 中井克樹

2002年10月5日～10月20日 フランス、ベルギー、ドイツ、オーストリア、オランダ 研究調査

- 楠岡 泰

2002年12月2日～2003年3月25日 イギリス 研究調査

2) 事業に関する国際用務

- 芦谷美奈子

2002年5月8日～5月11日 韓国 展示指導

- 中井克樹

2002年10月25日～11月1日 アメリカ 企画展示準備

2 交流・サービス活動

博物館の研究や資料収集などの成果をできるだけ多くの利用者に伝え、博物館をうまく有効に利用してもらうことで、博物館と利用者との双方向の情報交換と交流を行う場をつくり上げていくため、自然観察会や博物館入門セミナー、あるいは学校教育との連携のための教育研修の受入などさまざまな活動を実施した。

1. 利用者主体の事業

(1) フィールドレポーター

フィールドレポーターとは、県内を中心に、身近な自然や生き物、あるいは地域の情報などを定期的に報告してもらい、得られた情報を博物館の資料として保存し、展示や交流の中で生かしていくとともに、情報を通して博物館とレポーター同士をつなぐ制度である。この制度は1997年度からスタートし、2002年度は136名の登録者があった。

活動としては、博物館とフィールドレポーターが相談してテーマを決めて年数回行うアンケート型調査と、身近な情報を自由な形で随時報告してもらう自由型調査を実施している。また、アンケート型調査の結果を受けて交流会を開催したり、調査に先駆けての勉強会や、合同調査会なども適宜開催している。

2002年度は、2003年度に開催される企画展示「外来生物 つれてこられた生き物たち」への参加を目指して、「タンポポを調べよう」、「ため池を調べよう」、「アオマツムシは鳴いていませんか」という3つのテーマでアンケート型調査を行った。さらに、2001年度に引き続き長め調査として「ヘチマクラブ」も実施した。これらの調査で得られた情報は、「フィールドレポーター便り」としてまとめられ、フィールドレポーター全員に報告された。2002年度は、各調査の期間が接近していたことに加え、年末から年度末に向けて行事が重なったため、調査の報告会である交流会をほとんど開催することができなかった。ただ、ヘチマクラブについては8月に五個荘町に於いて、町民の皆さんも参加していただく形で交流会を盛大に開催することができた。これ以外の行事として、5月と7月に第1回および第2回調査の勉強会として、それぞれ「タンポポ調査会」、「ため池調査会」を実施した。さらには、2003年度に予定している伊吹山文化資料館のボランティアとの交流会の下見をかねて、スタッフの有志を募って伊吹山文化資料館下見会を実施した。これについては、2003年度8月にフィールドレポーター全体に呼びかけて交流会を開催する予定である。ほかに、10月には兵庫県三田市にある兵庫県立人と自然の博物館で開催されたボランティアメッセに参加し、他館の多くのボランティアグループとの交流を図ることができた。また、3月に当館で開催された研究発表会「使える博物館を目指して」において、フィールドレポーターの代表として津田さんからフィールドレポーター活動の紹介を行っていただいた。

また、自由型調査で報告された内容は、「フィールドレポーター掲示板」としてまとめられ報告されている。2002年度からは、フィールドレポーターの方に直接取材して記事を書いていただく学芸員紹介シリーズを連載している。2002年度は、7号の掲示板が発行された。これらの活動に関する作業

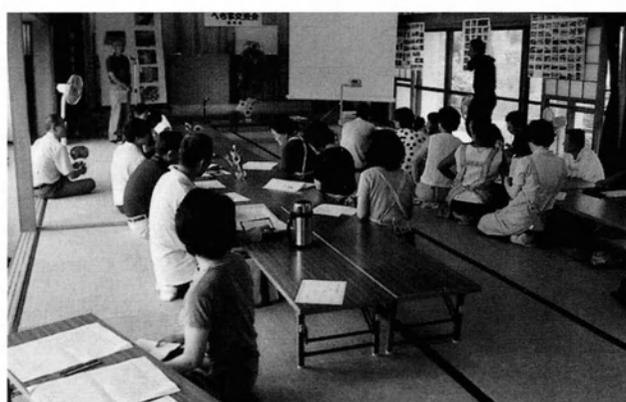
等については、フィールドレポータースタッフと呼ばれる有志の方々によって行われた。

フィールドレポーターの調査内容等一覧（2002年度）

調査内容	実施月	報告数（件）
1) タンポポを調べよう	4～6	340
2) ため池を調べよう	7～9	142
3) アオマツムシは鳴いていませんか	9～10	133
4) ヘチマクラブ	4～12	随時
5) 自由型調査(フィールドレポーター掲示板)	通年	131

フィールドレポーターの活動内容等一覧（2002年度）

活動内容	実施月	回数
1) フィールドレポーター便りの発行		4
2) フィールドレポーター掲示板の発行	4・6・8・9・12・1・3	7
3) フィールドレポーター交流会	8	1
4) タンポポ調査会	5	1
5) ため池調査会	7	1
6) 伊吹山文化資料館下見会	1	1
7) ボランティアメッセ	10	1
8) 琵琶湖博物館研究発表会	3	1



フィールドレポーター交流会

(2) 「はしかけ」制度の実施状況

はしかけ制度は、琵琶湖博物館が活発に利用されることを期待して2000年度（平成12年度）に運用開始された。2002年度（平成14年度）は最終登録者数120名（2003年2月時点）で、9つのグループが活動をおこなった。

グループの名称と活動の概要（五十音順）

○ 咽頭歯倶楽部（担当：中島）

うおの会（後述）のサブグループとして2003年1月末に発足。コイ科魚類の咽頭歯を見分ける能力を磨き、原生・化石のコイ科魚類の進化の道筋を探る。初回講座を開いた後、構成員により

活動計画を策定中。

○ うおの会（担当：中島）

2000年より滋賀県の琵琶湖集水域における魚類の分布調査を実施している研究グループ。

○ 里山の会（担当：長崎）

当館の交流事業「里山体験教室」卒業生を中心に2001年より活動開始。活動を通じて里山に対する理解を深めるとともに、体験教室の運営補助を通じて、里山の魅力を伝える活動もおこなっている。

○ 植物の会（担当：布谷）

植物の観察会を通じ、植物の愛好家を広めることを目的とする会。年間4回のペースで観察会をおこなうほか、博物館実習室で講座なども開催している。

○ 体験学習の日グループ（担当：西垣・森田・芳賀）

当館の交流事業「体験学習の日（毎月第2・4土曜日開催）」の運営を職員とともにおこなっている。年度後半からは新しいプログラムの開発にも取り組んでいる。

○ たんさいぼうの会（担当：大塚）

2002年5月に珪藻の会として出発し、対象範囲の拡大を狙って「たんさいぼう（単細胞）の会」と改名した。珪藻の研究を中心に単細胞微小生物のハイ・アマチュア研究者の育成を目指す。年数回の調査旅行と標本の整理、顕微鏡写真の撮影などをおこなっている。メンバーの中の数名は学会発表もおこなった。

○ 田んぼの生き物調査グループ（担当：楠岡、M. J. グライガー）

フィールドレポーター制度でおこなった田んぼの生き物調査に興味を持った有志が結成し、担当学芸員とともに田んぼのえび類を中心に分布や生態などの学術調査をおこなっている。2002年度には国際誌に学術論文が掲載された。

○ 中世なんでも探検隊（担当：橋本）

2002年度（平成14年度）企画展「中世のむら」とタイアップして結成。1年半の研修活動を経て、同企画展では会場で演示や解説なども行った。企画展終了後は新たな活動の方向を模索中。

○ ほねほねクラブ（担当：高橋）

2002年度（平成14年度）に発足。骨格標本の作製、化石のクリーニング活動に取り組んでいる。

2002年度は通常の活動のほか、兵庫県立人と自然の博物館の記念イベント「ボランティアメッセ」（兵庫県三田市）に参加し、はしかけの活動をアピールするとともに、来場者や他館のボランティアグループと交流を行い、見識を広めた。また、2003年2月の琵琶湖博物館シンポジウム「使える博物館を目指して」では、日ごろの活動をもとに話題提供や議論への参加もおこなった。（p8参照）

2. 一般利用者へのサービス事業

(1) 観察会・見学会等

平成14年度は、博物館内や県内とその周辺で行う〈博物館観察会〉21件、博物館の舞台裏紹介など、〈博物館を見学する会〉4件の合計25件の事業を企画した。本年度は雨天等による行事の中止はなかった。各事業のタイトルや参加者数については別表参照。

博物館が実施した観察会に対する参加者の評判はおおむねよかったが、テーマ・時期により応募者の人数に違いがでた。また、本年度はギャラリー展示との関連で今森洋輔さんを講師とするイラストレーション教室を11回行った。

	日時	種類	タイトル	参加数 (名)
1	4月13日	観察会	春の植物観察会	19
2	5月2日	観察会	中世のすり鉢をつくろう	15
3	5月3日	観察会	中世のすり鉢をつくろう	16
4	5月5日	観察会	ムラのヨシをみてみよう	12
5	5月25日	観察会	姉川のヤナを見に行こう	15
6	7月19日	観察会	夏の植物観察会	2
7	7月26日	観察会	中世の機織り体験	16
8	7月27日	観察会	漁船に乗ってエリの漁を見に行こう	43
9	8月16日	観察会	湖辺で水草を調べよう	15
10	8月17日	観察会	水辺の貝を調べてみよう	30
11	8月24日	観察会	ミドリセンチコガネを探しに行こう	6
12	9月15日	観察会	湖の周りの巨木を見に行こう	9
13	9月20日	観察会	地域の歴史の調べ方まとめ方	1
14	9月28日	観察会	野洲川の化石	55
15	10月5日	観察会	中世の山城を見に行こう	7
16	10月12日	観察会	秋の植物観察会	12
17	10月26日	観察会	秋の里山を歩こう	13
18	11月16日	観察会	ビワマスの産卵を調べよう	18
19	1月18日	観察会	冬の植物観察会	8
20	2月15日	観察会	近江の酒造りにふれてみよう	21
21	3月20日	観察会	琵琶湖の漁業を体験しよう	46
1	4月28日	観察会	「湖の十字路－野洲川平野の弥生・古墳時代－」展示解説	－
2	5月2日	観察会	「湖の十字路－野洲川平野の弥生・古墳時代－」展示解説	－
3	8月2日	観察会	「中世のむら探検－近江の暮らしのルーツを求めて－」 解説ツアー	－
4	3月1日	見学会	水族展示の舞台裏	50

	日時	種類	タイトル	参加数 (名)
1	5月24日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(小学生の部)	23
2	5月31日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(小学生の部)	21
3	7月12日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	25
4	7月26日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(小学生の部)	18
5	8月3日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(小学生の部)	13
6	8月9日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	23
7	10月11日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	23
8	11月8日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	14
9	12月13日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	13
10	2月7日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	17
11	3月19日	ギャラリー展	今森洋輔イラストレーション教室(一般の部)	14

(2) 博物館講座

博物館講座は、学芸員が専門テーマについてわかりやすく解説する博物館講座と、特定分野について専門的知識や技術を身につけたい方のための入門講座とにわけている。後者は教員やアマチュアの研究者をも対象として実施している。平成14年度は博物館講座と入門講座が行われた。博物館講座には多くの参加者が集まったが、入門講座には募集人員が集まらず、中止のものが1件でた。夏休み中で他の行事に埋没してしまったことや、タイトルのまずさが原因と考えられる。平成15年度は入門講座についてもシリーズ化し、広報にも工夫を加えていきたいと考えている。

	日時	種類	タイトル	参加数 (名)
1	8月2日	入門講座	地学の災害小規模実験	0
2	8月6日	入門講座	回転実験室で水槽実験を！	7
3	10月19日	入門講座	展示室を調べよう	1
4	12月7日	入門講座	冬の水鳥を観察しよう	6
5	1月25日	入門講座	琵琶湖の魚はどうなっているか？	15
6	2月1日	入門講座	琵琶湖の魚はどうなっているか？	15
7	2月8日	入門講座	琵琶湖の魚はどうなっているか？	13

(3) 体験教室

田んぼ体験教室

博物館の生活実験工房および隣接する水田を利用した、1年間（全10回）の田んぼ体験教室を開催した。農作業の体験ばかりでなく、周辺の自然観察、田んぼの多面的な機能、そして冬には農家の仕事や生活も体験できるようプログラムを組んだ。

開催日と内容（登録者9家族33名）

回	開催日	内 容
第1回	5月12日（日）	田植え
第2回	6月9日（日）	水田の生き物
第3回	7月21日（日）	虫の話
第4回	8月18日（日）	かかし作り
第5回	9月29日（日）	稲刈り
第6回	10月20日（日）	脱 穀
第7回	11月17日（日）	縄緬い
第8回	12月15日（日）	もちつき
第9回	1月19日（日）	わら細工
第10回	2月16日（日）	まとめ、試食



わら細工



かかし作り

里山体験教室

里山の重要性を見直すため、里山の手入れや暮らしを実際の活動を通じて体験する里山体験教室を下記により開催した。四季を通じて同じ里山で、計4回の手入れ作業とともに、山菜の試食会や昆虫、キノコの観察など五感を十分に使った体験活動を行った。なお、開催地は日野町大字上駒月である。

開催日と内容（登録者17家族50名）

回	開催日	内 容
1	4月20日（土）	里山の山菜
2	7月20日（土）	里山の虫たち
3	10月19日（土）	里山のキノコ
4	12月7日（土）	里山の暮らし



わら細工



里山のくらし

(4) 夏休み相談室・自由研究講座

子供たちの自然や地域に対する好奇心と自主的な探求心を養うために、研究テーマの見つけ方から集めた標本の同定まで、夏休みの自由研究を支援を目的として、夏休み自由研究講座および夏休み相談室を開催した。2002年度は、夏休み自由研究講座は7月28日、夏休み相談室は8月24日、25日の両日実施した。なお、夏休み相談室利用者が大幅に増えたのは、自由研究講座等での広報がゆきとどいたためであると考えられる。

自由研究講座 (7月28日)		夏休み相談室 (8月24、25日)	
コース	参加人数	分野	質問件数
昆虫コース	37	環境	7
		地学	11
植物コース	24	昆虫	7
		プランクトン	2
化石コース	48	魚貝類	12
		植物	11
合計	109	その他の生き物	3
		合計	53

(5) 質問コーナー・フロアトーク

当館では、開館当初から“学芸員の顔が見える博物館”づくりをめざしている。その一環として情報センターの図書室の一角に「質問コーナー」を設置している。開館日には、学芸職員が日替わりでここに常駐し、一般の方々からの質問に回答している。回答可能な質問には担当学芸職員がその場で答え、専門的な内容を含む質問については、それぞれの専門学芸員が回答することになっている。また、館長および副館長も、学芸職員にまじって月一回程度、質問コーナーを担当している。受け付けた質問の内訳は別表の通り(表番号)。

なお、当コーナーでは、学芸職員が来館者に展示解説を行う「フロアトーク」を1日1回実施している。「フロアトーク」を行うのは、当日の質問コーナーを担当する学芸職員である。なお、本年度から学校団体を対象とした「学芸員トーク」を新たに始めた。

当コーナーでは、図書室入り口の壁に、質問コーナー担当学芸職員の予定を掲示している。来館者に担当学芸員の専門分野と氏名を示すことにより、できるかぎり専門分野の担当者がある日に質問に来てもらえるよう配慮したものである。この担当学芸職員の予定表は、ホームページにも掲載しており、インターネットで閲覧できるようになっている。

質問コーナーにおける質問内容集計 (2002年度)

総質問数	840件				
質問内容	一般的な質問（総合案内で回答できるようなもの）				296件
	専門的な質問				544件
対 応	担当学芸職員が対応				632件
	専門学芸職員（または外部）に依頼				208件
専門的な質問の内容の内訳					
生 物	動 物	魚 類	238件	プランクトン	19件
		その他の水生動物	89件	動物一般	74件
	植 物	陸上植物			30件
		水生植物			19件
地 学	92件		図 書	37件	
物 理	2件		琵琶湖	55件	
歴 史	31件		環 境	44件	
博 物 館	48件		その他の質問		62件

3. 学校連携事業および体験学習

(1) 教職員研修および視察

平成14年度に行われた教職員等研修・視察は、合計84件（参加者：1306人）であった。こうした研修では、博物館の基本理念や展示概要のほか、総合的な学習などにおける学校の博物館の利活用についての解説も行った。また、実習室等を使って展示に関わる体験実習も行った。

月 日	研 修 会 の 内 容	参加者数(人)
4月12日	産業雇用安定センター私の仕事館運営準備推進本部	2
5月2日	エコ草津体験隊事業学校担当者研修会	13
5月9日	4市交流事業協議会視察	10
5月16日	理科教育研究会総会および研修会	60
5月23日	日本グランドワーク協会	2
5月30日	北九州市立自然史博物館視察	3
6月5日	県中学理科部会環境委員会	7
6月6日	福岡県総務部国立博物館対策室視察	3
6月14日	近畿工業高校総会 守山高校教員研修	60 8
6月19日	守山高校教員研修	8
6月25日	坂田郡教員研修	5
7月2日	草津市養護学校教員研修	12
7月23日	子ども環境特派員事業打ち合わせ	3
7月30日	尼崎小学校理科研究会	53
7月31日	自然調査ゼミナール教員練習会	6
8月1日	4市子ども交流事業	60
8月2日	五條市理科部会	10
8月6日	理科教育講座	18
8月7日	自然調査ゼミナール研修会	14
8月12日	草津市内小中学校新任教職員研修	14
8月21日	西宮市小学校理科部会	50
8月25日	川崎市社会科研究部会研修	51
9月10日	教職経験者研修Ⅰ	50
9月12日	教職経験者研修Ⅰ	44
9月13日	全国農業高校校長協会総会研究協議会 内地留学生視察対応	40 1
9月24日	教職経験者研修Ⅰ	50
9月26日	教職経験者研修Ⅰ	50
10月4日	中国友好使節団国際交流事業	21
10月6日	アクアワールド茨城県大洗水族館	1
11月4日	大阪市自然史博物館	4
11月28日	近畿教員研修	7
12月5日	理科教育研究会生物部会	12
12月11日	滋賀県環境学習フェア教員研修	43
3月15日	オーシャンシップ財団視察	3
3月16日	文部科学省科学技術研究所視察	1
3月25日	広領域教育研究会エネルギー・環境教育討論会	20
3月27日	群馬県立博物館視察 浦安市立民俗博物館視察	2 2
3月11日	玉名市歴史博物館	4
3月22日	兵庫県播磨町郷土資料館	1
3月25日	三重県度会郡大内山村教育委員会	12
合 計		840

海外の視察		
4月10日	旅順博物館	4
4月16日	JICA 淡水魚養殖コース	10
4月19日	韓国国立中央博物館	5
4月19日	中国水産科学院	3
5月14日	湖南省観光プロモーション訪日団	32
5月24日	JICA 文化財修復整備技術コース	12
6月1日	全国市町村国際文化研修所	94
6月5日	UNEP-IETC 世界環境デー関連事業	1
6月20日	JICA 農業・農村における持続的な水資源開発コース	23
6月21日	JICA 社会資本関連影響評価コース	11
6月26日	大阪大学留学生センター	30
7月11日	JICA 淡水魚養殖コース	4
7月12日	韓国海洋科学院	5
7月22日	中国湖南省湘潭市中学生使節団	22
7月27日	JICA 国別特設フィリピン環境管理コース	12
7月30日	滋賀県教育委員会 国際青年育成交流事業	35
8月12日	米国グランド・ラピッド公立博物館	2
9月18日	JICA 水質環境管理コース	12
9月24日	JICA 水環境を主題とする環境教育コース	9
10月2日	JICA 博物館技術コース	10
10月3日	JICA 博物館技術コース	10
10月3日	韓国中央日報	5
10月24日	JICA 衛生・環境分析技術者コース	7
10月24日	イギリス自治体幹部職員	12
10月28日	ESCAP エクスカーション	
10月30日	韓国京畿開発研究院	1
11月16日	JICA 生物多様性コース	11
11月19日	JICA マラウイ天然資源・環境省次官	2
11月19日	中国科学院南京地理湖沼研究所	3
11月22日	ドイツバイエルン州首相府国際部長	3
11月28日	JICA 生活排水対策コース	11
12月1日	湖南省観光視察団	8
1月26日	韓国観光大使	10
1月30日	JICA 博物館特別コース（東ティモール）	7
2月26日	中国湖南省研修生（栗東市役所）	4
3月7日	ミシガン州立大学日本センター	7
3月16日	世界子ども水フォーラム参加者（マラウイ・中国）	9
3月18日	第3回世界水フォーラム参加者	10
3月18日	第3回世界水フォーラムの派遣団	2
3月20日	韓国釜山市役所	2
3月20日	湖南省人民代表大会環境交流団	10
3月23日	世界水フォーラム公式ツアー（午前の部）	22
3月23日	世界水フォーラム公式ツアー（午前の部）	23
	小 計	466
	合 計	1,306



理科教育講座

(2) 博物館体験学習

博物館と学校とが連携を保ちながら活動を進めていくことができるよう、学校のカリキュラムに沿った社会見学への対応のほか、各種体験学習、エコ草津、フローティングスクール等の受け入れを行った。特に、体験学習として下記のような活動を実習室、セミナー室、生活実験工房等を利用して行った。

校種	主な活動内容
小学校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について）、ヨシ笛、化石のレプリカ、水質検査、プランクトン採集と観察、昔のくらし体験（石臼、脱穀、手押しポンプ）、わら細工、魚の採集（投網）と解剖、水生昆虫の観察、野外観察（ヨシ群落）、昔の水利用学習、野外植物観察、漁具、貝の観察、水草の観察、水鳥の観察、ナマズの観察、魚の歯、鱗、卵、習性の観察、火山灰の観察、大地のつくり、琵琶湖の魚料理研究、質問対応、バックヤード見学
中学校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物）、水質検査、プランクトンの観察と採集、化石のレプリカ、魚の採集（投網・釣り）と解剖、ヨシ笛、わら細工、水の汚れの測定、水鳥の観察、水生昆虫の観察、草木染め、バックヤード見学
高等学校	講義（琵琶湖と環境、学芸員の仕事、丸子船の研究）、プランクトンの採集と観察、魚の採集と解剖、水質調査、珪藻化石の観察、生体観察池での陸水学基礎学習、湖岸調査（地形、植生他）展示利用学習、課題研究、バックヤード見学

校種	県内		県外		合計	
	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数
小学校	45	2,925	27	1,676	72	4,602名
中学校	28	2,291	31	2,790	59	5,081名
高等学校	14	574	7	573	21	1,147名
養聾盲学校	1	13	0	0	1	13名
合計	88	5,803	65	5,039	153	10,842名



プランクトン観察

(3) 「体験学習の日」の活動

学校週5日制に対応する事業として、毎月第2・4の土曜日に当館を訪れる小・中学生を対象に、自然・環境・歴史、民俗への興味や関心を高める活動を行った。

午後1時半～3時まで。大変好評で、年間712名の参加者をみた。

月 日	テ ー マ	参加数 (名)
4月13日 4月27日	春を感じてみよう "	2626
5月11日 5月25日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう "	2636
6月8日 6月22日	投網体験してみよう "	3949
8月10日 8月24日	中世の遊び "	2116
9月14日 9月28日	草木染め "	3133
10月12日 10月26日	紙漉をしよう "	2222
11月9日 11月23日	あしなかを作ろう "	1538
12月14日	鏡もちを作ろう	68
1月11日 1月25日	化石に親しもう "	5753
2月8日 2月22日	ワラ細工を楽しもう "	2529
3月8日 3月22日	ヨシ笛を作ろう "	2555
参加人数合計		712



春の草花でしおりをつくろう

(4) 家族を対象とした環境学習プログラム「エコスクラム 水の旅」の活動

県民の環境保全意識の高揚を図り、家庭における実践活動へとつなげていくため、家庭の日に関連させて、環境セミナー船を利用した体験型学習プログラムを実施し、家庭そろってのエコライフにつなげる活動を行った。

月 日	テーマ	参加数(名)
7月21日	ミクロな生き物探検 その1	5
8月18日	水辺の貝を調べてみよう	5
9月15日	琵琶湖の魚は何を食べているか	0
10月20日	ミクロな生き物探検 その2	4
参加人数合計		14

4. 展示交流事業

(1) 水族展示交流活動

水族展示では、給餌を行う際や清掃を行うおりに、いくつかの水槽に於いて来館者に直接展示生物の解説を行う水族展示交流を行っている。水族展示交流は、本館最大の水槽であるトンネル水槽、鳥であるカイツブリを展示している水辺の鳥たちの水槽、およびチョウザメやガーパイクなど体制の古い魚類を展示している古代魚の水槽において行った。トンネル水槽では、水族飼育員が潜水し、展示交流員と水中マイクで会話をしながら解説や簡単な実験を行った。水辺の鳥たちの水槽では、実際にカイツブリが潜水し、餌を探したり捕まえたりする様子を観察していただきながら、カイツブリの体の仕組みや生態について説明を行った。古代魚の水槽では、チョウザメやガーパイク、ヘラチョウザメにそれぞれ餌を与え、餌の違いやそれに伴う食べ方の違いなどを解説した。

水族展示交流の交流内容 (2002年度)

場 所	回数	参加延べ数(名)
トンネル水槽	12	610
水辺の鳥たち	12	328
古代魚の水槽	15	830

(2) 「展示交流員と話そう」

展示交流員は、琵琶湖博物館の案内だけではなく、展示を通して来館者と交流し、来館者に身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっている。展示交流員にとって普段の交流は欠かせないものであるが、平成14年度は更に交流業務の充実をはかるために『展示交流員と話そう』を実施した。

本事業を実施するに際しては、展示交流員が各自でテーマを設定し、そのバックグラウンドをつくるために、担当学芸員と二人三脚で準備を進めた。また、普段の交流の中から『きっかけ』をつかんで、できるだけ自然なスタイルで臨めるよう努力した。各自のテーマに沿って、展示だけの交流ではなく、来館者の興味を引き出すために、化石を触ってもらう・自作の資料を見ってもらう等、五感をフルに活用できるよう工夫した。本事業の詳細は以下のとおりである。

実施期間・回数：平成14年12月17日（火）～平成15年3月23日（日）

（日曜日、祝・祭日は除く） 合計244回

実施人数：展示交流員 34名

『展示交流員と話そう』実施内容一覧（2002年度）

展示室	名 前	実施テーマ	実施場所
A	芦田 弘美	伊吹山に南の海の化石をさがしに	古生代の化石
	中澤真由美	咽頭歯	魚類化石の研究
	犬塚 菊美	咽頭歯ってな～に？	魚類化石の研究
	杉本 和子	水晶について	鉱物と化石のテーブル
	石川 寛子	古琵琶湖層と信楽焼	フィールドでの調査
B	岩見 勉	丸子船	輸送の主役 丸子船
	大川 篤子	琵琶湖疎水をたどる	治水への取り組み
	澤 淳子	明治29年の大洪水	治水への取り組み
	森永紗江子	漁具－魚をつかまえる道具をさわりながらお話ししましょう－	漁師のくらし
	清水 聡子	近世の湖上交通	輸送の主役 丸子船
	山内 真理	文化財 保存科学	湖辺の縄文人のくらし
	山元 真里	粟津貝塚から見る縄文人の食生活	湖辺の縄文人のくらし
C	荒井 紀子	ホタルのいる水辺を検証する	ホタルと人と環境と
	奥村 恵子	私の好きな”かくれ里”菅浦	空からみた琵琶湖
	福井 明美	展示交流の可能性－水草展示を題材として－	水草の世界
	松岡 治子	植物プランクトン（アオコ）	生き物コレクション
	今泉 美保	ホタルと人と環境と	ホタルと人と環境と
	北川喜美榮	富江さんのお風呂	農村のくらし
	近藤 摩子	昔（昭和30年代）の暮らし	農村のくらし

C	池畑慎吾	思い出クイズ	空からみた琵琶湖
	中村とく子	宇曽川ダム	空からみた琵琶湖
	井出範子	水をはぐくむ森林	水をはぐくむ森林
	岡本晴行	富江家住宅	農村の暮らし
	折中康子	琵琶湖のプランクトンを見てみよう	生き物コレクション
	橋本富栄	プランクトンを見てみよう	ミクロの世界
	愛須美由起	おいしいお水を作るのはだれ？	水をはぐくむ森林
水族	三輪尚子	水の中の小さな生き物（メダカ）	琵琶湖の岸辺の生き物
	大林博子	チョウザメ	古代魚
	寺井さやか	トンネル水槽Q&A	岩場から沖合にすむ魚たち
	山本孝子	オシドリ夫婦って本当？	水辺の鳥
	吉田治美	チョウザメとガー	古代魚
	釜本敦子	カムルチー	外国から来た魚たち
	寺田 歩	オオサンショウウオを見てみよう	川の中流の生き物
ディスカバ	北田昌子	『三匹のなまずーなまずの種類とアオコー』	人形劇場

5. 博物館実習（期間：2002年8月1日（木）～8月8日（木）；ただし8月4日は休日）

国内11大学29名の学生を対象に、琵琶湖博物館の基本理念および活動方針と、それにもとづく交流サービス、情報、資料整備、展示等の活動について講義・実習を行った。特に、交流の場としての博物館活動を理解してもらうために、来館者との交流の担い手となる展示交流員体験や、利用者とともに常に成長・発展するための博物館評価としての来館者反応調査とその分析・発表も行った。博物館活動の基本的考え方の理解を確認し、学生と学芸員との意見交換を行うため、最終日にはディスカバリーボックスの企画とその成果発表会を開催した。実習の日程および内容、参加者内訳は、下に示したとおりである。

なお、7日間以上の実習が必要な学生6名に対しては、実習期間を延長して10日間の実習を行った。

実習の日程および内容

月日（曜日）	実習内容（午前）	実習内容（午後）
8月1日（木）	<ul style="list-style-type: none"> 全体オリエンテーション 博物館とはなにか？ 	<ul style="list-style-type: none"> 博物館の設置理念と概要 館内・屋外展示案内
8月2日（金）	<ul style="list-style-type: none"> 展示の概要説明 A・B展示室見学 	<ul style="list-style-type: none"> C展示室見学 ディスカバリールーム見学 ディスカバリーボックス製作ガイダンス
8月3日（土）	<ul style="list-style-type: none"> 来館者反応調査 	<ul style="list-style-type: none"> 来館者反応調査結果まとめ、発表
8月4日（日）	<ul style="list-style-type: none"> 休日 	
8月5日（月）	<ul style="list-style-type: none"> 展示交流員体験 	<ul style="list-style-type: none"> 展示交流員体験
8月6日（火）	<ul style="list-style-type: none"> 博物館資料概要説明 動物資料について 植物資料について 	<ul style="list-style-type: none"> 民族資料について 植物資料について
8月7日（水）	<ul style="list-style-type: none"> 交流活動の概要 	<ul style="list-style-type: none"> 博物館の情報システム 博物館の画像資料 図書資料について
8月8日（木）	<ul style="list-style-type: none"> ディスカバリーボックス制作発表準備 	<ul style="list-style-type: none"> ディスカバリーボックス制作発表会 修了式

参加者内訳

所 属	人 数	所 属	人 数
滋賀県立大学	5	大阪女子大学	1
成安造形大学	5	九州大学	1
京都橘女子大学	5	高知大学	1
京都教育大学	5	福山大学	1
追手門学院大学	2	京都文教大学	1
北里大学	2		
合 計			29

6. 来館者との交流会

来館者の動向を把握するために、ゴールデンウィーク期間中や、夏休み期間中（7月20日(土)～8月31日(土)）は月曜日を休まず開館し、特別企画として「夏のひとつときを楽しもう」をテーマにふれあい体験コンサートや以下の事業を企画・実施した。

1) 竹鼓コンサート

日時：4月29日(月・祝日) 午後1時より

会場：アトリウム

出演者：竹鼓 ながのひろゆき、尺八 相馬倫

2) ふれあい体験コンサート

日時：夏休み期間中毎週月曜日 午後2時より

会場：アトリウム

① 7月22日(月)

「琵琶を聞こう」 出演：柴 礼敏

② 7月29日(月)

「アカペラを聴こう」 出演：緒形光雄、高橋侑子、荻野美智子

③ 8月5日(月)

「ヨシ笛コンサート」 出演：菊井亨、近藤ゆみ子

④ 8月12日(月)

「ファゴットってなあに??」

出演：光永武夫、中野陽一郎、山下奈緒、田吉佑久子、松野菜月

⑤ 8月19日(月)

一緒に吹こう「楽しいハーモニカ」

出演：姉川敏彦と淡海ハーモニカクラブドラゴン7

⑥ 8月26日(月)

日本の音色「箏」を聴く 出演：麻植美弥子、理恵子、彩記子、市川節子

3) ビデオ上映会 「よみがえれ日本の淡水魚！魚たちにせまる危機」

日時：夏休み期間中毎週月曜日 午前10時30分より

会場：ホール

4) 「中世のむら探検」の学芸員による特別解説ツアー

日時：夏休み期間中毎週月曜日 午前11時より

会場：企画展示室

5) 水族飼育員と話そう

日時：夏休み期間中の毎週月曜日 午後1時30分より

会場：水族展示コーナー

6) 音楽と写真の展覧会 「水にはぐくまれて」～音で描く湖の情景～

日時：8月11日(日) 午後1時30分より

会場：大ホール

出演：長谷川有機子、谷角慶子、長谷川羽衣子

3 情報活動

琵琶湖博物館は、コンピュータ技術を活用し、情報拠点として機能できる基本情報システムの完成をめざしている。来館者向け閲覧用図書の整備や映像情報のデジタル化と研究支援を図り、地図情報や文字情報とを合わせての検索や利用ができるよう努めた。また、通信網を通じて博物館利用者や類似施設とのネットワーク化を進めた。

(1) 館内の情報センター(図書室・情報利用室)

図書室と情報利用室を来館者が自由に利用できるように整備している。両室は隣接させて互いに往来できるように設置し、かつ利用案内カウンターを共通にし、更に学芸職員による質問コーナーを設け利用者の有機的な学習の場としている。

1) 図書室

単行本約9,000冊、および雑誌約72タイトルを開架式で閲覧できるようにした。なお来館者の要望に応じて、閉架式資料も利用できるようにしている。また、コピーサービスを行い、利用の便宜を図っている。

2) 情報利用室

情報端末を利用者自身が操作することにより、常設展示室の体験ソフトのほか、約200タイトル以上のビデオライブラリーや博物館の案内を利用できるようにした。なおシステムは、動画情報、静止画情報、地図情報、文字情報と多種にわたる情報をデジタル化して一元的管理を行うことにより、利用者の側からは、メディアの違いをこえて、同一端末、同一画面からの検索や利用が可能となるようなシステムになっている。

(2) 通信網を利用した館外サービス

来館者や遠隔地の人からの情報の受信や、博物館からの発信、つまり双方向の情報交換を充実するために、次の3つのシステムを運用している。

1) ファックス・サービス

各家庭のファックスから電話回線で接続して操作することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報を受信することができる。2002年度のアクセス件数は下表のとおりであった。

ファックス情報提供サービスへのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総アクセス数	50	30	12	28	63	14	15	16	5	9	34	27
目次アクセス数	17	18	7	15	19	6	8	7	1	4	15	9

総アクセス数：サーバから情報が取り出された件数

目次アクセス数：「総アクセス数」のうち、目次ページへのアクセス件数（通常、目次ページで目的とする情報の所在を確認した後、改めてサーバに接続してその情報を取り出す。）

2) ホームページ

インターネットを經由して博物館のページに接続することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報を受信したり、博物館資料の検索を行ったりすることができる。また、インターネット・メールで専門的な内容についての質問を受け付けている。2002年度のアクセス件数は下表のとおりであった。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総ヒット数	551,997	665,315	647,029	761,959	859,438	643,430	660,194	552,419	470,360	711,103	749,485	658,502
ページヒット数	154,392	182,979	178,224	204,539	227,314	171,637	185,055	152,590	132,794	208,404	214,666	181,124
連続アクセス	26,368	30,801	31,380	37,301	34,033	30,938	31,037	27,857	21,600	26,016	25,778	25,190
表紙アクセス	7,893	9,314	8,707	10,338	11,117	9,444	9,364	8,002	6,939	9,253	9,840	9,221

総ヒット数：サーバに対する全ての種類のデータ要求の総数（但し、博物館内部からの要求は除外）各ページの定義ファイルはもちろん、ページを構成する画像ファイルの要求も含まれる

ページヒット数：「総ヒット数」のうち、各ページの定義ファイルに対するアクセスの件数

連続アクセス：同一利用者が概ね1時間以内に再度アクセスしたと思われるものは合わせて1件と数えた場合のアクセス件数（博物館内部からのアクセスは除外）

表紙アクセス：「連続アクセス」のうち、ウェルカムページ（表紙ページ）を經由したアクセスの件数（「表紙から入った」と「表紙へ戻った」との合計）

インターネットページ（動的サーバ）へのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
セッション数	194	320	269	248	303	253	352	248	192	468	354	229
絞込検索回数	280	455	350	472	449	318	797	454	296	926	667	570
データ閲覧件数	728	1,203	807	1,007	870	719	2,385	1,719	3,039	3,577	2,175	1,127

セッション：サーバ側が絞込検索を実現するために認識している「同一ユーザによる連続した」アクセスの集合

※博物館内部からのアクセスは計数していない。

【インターネットページで案内している宛先へのメール受付状況】

全部で322通のメールがあり、情報センター担当者またはメール内容に応じた学芸職員が回答した。

メールの内容は以下のようなものであった。

内 容	件数
専門的内容を含む質問など	150
施設利用・行事についての問い合わせ	34
リンク許可依頼・サイト登録依頼など	24
館全体に関する情報提供や連絡など	21
館の運営についての意見・感想・問い合わせ	19
印刷物・出版物についての問い合わせ	16
視察・調査・撮影などの依頼や問い合わせ	16
職員個人あてのメール	15
画像使用の許可依頼など	13
採用についての問い合わせ	10
ホームページ内容についての意見・感想など	4
合 計	322

*膨大な数の広告メール、ウィルスメールは除外した。

*一つの質問で継続したやりとりがある場合、原則1件と数えた。

(3) 電子交流システム (LBMNET)

各家庭のパソコンを電話回線を通じて博物館のシステムに接続することにより、博物館への質問や身のまわりのできごとに関する報告を書き込んだり、他の参加者の質問などに対応して議論したりすることができる。1999年より旧来型のパソコン通信からインターネットを経由して接続できるシステムへと移行した。

(4) 情報システムの更新

琵琶湖博物館情報システムを、2002年10月に部分更新した。ファイヤウォール、ウイルス対策サーバなどの設置によりセキュリティを強化することで、博物館がもつ電子情報を守るとともに、インターネット犯罪の蔓延に加担しないシステムへと改良した。また、インターネットとの接続回線をISDNから光ファイバに切り替え、館外への情報発信機能を強化した。

(5) 収藏品データベースの整備

琵琶湖博物館では、図書、文献、刊行物、地質標本、生物標本、歴史資料、民俗資料、画像情報などのデータベースを整備し、資料情報を整理・保管するとともに、その情報を利用者に提供してきた。2002年度にはこのうち、図書、地質標本（化石、岩石・鉱物、堆積物、プレパラート）、生物標本（植物さく葉、魚類、貝類、昆虫液浸、昆虫乾燥）、画像情報のデータベースを改良し、入力・編集作業の効率化を図るとともに、データベースのインターネット上での公開に向けての基盤整備を行った。

図書および魚類標本のデータベースを既に公開しており、他についてもデータが整備され次第、順次公開を進めていく予定である。また、資料データベースとは別に、魚類電子図鑑およびトンボ電子図鑑をインターネット上で公開している。

(6) 画像情報システムの整備

実物資料の収集整理と並んで、写真や動画そのものを収蔵資料として扱い、収集整備に力を入れている。収蔵資料の写真や標本採集地点の写真、琵琶湖や環境や生活文化の変遷などを伝える古い写真の収集、入力、管理を行った。これまでに、滋賀県在住の故前野隆資氏の写真を中心とした「昭和写真史」の整備を行い、「災害写真、写真でみる生活史」として一部インターネットで公開している。さらに、これまでの昭和写真史に少なかった湖西・湖北地域の古い写真を今津町教育委員会に協力をいただいて整備を行っている。また、水環境の変遷に関する写真は、撮影場所(地図)と写真と文字情報をセットで管理するシステムを開発し「水環境カルテ」としてインターネットで公開した。

(7) 映像資料の貸し出し

静止画(写真)資料については、教育・文化・報道・広報目的の利用について、その貸出を行っている。2002年4月1日～2003年3月31日までの利用状況は、102件で内訳は下表のとおりであった。

承認日付	貸出先	用途	フィルム内容	フィルム点数	備考
4月5日	(財)琵琶湖・淀川水質保全機構	水辺環境創生計画策 定調査業務	魚類	17	デジタル対応
4月5日	(財)琵琶湖・淀川水質保全機構	パンフレット用	魚類	16	デジタル対応
4月9日	アインズ株式会社	広報誌	魚類	2	デジタル対応
4月10日	滋賀県広報課長	広報誌	オリジナルポスター	1	デジタル対応
4月12日	古谷桂信	書籍用	寄託(環境系)	1	フィルム
4月11日	小学館	書籍用	考古資料	1	プリント
4月25日	株式会社 地人書館	書籍用	魚類	3	デジタル対応
5月4日	城陽市教育委員会	広報パネル用	植物	4	フィルム
5月9日	滋賀県公園緑地事務所	広報用	魚類	3	デジタル対応
5月10日	岩波書店	書籍用	魚類	13	デジタル対応
5月20日	湖南地域振興局	パンフレット用	魚類	3	Webよりダウンロード
5月29日	滋賀県立 高島高等学校	教材用	湖沼	25	デジタル対応
6月14日	石原産業(株)中央研究所	広報誌	魚類	1	デジタル対応
6月14日	中筋川総合開発工事事務所長	Web用	水生昆虫	1	Webよりダウンロード
6月20日	滋賀県 農政水産部 農村整備課	冊子用	魚類	1	Webよりダウンロード
6月20日	三田川金属工業株式会社	教材用	魚類	1	デジタル対応
6月26日	城陽市教育委員会	パネル用	魚類	13	デジタル対応
6月26日	ウォーターフェア-2002東京・農業用水部門出展	パネル用	オリジナルポスター より魚類	2	デジタル対応
6月28日	大阪府立島本高等学校	教材用	環境	14	プリント
6月28日	能登川町役場 住民環境課	教材用	環境	13	プリント
6月22日	(株)三菱総合研究所	展示用	寄託(環境系)	13	デジタル対応
6月28日	株式会社 エム・シー・アンド・ピー	広報誌	魚類	1	デジタル対応
7月1日	株式会社 淡交社	雑誌用	湖沼	1	デジタル対応
7月8日	東映京都撮影所	TV放送用	珪藻	2	デジタル対応
7月16日	共同テレビジョン制作部	TV放送用	魚類	4	プリント
7月17日	NHK教育番組部	Web用	寄託(昆虫写真)	6	デジタル対応
7月24日	城陽市教育委員会	展示用	植物	1	フィルム
7月26日	ファンズ・プロダクション	TV放送用	環境	1	テープダビング
9月6日	(株)造形研究所	書籍用	魚類	4	デジタル対応
9月18日	株式会社 アイジーピー	教材用	水生植物	2	フィルム
9月6日	サンライズ印刷株式会社	書籍用	漁具・漁法	3	デジタル転載
9月9日	プラス・エム(株)	雑誌用	鳥類、魚類、水生植 物、珪藻、湖沼	6	フィルム
9月9日	東京新聞企画編集部	新聞掲載用	魚類、甲殻類	6	デジタル対応
9月18日	法然院 森のセンター	書籍用	魚類、爬虫類	2	デジタル対応

9月18日	(株)裳華房 雑誌『生物の科学 遺伝』	雑誌用	魚類		デジタル対応
9月18日	(株)女性新聞社	新聞掲載	魚類	2	デジタル対応
9月20日	(株)エム・シー・アンド・ピー	教材用	魚類	6	デジタル対応
9月20日	京都洛西ライオンズクラブ	解説用	魚類	8	プリント
9月16日	古谷桂信	展示用	環境	28	パネル
10月4日	株式会社 アルバ	図鑑用	魚類、両生類、爬虫類、昆虫類、甲殻類、水生植物	73	デジタル対応
10月4日	(株)小学館クリエイティブ	雑誌用	魚類	2	デジタル対応
10月4日	フィールドソサイエティ	教材用	魚類	9	プリント
10月6日	日本テレビ放送網(株)	TV放送用	寄託（環境系）	10	デジタル対応
10月14日	放送大学制作部	教材用	湖沼	1	VHS
10月22日	有限会社 アルピナ	教材用	湖沼	2	フィルム
10月24日	有限会社 オーピーオー	教材用	水生植物	1	フィルム
10月24日	読売新聞東京本社映像部	TV放送用	爬虫類	1	プリント
10月31日	サンスイコンサルタント株式会社	生態調査の資料	魚類	2	デジタル対応
11月5日	大阪府立島本高等学校	教材用	環境	14	プリント
11月9日	亀岡市文化資料館	展示用	魚類	30	デジタル対応
10月28日	BBC びわ湖放送	広報用	魚類		DVCテープ
12月11日	財団法人 自然環境研究センター	書籍用	魚類	1	デジタル対応
12月11日	財団法人 自然環境研究センター	Web用	魚類	1	デジタル対応
12月17日	滋賀県漁業協同組合連合会	普及啓発資料用	魚類	1	デジタル対応
12月27日	株式会社 郷土出版社	書籍用	寄託（環境系）	6	デジタル対応
12月27日	株式会社 トータルメディア 開発研究所	研究報告書用	漁法	1	デジタル対応
1月8日	滋賀県琵琶湖環境部	教材用	魚類	4	デジタル対応
1月8日	滋賀県琵琶湖環境部自然保護課長	パンフレット用	魚類		デジタル対応
1月8日	島本町役場 自治推進課	雑誌用	魚類	2	デジタル対応
1月8日	滋賀県琵琶湖環境部	教材用	魚類	4	デジタル対応
1月8日	滋賀県琵琶湖環境部自然保護課長	パンフレット用	魚類	1	デジタル対応
1月15日	滋賀県琵琶湖環境部環境政策課長	冊子用	魚類	2	デジタル対応
1月11日	滋賀県広報課	広報誌	魚類	1	デジタル対応
1月11日	滋賀県広報課	広報誌	魚類	1	デジタル対応
1月21日	(株)エム・シー・アンド・ピー	広報誌	魚類	1	デジタル対応
1月22日	滋賀県農政水産部	パンフレット用	魚類	26	デジタル対応
1月27日	守山教育研究所	郷土資料制作用	オリジナルポスターより魚類、化石	21	デジタル対応
1月24日	福知山ロータリークラブ	看板作成用	魚類	20	デジタル対応
1月30日	本川村立本川中学校	教材用	魚類	34	デジタル対応

1月30日	吉田雅人	ポスター用	魚類	1	デジタル対応
1月26日	愛知県農林水産部水産課	Web用	魚類	3	デジタル対応
1月30日	米原町議会議長	広報誌用	オリジナルポスター より魚類	1	デジタル対応
2月4日	嘉田由紀子	書籍用	寄託（環境系）	1	デジタル対応
2月5日	滋賀県農政水産部	広報誌	魚類	2	プリント
2月7日	千里文化財団	雑誌用	魚類	4	プリント
2月7日	滋賀県農政水産部水産課長	イベント用	オリジナルポスター より魚類、化石	1	デジタル対応
2月8日	滋賀県広報課長	広告用	魚類	4	デジタル転載
2月8日	教育出版株式会社	冊子用	魚類	1	Webよりダウンロード
2月8日	財団法人 自然環境研究センター	書籍用	魚類	1	デジタル対応
2月12日	秦荘町歴史文化資料館	展示用	鳥類、魚類	3	デジタル対応
2月17日	滋賀県琵琶湖環境部	パンフレット用	魚類		デジタル対応
2月19日	滋賀県琵琶湖環境部	パンフレット用	魚類	2	デジタル対応
2月26日	京都新聞	新聞掲載	魚類	9	デジタル対応
2月26日	(株)情報技研	雑誌用	魚類	2	デジタル対応
2月26日	輪之内 町長 渡 辺 勉	教材副読本用	魚類	1	Webよりダウンロード
2月26日	財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構	水フォーラム関連パ ンフレット用	寄託（環境系）	10	デジタル対応
2月26日	社団法人 農村環境整備センター	教材用	甲殻類、貝類	4	デジタル対応
2月26日	村立小笠原小学校	教材用	寄託（昆虫写真）		Webよりダウンロード
2月28日	ドキュメンタリー工房	TV放送用	魚類	2	プリント
2月28日	株式会社 武揚堂生産部	カレンダー用	魚類	1	プリント
2月28日	財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構	水フォーラム関連パ ンフレット用	魚類	1	デジタル対応
2月28日	滋賀県広報課	冊子用	魚類	4	デジタル対応
3月11日	守山市立教育研究所	郷土資料制作用	魚類	1	デジタル対応
3月11日	国土交通省近畿地方整備局	展示用	魚類	4	デジタル対応
3月12日	社団法人 大阪自然環境保全協会	イベントでの展示用	魚類	1	プリント
3月18日	日本ミクニヤ株式会社	報告書用	魚類	1	デジタル対応
3月14日	湖南地域振興局環境農政部長	リーフレット用	魚類	4	デジタル対応
3月14日	(株)ブックデザイン	インタープレス(株)発 行「学校壁新聞」フォ トニュース4月号に て「外来種」企画の 一環で使用	魚類	1	デジタル対応
3月16日	滋賀県水政課	パンフレット用	魚類		デジタル対応
2月20日	びわ町 企画調整課	広報誌用	魚類		
3月18日	社団法人 滋賀県建築士事務所協会	冊子用	寄託（環境系）	33	デジタル対応
3月25日	サンライズ印刷株式会社	書籍用	魚類	8	デジタル対応

(8) 資料整備

情報活動との関連が特に密接な図書・文献資料および映像資料について、下表のとおり整備した。
なお、動画資料の資料数が急増したのは、これまで仮保管していた資料の整理を緊急雇用対策事業の一環として行った成果を反映したものである。

図書

(単位：冊)

区 分	2002年度実績	累 積 数
購 入 図 書	813	19,814
図書データベース登録数	5,019	43,591

* 寄贈提供図書受入数 1688 (2002年度実施)

文献

(単位：件)

区 分	2002年度実績	合 計
文献データベース登録数	3,082	27,002

雑誌

(単位：件)

区 分	2002年度実績	合 計
国内の機関が発行する雑誌	1,183	1,551
国外の機関が発行する雑誌	368	

映像資料

(単位：件)

区 分	2001年度までの合計	2002年度実績	合 計
動 画 資 料	1,563	258	1,821
静 止 画 資 料	68,512	3,450	71,962
(合計)	70,075	3,708	73,783
デジタル化点数	68,172	2,550	70,722

4 資料整備活動

琵琶湖博物館で資料整備の対象としているのは、「琵琶湖とその集水域および淀川流域」およびその全体的評価にかかわるもの、ならびに博物館のテーマ「湖と人間」に関係する日本、アジア、世界の湖沼とその周辺地域におよぶものである。自然、人文、社会科学等にかかわる過去から現在までの実物の資料、生魚などの水族資料、映像資料、図 収集は、博物館職員による採集、受贈、受託、交換、購入、製作、提供、参加型調査等によって行われ、収蔵資料は必要なときに速やかに利用できるよう、各資料区分ごとの体系にしたがって整理し、長期間にわたり安全で良好な状態に保てるよう保管している。さらに収蔵資料は、保存に影響を与えない範囲で、展示、閲覧および貸出等に利用している。

以下に2002年度の資料整備について項目ごとにまとめる（映像資料、図書資料は除く）。

(1) 収蔵資料

2002年度末現在の収蔵資料数を資料分野ごとに示す。

登録資料数とは、琵琶湖博物館情報システムの資料データベースに登録されているものの総数であり、収蔵数とはさまざまな段階の未整理資料の概数である。

【地 学】

1) 地学標本

	登録資料数(点)	収蔵概数(点)	2002年度整理・公開内容
化 石	16,665	20,250	599件を登録
岩石・鉱物	4,705	5,300	1,547件を登録
堆 積 物	163	600	163件を登録
プレパラート	194	400	3件を登録
小 計	21,727	26,550	

【植 物】

1) 植物標本

	登録資料数(点)	収蔵概数(点)	2002年度整理・公開内容
さく葉標本	70,939	148,980	・標本配架14,448点・登録点数9,529点・資料目録「植物標本2 建部敏夫、北川良也植物標本目録」刊行
水草樹脂包埋	0	57	
菌 類	0	108	
小 計	70,939	149,145	

【動物】

1) 動物標本（液浸標本を除く）

	登録資料数(点)	収蔵概数(点)	2002年度整理・公開内容
昆虫類	21,192	60,100	・標本製作3,104点、登録点数685点
貝類	0	11,279	
骨格標本	0	148	
剥製など	0	174	・鳥類170件（本剥製、仮剥製、巣）、哺乳類4件
魚類樹脂包埋	0	10	
小計	21,192	71,711	

2) 液浸標本

	登録資料数(点)	収蔵概数(点)	2002年度整理・公開内容
魚類	43,563	68,519	・登録6,558点
水生昆虫	7,874	27,600	・登録2,897件、収納整理1,072本
貝類	9,443	12,279	・整理1,779件
甲殻類など	0	4,333	・同定済み410点、仮登録322点
プランクトン	0	7,620	・提供試料の受入約3000件。・試料情報の仮データベースへの入力約4500件。
植物	180	640	・鮮新統津房川層産植物化石標本の整理・登録33件（大分県宇佐郡安心院町森）
両生・爬虫類	0	150	
土壌調査資料	0	500	
小計	61,060	121,641	

【歴史・民俗】

1) 考古資料

	登録資料数	収蔵概数(件)	2002年度整理・公開内容
県内遺跡出土品	0	1,322	・企画展展示資料28
ガラリヤ湖関係出土品	0	3	

2) 民俗資料

	登録資料数(点)	収蔵概数(件)	2002年度整理・公開内容
県内の生活生業用具	4,381	4,173	・資料写真100点、更新DB用資料カード2000点、防錆等保存処理20点、ギャラリー展示25点
県内漁労用具（船関係用具を含む）	2,133	1,830	・収集時民具カード整理・更新DB用資料点検1,000点、防錆等保存処理100点
県内の木造船模型	0	22	
外国の湖沼の船	0	9	

3) 歴史資料

	登録資料数(件)	収蔵概数(件)	2002年度整理・公開内容
古文書・絵図・絵画等	0	140	

【環境】

1) 環境資料

	登録資料数(点)	収蔵概数(件)	2002年度整理・公開内容
水環境調査資料	0	72	
体験学習用具	0	599	・企画展展示38点
展示用生活用具	0	25	
展示用製作物	0	48	

【水族資料】

	登録資料数(点)	収蔵概数(点)
水族資料（生体）	0	14,277

【収蔵資料まとめ】

	登録資料数	収蔵概数
地学	21,727	26,550
植物	70,939	149,145
動物	82,252	193,352
（内訳）乾燥標本	21,192	71,711
液浸標本	61,060	121,641
歴史・民俗	6,514	7,498
（内訳）考古資料	0	1,324
民俗資料	6,514	6,034
歴史資料	0	140
環境	0	744
水族	0	14,277
合計	106,638	593,336

(2) 新規収集資料

2002年度には以下のとおり資料収集が行われた。

1) 採集資料

館員や研究プロジェクト、フィールドレポーター、はしかけ制度による収集。

- 【動物】 環形動物液浸標本 1点 八尋克郎（専門研究）
- ・寄生虫液浸標本 1点 マーク・ジョセフ・グライガー
 - ・甲殻類液浸標本 2点 大塚泰介（「寄生虫」共同研究）
 - ・甲殻類液浸標本 1点 中島経夫（共同研究「鰓脚類」）
 - ・甲殻類液浸標本 17点 桑村邦彦（専門研究）
 - ・甲殻類液浸標本 1点 芳賀裕樹
 - ・甲殻類液浸標本 29点 Ronald Vonk他（総合研究「資料」）
 - ・甲殻類液浸標本 1点 松田征也
 - ・甲殻類液浸標本；昆虫類液浸標本；貝類液浸標本；環形動物液浸標本；腔腸動物液浸標本；両生類液浸標本 380点 「田んぼの生き物」「はしかけ」グループ
 - ・環形動物液浸標本 1点 楠岡 泰
 - ・貧毛類液浸標本 1点 松田征也・マーク・ジョセフ・グライガー（「寄生虫」共同研究）
 - ・貝類液浸標本 18点 中井克樹
 - ・貝類液浸標本 76点 松田征也
 - ・貝類液浸・冷凍・乾燥標本 282点 松田征也（共同研究「シジミ」ほか）
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 45点 松田征也・井戸本純一
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 225点 松田征也・上西実
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 52点 松田征也・柴山弘史（共同研究「シジミ」ほか）
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 43点 松田征也・吉川真一郎（共同研究「シジミ」ほか）
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍） 66点 滋賀県淡水貝類研究会
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍） 54点 出口武洋（共同研究「シジミ」）
 - ・貝類液浸標本（一部冷凍） 3点 芳賀裕樹
 - ・貝類液浸標本 13本 上原千春（共同研究「屋外」）
 - ・昆虫液浸標本 16本 石田未基（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 36本 上原千春（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 39本 内田臣一ほか（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 29本 楠岡泰（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 37本 来見誠二（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 1本 武田恵理子（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 1本 中井克樹（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 3本 中井克樹・石田未基（総合研究資料）
 - ・昆虫液浸標本 1本 中西かよ子（総合研究資料）

- ・昆虫液浸標本 8本 西垣亨 (総合研究資料)
- ・昆虫液浸標本 23本 榎永一宏 (総合研究資料)
- ・昆虫液浸標本 1本 八尋克郎 (総合研究資料)
- ・昆虫液浸標本 265本 上原千春 (総合研究資料、共同研究「屋外」)
- ・昆虫液浸標本 3本 石田未基 (総合研究資料)
- ・昆虫液浸標本 1本 坪井美智子 (総合研究資料)
- ・昆虫液浸標本 28本 榎永一宏 (総合研究資料)
- ・無脊椎動物液浸標本 24本 上原千春 (共同研究「屋外」)

2) 寄贈資料

【動物】 ミナミトミヨ乾燥標本3個体・液浸標本1件、トゲカイエビ乾燥標本1件 川那部 浩哉 (京都市)

- ・オンドリ(オス・メス各1)本剥製 2体 藤本 まさえ
- ・蝶類コレクション 3万5千点あまり、文献類1,350点あまり 村山 修一
- ・カワラハンミョウ(雌雄各2点) 4点 山本 雅則
- ・蝶類コレクション 300点 桐村 信行

【地学】 鉱物・岩石類 157点、化石類 141点 伊藤 武史

【その他】 解剖顕微鏡 1点 村山 修一

3) 提供資料

【動物】 渦虫液浸標本 1点 有田重彦

- ・寄生虫液浸標本 1点 石橋 亮
- ・寄生虫液浸標本 1点 高橋大輔
- ・寄生虫液浸標本 3点 平澤理世
- ・寄生虫液浸標本 1点 石田未基
- ・ヒル・ダニの液浸標本 2点 石田未基
- ・無脊椎動物液浸標本 1点 石田未基
- ・甲殻類液浸標本 2点 原田英司
- ・甲殻類液浸標本 3点 大久保一郎
- ・甲殻類液浸標本 1点 大塚 攻
- ・甲殻類液浸標本 1点 遊佐陽一
- ・甲殻類液浸標本 1点 Ho Chun-chung
- ・甲殻類液浸標本 3本 石田未基
- ・甲殻類液浸標本 1本 楠岡泰
- ・甲殻類液浸標本 2本 榎永一宏
- ・甲殻類液浸標本 3点 宮崎一夫

- ・甲殻類液浸標本 1点 関 慎太郎
- ・甲殻類液浸標本 1本 上原千春
- ・甲殻類液浸標本 1点 辻はさひろ
- ・貝類液浸標本 9点 石田未基
- ・貝類液浸標本 2点 岡田隆
- ・貝類液浸標本 4本 楠岡泰
- ・貝類液浸標本 11点 長田智生
- ・貝類液浸標本 1点 西森克浩
- ・貝類液浸標本 1本 上原千春
- ・貝類液浸標本 2本 榊永一宏
- ・貝類液浸・乾燥標本 15点 石橋亮
- ・貝類液浸標本（一部乾燥） 5点 水上二己夫
- ・貝類液浸標本（一部冷凍） 4点 大谷ウイリアム
- ・貝類液浸標本（一部冷凍） 7点 梶谷文崇
- ・貝類液浸標本（一部冷凍） 2点 中川宗孝
- ・貝類液浸標本（一部乾燥・冷凍） 134点 石田未基
- ・貝類乾燥標本（一部冷凍） 9点 石田未基（阪神貝類談話会）
- ・貝類冷凍標本 3点 上西実
- ・昆虫液浸昆虫 1本 八尋克郎
- ・昆虫液浸標本 4本 石田未基
- ・昆虫液浸標本 1本 上原千春
- ・昆虫液浸標本 1本 大谷ウイリアム
- ・昆虫液浸標本 1本 布谷友夫提供
- ・昆虫液浸標本 2本 村瀬忠義
- ・昆虫液浸標本 9本 保科英人
- ・無脊椎動物液浸標本 2本 石田未基
- ・無脊椎動物液浸標本 7本 保科英人
- ・無脊椎動物液浸標本 2本 榊永一宏
- ・その他の無脊椎動物液浸標本 2本 石田未基
- ・その他の無脊椎動物液浸標本 1本 上原千春
- ・その他の無脊椎動物液浸標本 1本 楠岡泰
- ・その他の無脊椎動物液浸標本 2本 榊永一宏

4) 購入資料

【地学】 滋賀県産岩石・鉱物標本 10点

【動物】 世界の淡水貝類標本 34点

- 【歴史】 大津片原町絵図 1 舗
 近江国絵図 37点
 近江国琵琶湖 淡水魚絵巻 1 巻
 花園院宸記 (18巻) 1 巻

5) 水族繁殖生物

2001年度主な繁殖魚類

	学 名	個体数
日本産魚類		
コイ科		
ホンモロコ	<i>Cnathopogon caerulescens</i>	46
イトモロコ	<i>Squalidus gracilis gracilis</i>	44
カワバタモロコ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i>	100
アブラヒガイ	<i>Sarcocheilichthys biwaensis</i>	58
ズナガニゴイ	<i>Hemibarbus longirostris</i>	20
シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i>	174
スイゲンゼニタナゴ	<i>Rhodeus atremius suigensis</i>	35
タナゴ	<i>Acheilognathus melanoguster</i>	83
カネヒラ	<i>Acheilognathus rhombeus</i>	6
アカヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira</i> subsp. R	86
ゼニタナゴ	<i>Acheilognathus typus</i>	59
カゼトゲタナゴ	<i>Rhodeus sinensis atremius</i>	116
ニッポンバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus smithi</i>	67
ミヤコタナゴ	<i>Tanakia tanago</i>	40
ワタカ	<i>Ischikauia steenackeri</i>	100
ドジョウ科		
アユモドキ	<i>Leptobotia curta</i>	406
スジシマドジョウ(大型種)	<i>Cobitis</i> sp. 1	207
スジシマドジョウ(小型種琵琶湖型)	<i>Cobitis</i> sp. 2 subsp. 4	77
メダカ科		
メダカ	<i>Oryzias latipes</i>	300
トゲウオ科		
ハリヨ	<i>Gasterosteus microcephalus</i>	248
ムサシトミヨ	<i>Pungitius pungitius</i> subsp.	215
ハゼ科		
アオバラヨシノボリ	<i>Rhinogobius</i> sp. BB	129

外国産魚類		
コイ科		
チャイニーズワンラインペンシル	<i>Sarcocheilichthys parvus</i>	54
カラヒガイ	<i>Sarcocheilichthys sinensis sinensis</i>	220
オオタナゴ	<i>Acheilognathus macropterus</i>	31
トンキントゲタナゴ	<i>Acheilognathus tonkinensis</i>	99
パールダニオ	<i>Brachydanio albolineatus</i>	128
サンカクボウ	<i>Megalobrama terminalis</i>	100
カワヒラ	<i>Cultrichthys erythropterus</i>	100
カワズズメ科		
ジュリドクロミス ディックフェルディ	<i>Julidochromis dickfeldi</i>	27
ネオランプローガス オケラータス	<i>Neolamprologus ocellatus</i>	60
サンフィッシュ科		
パンプキンシードサンフィッシュ	<i>Lepomis gibbosus</i>	200
ロングイヤーサンフィッシュ	<i>Lepomis megalotis peltastes</i>	8
昆虫類		
タガメ	<i>Lethocerus deyrollei</i>	165
ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i>	17

(3) 資料の利用

1) 資料の貸出

2002年度には、以下のとおり資料の貸出を行った。

資料名	数量	貸出先	期間
【動物】			
カムルチー、カンキョウカジカ等22種（液浸標本）	22点	研究交流 研究解剖用	2002.6.28～2003.6.27
メガネサナエ成虫、幼虫模型	2点	相模原市立博物館 特別展	2002.7.9～2002.9.11
ナマズ模型（大型）	1点	農政水産部耕地課 ウォーターフェア2002展示	2002.7.25～2002.8.9
ビワコオオナマズの模型	1点	農業総合センター 農業試験場イベント展示	2002.10.3～2002.10.8
フナズシ、フナのあら汁等（レプリカ）	5点	葛飾区郷土と天文の博物館 企画展	2002.10.13～2002.12.8
コペポータ（液浸標本）	1本3点	Agricultural University of Szczecin (Poland) 研究用	2002.10.5～2003.6.30
イチモンジタナゴ（液浸標本）	3点	京都大学動物生態学研究室 研究用	2002.12.17～2002.12.16
ビワコオオナマズ、イワトコナマズ等剥製	3点	岐阜県平田町 企画展	2002.10.20～2002.11.22
産卵ナマズ（模型）	1セット	岐阜県平田町 企画展	2002.10.20～2002.11.22
最長ナマズ（模型）	1点	岐阜県平田町 企画展	2002.10.20～2002.11.22

線虫標本	4 瓶	Academy of Sciences of the Czech Republic 研究用	2003.2.12～2003.8.12
線虫標本 (プレパラート)	9 枚	Academy of Sciences of the Czech Republic 研究用	2003.2.12～2003.8.12
条虫標本	3 瓶	Academy of Sciences of the Czech Republic 研究用	2003.2.12～2003.8.12
条虫標本 (プレパラート)	5 枚	Academy of Sciences of the Czech Republic 研究用	2003.2.12～2003.8.12
ナマズ模型 (大型)	1 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.19～2003.3.24
マス煮付け、シジミ御飯、フナズシ等 (伝統料理のレプリカ)	14皿	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.17～2003.3.19
ナレズシ (レプリカ)	4 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.17～2003.3.19
ハス、ギギ、ワタカ、ピワマス等 (琵琶湖産淡水魚のレプリカ)	9 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.17～2003.3.19
スッポン (琵琶湖産爬虫類のレプリカ)	1 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.17～2003.3.19
カモ (レプリカ)	1 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.17～2003.3.19
トロ箱 (レプリカ)	2 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.17～2003.3.19
アカザ、イサザ、イチモンジタナゴ等 (樹脂包埋標本)	9 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.19～2003.3.21
【植物】			
ネジレモ、エビモ等 (樹脂包埋標本)	5 点	第3回世界水フォーラム 琵琶湖水フェア	2003.3.19～2003.3.21
【地学】			
古琵琶湖層群産 イチョウの葉化石 (印象化石)	1 点	ミュージアムパーク茨城県自然博物館 企画展	2002.6.23～2002.10.20
古琵琶湖層群産 イチョウの葉化石 (プレパラート)	1 点	ミュージアムパーク茨城県自然博物館 企画展	2002.6.23～2002.10.20
琵琶湖層群産 貝類化石	3 点	学校授業における閲覧	2002.11.13～2002.11.30
多賀町産石灰岩中の化石	2 点	学校授業における閲覧	2002.11.13～2002.11.30
コウガゾウ復元骨格写真	1 点	長野市立博物館 特別展	2002.7.1～2002.8.18
【考古】			
松原内湖出土 ヘラ状木製品 (琴)	1 点	神戸市埋蔵文化財センター 企画展	2002.10.5～2002.11.17
準構造船復元資料	1 点	一宮市博物館 秋季特別展	2002.10.5～2002.12.20
準構造船復元工程写真	12枚	一宮市博物館 秋季特別展	2002.10.5～2002.12.20
アカトリ復元資料	1 点	一宮市博物館 秋季特別展	2002.10.5～2002.12.20
権 復元資料	1 点	一宮市博物館 秋季特別展	2002.10.5～2002.12.20
【民俗】			
本庄地区 とっくり	3 点	びわこの風 おうみ市民活動 屋台村展示	2002.9.25～2002.9.30
酒井神社 丸盆	2 点	びわこの風 おうみ市民活動 屋台村展示	2002.9.25～2002.9.30
酒井神社 おちょこ	20点	びわこの風 おうみ市民活動 屋台村展示	2002.9.25～2002.9.30

2) 資料の譲与

2002年度には、以下の通り資料の譲与を行った。

【水族】	ワタカ 60点	滋賀県水産試験場
	ミヤコタナゴ 30点	中村市立四万十川学遊館
	ウシモツゴ 30点	中村市立四万十川学遊館
	アユモドキ 30点	志摩マリランド
	イチモンジタナゴ 30点	大阪府食とみどりの総合技術センター
	タモロコ 50点	虹の森公園 おさかな館
	モツゴ 50点	虹の森公園 おさかな館
	ニゴロブナ 3点	西海パールシーセンター
	ワタカ 3点	西海パールシーセンター
	ホンモロコ 10点	西海パールシーセンター
	シロヒレタビラ 3点	多賀の自然と文化の館
	イチモンジタナゴ 3点	多賀の自然と文化の館

3) 特別観覧許可

2002年度には、以下のとおり特別観覧の許可を行った。

- ・守山市民具 170点、井田氏寄贈民具 100点 調査・研究 村上由美子
- ・滋賀県産トンボ標本 50点 撮影 NHK教育番組
- ・岐阜県産トンボ標本 3点 研究 安藤 尚
- ・水族展示魚類 100点 撮影 がまかつ
- ・水族展示カイツブリ 1点 撮影(研究) 弘前大学 佐原雄二
- ・粟津貝塚遺跡出土土器 3点 撮影(研究) アド・プロヴィジョン
- ・甲虫標本 5点 研究 山本雅則
- ・植物(水生植物)標本 100点 研究 北海道大学 持田誠
- ・アケボノゾウの復元図 1点 出版(有料) カルチャープロ

(4) 燻 蒸

資料に付着する害虫(成虫・卵・蛹)および黴等、資料の保存上、有害な生物の殺虫防除を目的に、収蔵庫燻蒸および燻蒸庫燻蒸を以下のとおり行った。また、平成11年度には小型燻蒸庫を設置し利用規程も整備し、平成12年度より本格的な運用を始めている。

・収蔵庫燻蒸

実施日 2002年 9月1～5日

対 象 地学収蔵庫、民俗収蔵庫1、一時保管庫、企画展示室にて簡易燻蒸3点

・燻蒸庫燻蒸

実施日 2002年6月13～15日、7月13～15日、12月2～4日、2003年3月4～6日

対 象 植物さく葉標本、民俗資料、昆虫乾燥標本、貝類標本、鳥類剥製など

・小型燻蒸庫燻蒸

実施日 2002年10月1～3日、12月17日～19日、12月25～27日、2003年2月4～6日、3月12～14日、3月24～26日

対 象 植物さく葉標本、昆虫標本、骨格標本、地学標本、鳥剥製標本など

(5) 資料評価委員

博物館として重要な資料の購入や受贈にあたって、博物館資料としての学術的評価と価格評価を行うため、あらかじめ選定しておいた33名からなる資料評価者名簿をもとにしながら資料評価委員を選任し、資料評価を依頼している。

5 展示活動

2002年度は、常設展示の展示物（標本）やデータの更新、展示手法の改善を行い、常設展示の内容を発展させた関連事業を行った。また、次のような企画展示、水族企画展示、ギャラリー展示、トピックス展示を開催し、関連事業を展開した。

(1) 常設展示の主な更新

・展示室A

「亜熱帯の湖」：2003年2月にリニューアル。新たな研究成果を活かしながら、実物標本と精巧な骨格模型（近洋二氏作）、そして当時の湖岸の復元画（ブライアン・ウィリアムズ氏作）を組み合わせた美しい展示となった。「コレクション・ギャラリー」：滋賀県の岩石・鉱物コーナーでは、県内5地域に区分し、産出地や地域の特色を実物標本を示しながら紹介。寄贈標本を中心に岩石・鉱物標本を充実させた。

・展示室B

「湖上交通のうつりかわり」：蔵ケース展示に民俗資料の丸子船の売渡書状をはじめ、丸子船にかかわる文書を公開。

・展示室C

「環境とはなんだろう」：2001年度に寄せられた、環境に対する来館者の思いが書かれた環境絵馬約1900件を展示し、新たに情報としてデータを収録した（合計約12,000件を蓄積）。「生き物コレクション」：ミドリリリセンチコガネの触れる拡大模型を新たに展示し、人気の高いトンボやテントウムシ、博物館の周りで見られる昆虫など実物標本の入れ替えを行った。

・ティスカバリールーム

「世界の子どもたち」：2003年1月12日に更新。中国湖南省の子どもたちに加え、北歐フィンランドの子どもたちの暮らしや遊びを紹介。どちらも滋賀県と同じように湖とかがわりが深い国であるが、となりの国である「中国の湖南省」と遠く離れた国「フィンランド」を紹介し、その違いや共通点を感じてもらおう展示となった。

上記以外で、映像展示「ミクロの世界」では、レーザーディスク方式からDVD方式へ変更、「わたしたちの環境」では、情報機器およびソフトの変更（MacintoshからWindowsへ）を行うなど展示手法の改善を図った。



A展示室・亜熱帯の湖



ディスカバリールーム・世界の子どもたち

(2) 企画展示「中世のむら探検-近江の暮らしのルーツを求めて」

開催期間：2002年7月20日～11月24日

設計業者：(株)丹青社

担当：橋本、牧野(久)、矢野、杉谷

総観覧者数：合計53,760人（最大入場者：1,339人10月8日）

展示テーマ：激変する環境の中であらためて近江の伝統生活を振り返り、今後の住環境を再構築するためのヒントを得る。そのために、そうした伝統が育まれたとされる近江の中世の庶民生活について展示する。

展示手法：体験型を中心とし、様々な生活用具をそれを復元したボランティアの助けを借りながら体験資料として展示する。また、体験型資料とともに、県内外の考古学的な遺物や絵図、古文書、地域史といった実物資料も展示する。

主な展示資料：展示解説書pp. 15-30を参照。

関連事業

1) 近江の国 中世なんでも探検隊（2001年度、担当：橋本、牧野久、矢野、内藤）

「中世のあそびを探検」（6/16/）

「中世の七夕を探検-中世のそうめんをつくってみよう-」（7/7）

「中世の遺跡を探検-野路岡田遺跡-」（7/21/）岡田雅人

「中世庶民のおうちを探検-模型をつくってみよう-」（8/4）高橋康夫

「中世庶民のおしゃれを探検-藍染をしてみよう-」（8/25）川口長蔵

「中世庶民のおしゃれを探検-へそくりをしてみよう-」（9/1）澤田絹子

「中世庶民のおしゃれを探検-草木染をしてみよう-」（9/29）杉野由佳

「中世庶民のおしゃれと食事を探検-麻布を織ってみよう・土で器をつくろう-」（10/20）澤田絹子・宮本ルリ子

「中世庶民の食事を探検-”みそうず”をたべよう-」（10/27）

「展示物をつくろう1-藁細工講結成！-／足半をつくって履いてみよう」（11/24）勝島治美

「展示物をつくろう2-機織り講結成！-／中世の反物を織ろう」（12/15）川村隆一

「展示物をつくろう 3－竹細工講結成！－／ささらをつくって演奏しよう」（1／26）真田昇・安井四加三

「展示物をつくろう 4－藁細工講再び！－／勸請縄をつくろう」（2／23）竹内修・白井清・高谷彦成

自主活動「機織り講 1」（1／19）

自主活動「機織り講 2」（2／9）

自主活動「機織り講 3」（3／9）

自主活動「機織り講 4」（3／23）

自主活動「機織り講 5」（3／28）

2) 近江の国 中世なんでも探検隊（2002年度、担当：橋本、牧野久、矢野、杉谷）

「展示物をつくろう 特別編－ヨシ葺きに挑戦！－／ヨシ葺きをしてみよう」

（4／13、14、20、21）竹田勝博

「展示物をつくろう 特別編－土器づくり再び！－／中世のすり鉢をつくろう」

（観察会と連動）（5／3、4）神山直彦・上田光春

「地機研修」5／18、19、25、6／15、16）澤田絹子

自主活動「機織り講 6」（5／21）

自主活動「機織り講 7」（6／8）

自主活動「機織り講 8」（6／11）

自主活動「機織り講 9」（6／29）

自主活動「機織り講 10」（7／3）

3) 観察会

むらのヨシをみてみよう（5／6）近江八幡市

姉川のヤナを見に行こう（5／26）びわ町

中世の機織りを体験しよう（7／27）

漁船に乗ってえりの漁を見に行こう（7／28）守山漁港

中世のむら探検企画展解説ツアー（8／3）

湖のまわりにある巨木を見に行こう（9／16）

中世の山城を見に行こう（10／6）

4) 体験学習（橋本、牧野久、矢野、杉谷）

中世の遊びをやってみよう（8／10）

中世の七夕を体験しよう（8／24）

中世の草木染めを体験してみよう（9／14、28）

中世の紙をつくってみよう（10／12、26）

藁の足半作り（11／9、23）

5) 特別モーニングレクチャー（企画展説明）

7／25日、7／26日、7／30日（橋本、牧野久、矢野）

6) 連続講座

中世のむら探検 (7/21) (橋本)

中世探検隊のはなし (7/28) (牧野久)

なつかしい田んぼの風景 (8/4) (内藤)

村のはなし (8/11) (矢野)

7) 月曜開館特別ツアー (企画展案内)

(7/22) (牧野久、矢野)

関連行事

みんなで語る 地域の歴史の調べ方・まとめ方 (9/21) (嘉田由紀子)

開館6周年記念行事 (茂山千之丞氏による狂言、対談、および企画展案内) (11/10) (牧野久、矢野)

400万人記念行事 (企画展案内) (11/16) (牧野久、矢野)

ボランティアメッセ参加

中世探検隊の機織り紹介 (11/3) 兵庫県人と自然の博物館にて

研究発表会

中世探検隊の機織り紹介 (3/2)

(3) 水族企画展示

第11回「滋賀のカメたち」

会期：2002年3月21日(木・祝)～2002年5月19日(日)

常設展示観覧券で入場

童話や童謡にも登場するカメは、そのユーモラスな姿からか、子どもはもとより多くの人から愛されてきた。ところが、カメたちが暮らす水辺の環境は変化し、種類によっては絶滅も心配されている。また最近では、ペットとして外国から輸入されたカメたちが、心ない飼い主によって川や湖へ捨てられることが多くなっている。

本展示では、生き物たちと人との関係について考えてもらうことを目的として、滋賀県内に生息するカメ類の生態展示とともに、カメたちの生活のようすや人との関係、世界のさまざまなカメたちを写真パネル等で紹介した。また、会期途中から、草津市内で捕獲された北アメリカ原産のカミツキガメを展示して、ペットと人との関係について考えるための機会を提供した。

第12回「魚の群れ探検－魚はなぜ群をつくる？－」

会期：2002年7月13日(土)～9月23日(月・祝)

常設展示観覧券で入場

”群れ”は、アリのような小動物から、私たちヒトやゾウのような中・大型動物に至るまで、動物社会に広く見られる現象である。魚類は地球上でもっとも繁栄している脊椎動物であるがゆえ、彼らの社会はきわめて多様性に富んでおり、単独生活をおくるものから、一生を群れで過ごすものまでいろいろな社会形態を見ることができる。

本企画展では、魚社会のなかでも特に群れに焦点をあて、魚が群れをつくる理由をいくつかのカテゴリーに分けて解説し、それぞれの例を生態展示した。また、群れをつくる魚の対照として、単独で生活するもの、家族生活をおくるもの、あるいは同種同士が小グループをつくるものなども合わせて紹介した。

なお、本展示は本館企画展示「中世のむら探検」と連動して“群（＝ムレ＝ムラ）”をテーマとし、動物が群れをつくる意味をさまざまな切り口で紹介することをめざした。

第13回「びわ湖・淀川・大阪湾 水の旅 -びわ湖で少なくなった魚と貝-」

会期：2003年3月8日(土)～4月6日(日)

常設展示観覧券で入場

滋賀・京都・大阪を舞台に開催された「第3回世界水フォーラム」を記念して、琵琶湖淀川水系に位置する大阪・海遊館、水道記念館、琵琶湖博物館の3館が連携して、それぞれの地域の水環境をテーマとした企画展を開催した。

琵琶湖博物館では、滋賀県内で絶滅の危機に瀕している淡水魚と淡水貝類に焦点をあて、その現状と減少の理由を紹介した。また、この企画展にあわせて3月11日(火)には、滋賀県と大阪府の小学生が大阪・海遊館に集まり、水環境問題に関わる日頃の学習成果を発表し、その解決に向けての取り組みや方法話し合う「びわ湖・淀川・大阪湾 水の旅 -子ども水フォーラム-」を開催した。



魚の群れ探検



びわ湖・淀川・大阪湾 水の旅



展示の様子

(4) ギャラリー展示

「湖（うみ）の十字路-野洲川平野の弥生・古墳時代」

主催：琵琶湖博物館、草津市教育委員会、守山教育委員会、栗東市教育委員会、中主町教育委員会、野洲町教育委員会

会期：2002年3月20日～5月12日（48日間）

場所：企画展示室

総観覧者数：23,811人

1990年代以降の野洲川下流域の新しい発掘調査の成果を、環濠集落・大形建物、玉・朱・銅製品づくり、周溝墓・首長墓、渡来人などの小テーマごとに、実物資料を紹介し、図面・写真等のパネルなどで説明を加えた。これらにより、原始・古代の時代、野洲川下流域が近江の中心地であり、大きな権力が育ちつつあったことをやさしく紹介した。

「今森洋輔／琵琶湖の魚原画展—うろこの輝きに魅せられて—」

会期：2002年5月18日（土）～6月15日（土）（25日間）

会場：本館 企画展示室

総観覧者数：16,021人

展示作品：琵琶湖の魚の細密画 およびスケッチなど約100点

その他：ポスター、チラシ、看板2点（玄関前、展示室内）、バナー2点などを製作した。

本展示は、第9回世界湖沼会議を記念して出版された細密画家・今森洋輔氏の「琵琶湖の魚」の原画を紹介する中で、来館者に琵琶湖の自然と生き物に関心を抱いていただくとともに、本館の水族展示の導入とするために開催した。なお、会期中は今森洋輔氏本人が企画展示室において製作過程の実演、および解説ツアーを実施するとともに、同名の本（偕成社）を本展の図録としてミュージアムショップにて販売した。

「滋賀県環境学習フェア」

主催：滋賀県教育委員会

会期：2002年12月5日～11日（7日間）

場所：企画展示室（展示およびポスターセッション）

ホール・セミナー室（交流会および環境教育研究協議会）

参加校数：県内小学校22校、中学校8校、高等学校5校

企画展示室総観覧者数：1,111人

計35校の県内小中高等学校が参加し、地域の特色を生かした環境学習の取り組みを発表した。企画展示室では、それぞれの学校の取り組みをパネルで展示し、各代表生徒2名が、自校の取り組み内容や成果を観覧者に対して解説する活動も行った。また、学校相互の理解と協力を進めるため、博物館教員のコーディネートのもとに交流会を実施し、お互いの活動の紹介や意見交流が行われた。最終日に行われた環境教育研究協議会では、学芸職員による講演とシンポジウムが行われ、県内各

学校の環境教育担当者の研修の場とした。

「森づくり ～琵琶湖をはぐくむ森と人～」

主催：琵琶湖博物館、林務緑政課、森林保全課、滋賀県森林センター

会期：2003年1月4日～2月28日（48日間）

場所：企画展示室

総観覧者数：18,214人

琵琶湖の水源である周囲の森林とその森林を守る人々、守ってきた歴史の再認識を求めて、「森づくり ～琵琶湖をはぐくむ森と人～」を開催した。本展示では、「環境と森林」から始まり、「造林・治山の歴史」「林業道具の変遷」「山の幸」「山村文化」「これからの森」までの6つのコーナーを通して、森づくりという行為（林業）が、琵琶湖や環境の保全に役立っていることを紹介した。また、「山の幸」のコーナーでは、つみきや木のパズルに触れることにより、森林の恵を体感できる場を提供した。



森づくり



つみきコーナー

「今昔写真と生活民具で探る 世界の水辺の暮らし100年」

会期：2003年3月11日～4月6日（24日間）

場所：企画展示室

総観覧者数：11,364人

1997年に企画展示「私とあなたの琵琶湖アルバム」を行い、同じ場所の今昔写真の比較をすることが、現在の人のくらしや環境などについて考える非常に有効な手段となることがわかった。その後琵琶湖の今昔写真から淀川水系、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパと今昔写真の調査国を増やして、2001年に行われた世界湖沼会議で写真展示を行った。今回は、グアテマラの調査結果を追加して、2003年3月におこなわれた世界水フォーラムに協賛して今昔写真展示を行った。

展示したものは、日本（31セット、63枚）、フランス（13セット、28枚）、スイス（15セット、30枚）、アメリカ（15セット、30枚）、アフリカ（15セット、30枚）、グアテマラ（10セット、30枚）の各国の今昔写真と、あわせて船や洗濯板などの水辺の民具であった。



世界の水辺の暮らし100年

(5) 水族トピックス展示

水族展示室内のふれあい体験室前に設置した小型展示水槽をつかって、生まれたばかりの稚魚や話題性のある魚など、常設展示では観察することの難しい水生生物を展示した。内容と期間は以下のとおりであった。

展 示 期 間	テ ー マ	展 示 場 所
3月26日～4月14日	産卵期を迎えたイサザ	ふれあい体験室
4月16日～5月6日	スイゲンゼニタナゴの稚魚	ふれあい体験室
5月8日～6月2日	ハリヨの稚魚	ふれあい体験室
6月4日～6月23日	ゼニタナゴの稚魚	ふれあい体験室
6月25日～7月14日	スジシマドジョウ大型種の稚魚	ふれあい体験室
7月16日～8月5日	ムサヒトミヨの稚魚	ふれあい体験室
8月5日～8月18日	スジシマドジョウ小型種琵琶湖型の稚魚	ふれあい体験室
8月20日～9月1日	メダカの稚魚	ふれあい体験室
9月6日～9月23日	シロヒレタビラの稚魚	ふれあい体験室
10月1日～10月20日	アユモドキの稚魚	ふれあい体験室
10月16日～11月4日	産卵期を迎えたカネヒラ	ふれあい体験室
12月10日～2003年1月26日	ビワマスの卵と稚魚	ふれあい体験室
1月28日～2月26日	ビワコオオナマズの幼魚	ふれあい体験室

(6) 展示関連事業

・フィンランドと日本の子どもたちの合同絵画展「森と湖と私」

ディスカバリー・ルームの「世界の子どもたち」コーナーを、森や湖と関係の深い「フィンランド」へと展示更新するのにもない、関連交流事業として「森と湖と私」をテーマに子ども達の絵画展を行った。

フィンランドから出展してもらった絵については、絵画展終了後、「世界の子どもたち（フィンランド）」コーナーにて、季節に合わせて展示した。日本から出展してもらった絵については、絵画展終了後フィンランドに送られ、美術館等で展示の予定である。

絵画募集期間： 2002年7月21日～2002年9月23日

絵画展開催期間：2002年10月22日～2002年12月15日

展示場所：琵琶湖博物館 アトリウム

日本／フィンランドからの出展枚数：それぞれ20枚（計40枚）

・「にんぎょうげきじょう」の特別公演

「世界の子どもたち」コーナーの展示更新に関連させ、ディスカバリールームの「にんぎょうげきじょう」コーナーにて、フィンランドの指人形と日本の指人形を用いての創作人形劇が、守山市在住の大崎省子さん（人形劇場「かにこぞう」所属）により上演された。

2003年1月26日(日) 14:00～14:30

「ふしぎ!?トランク」

2月15日(土) 14:00～14:30

「うりぼうくん フィンランドへ!？」

・能ばやしの演奏と演奏体験「きいてみよう!さわってみよう!能ばやし」

ディスカバリー・ルームの「音の部屋」コーナーでは、楽器を自由に演奏し、音や演奏方法を楽しむことができるが、このイベントでは、「音の部屋」で展示している和楽器にちなみ、日本能楽協会のプロの演奏家による和楽器の演奏会と演奏体験を行った。

期日：2003年3月8日(土) 午後1時と3時開演（2回公演）

場所：琵琶湖博物館 アトリウム

参加者：300人（公演2回分）

演者：笛 森田保美、小鼓 成田達志、大鼓 谷口有辞、太鼓 中田弘美

・今森洋輔イラストレーション教室「子ども絵画」展

本絵画展は、細密画家・今森洋輔氏の描いた琵琶湖の魚に関するギャラリー展「今森洋輔／琵琶湖の魚原画展-うろこの輝きに魅せられて-」の付帯事業として開催された「今森洋輔イラストレーション教室」で子どもたちが描いた作品の発表会として開催されたものである。21名が描いた生物画30点を、2002年8月20日(火)～31日(土)の間、博物館のアトリウムで展示した。



にんぎょうげきじょう特別講演



能ばやし



能ばやし

6 国際交流活動

(1) 中国科学院水生生物研究所と研究交流に関する同意書の調印

2002年9月22日に、琵琶湖博物館と中国科学院水生生物研究所との研究交流に関する同意書が、川那部浩哉館長と桂建芳所長によって調印された。中国科学院水生生物研究所は、湖北省武漢市にある淡水生物を研究している国立の研究施設である。同研究所とは、これまで琵琶湖博物館総合研究「東アジアの中の琵琶湖 コイ科魚類を展開の軸とした 環境史に関する研究」での共同研究を実施してきた。また、準備室時代から水族展示の「洞庭湖の魚たち」に展示する魚の収集に協力していただいていた。この同意書の調印により、研究交流ばかりではなく、印刷物の交換、資料の交換などが円滑に進むことが期待される。

なお、これまでには、1996年にロシア科学アカデミーシベリア支部バイカル博物館と、1998年にフランス・パリ「国立自然史博物館」と相互協力に関する覚書の締結を行った。

7 印刷物

平成14年度出版物一覧

品名	サイズ	ページ数	発行部数
研究調査報告書19号「企画展示『湖の船』開催記録」	A 4	65	1,000
業績目録 第6号	A 4	117	700
資料目録 第9号「植物標本2」	A 4	123	700
うみんど 第23号	A 4	8	40,000
うみんど 第24号	A 4	8	40,000
うみんど 第25号	A 4	8	30,000
うみんど 第26号	A 4		30,000
うみっこ 第12号	A 4	4	60,000
うみっこ 第13号	A 4		60,000
もよおしもの案内カレンダー	A 2		1,300
もよおしもの案内チラシ	A 4		44,000
もよおしもの案内チラシ	A 4		50,000
もよおしもの案内ポスター (カレンダー)	A 2		1,300
要 覧	A 4	56	1,200
年 報 6号	A 4	78	1,000
英文展示ガイド	A 4		500
企画展示 (特別展示)「中世のむら探検」展示解説書	A 4	36	1,500
企画展示 (特別展示)「中世のむら探検」ガイドブック	A 6	128	1,500
企画展示 (特別展示)「中世のむら探検」付録	A 4	4(枚)	1,500
企画展示 (特別展示)「中世のむら探検」チラシ	A 4		40,000
企画展示 (特別展示)「中世のむら探検」ポスター	A 2		1,500
企画展示 (特別展示)「中世のむら探検」JR 駅用ポスター	B 1		100
水族企画展示「魚の群れ探検」ポスター	B 2		1,000
水族企画展示「魚の群れ探検」パンフレット	A 4	8	13,000
ギャラリー展示「森づくり」ポスター	A 2		1,000
ギャラリー展示「森づくり」チラシ	A 4		10,000
ギャラリー展示「森づくり」リーフレット	A 4		5,000
ギャラリー展示「世界の水辺の暮らし100年」ポスター	B 2		1,000
ギャラリー展示「世界の水辺の暮らし100年」チラシ	A 4		20,000
ギャラリー展示「のぞいてみよう博物館の舞台裏」ポスター	B 2		1,000
ギャラリー展示「のぞいてみよう博物館の舞台裏」チラシ	A 4		15,000
夏休み自由研究講座チラシ	A 4		5,000
フィールドレポーター募集チラシ	A 4		3,000
音楽と写真の展覧会 チラシ	A 4		5,000
館長対談広報用チラシ	A 4		20,000
連続講座チラシ	A 4		3,000

Ⅱ 利 用 状 況

1 2002年度入館者数

期 間：2002（平成14）年4月1日～2003（平成15）年3月31日

合 計：479,257人 開館日数：309日

1日平均：1,551人

月平均：39,938人

入館者の区分別内訳

単位：人

区 分	個 人 (人)	団 体 (人)	合 計 (人)	構 成 比 (%)
未 就 学 児	51,292	5,231	56,523	11.8
小・中 学 生	40,947	77,389	118,336	24.7
高・大 学 生	6,481	14,527	21,008	4.4
一 般	203,566	79,824	283,390	59.1
合 計	302,286	176,971	479,257	100.0

(1) 総入館者数

年 月	開館日数 (日)	有 料 入 館 (人)				無 料 入 館 (人)								総 計 (人)	1日当り平均 (人)	
		一 般	高大学生	小中学生	有料計	65歳以上	障害者	家庭の日	体験学習	こどもの日	学校行事	その他	無料計			
14	4	26	19,556	2,907	7,344	29,807	542	300	596	64		967	4,727	7,196	37,003	1,423
	5	27	28,559	4,991	19,217	52,767	595	711	987	164	376	1,524	7,360	11,717	64,484	2,388
	6	26	24,990	1,057	10,911	36,958	692	666	717	218		3,239	4,242	9,774	46,732	1,797
	7	28	25,640	1,001	5,921	32,562	694	391	686	154		1,226	5,542	8,693	41,255	1,473
	8	31	41,142	1,988	16,712	59,842	743	655	656	148		335	9,957	12,494	72,336	2,333
	9	22	22,828	1,463	4,214	28,505	596	489	881	81		287	5,331	7,665	36,170	1,644
	10	27	22,265	2,211	14,805	39,281	598	313	634	75		6,387	4,856	12,863	52,144	1,931
	11	26	20,574	871	6,824	28,269	644	376	492	58		3,406	4,349	9,325	37,594	1,446
	12	23	7,327	457	2,374	10,158	144	75	285	12		641	2,356	3,513	13,671	594
15	1	24	10,868	375	2,193	13,436	281	197	545	69		640	3,849	5,581	19,017	792
	2	23	12,741	386	4,833	17,960	225	292	944	73		674	4,784	6,992	24,952	1,085
	3	26	19,192	953	4,822	24,967	354	347	698	173		544	6,816	8,932	33,899	1,304
計	309	255,682	18,660	100,170	374,512	6,108	4,812	8,121	1,289	376	19,870	64,169	104,745	479,257	1,551	

(2) 学校等入館者数

年 月		小 学 校		中 学 校		高 校		養聾盲学校	
		学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数
14・4	全 体	26	2,345	15	1,526	17	2,613	1	2
	県 内	0	0	0	0	5	929	0	0
5	全 体	105	7,403	66	8,456	20	4,556	5	107
	県 内	17	794	0	0	2	474	4	87
6	全 体	59	4,269	60	8,349	2	320	5	70
	県 内	37	2,303	7	706	0	0	4	29
7	全 体	16	1,002	17	1,328	9	402	6	134
	県 内	8	250	8	429	9	402	1	8
8	全 体	13	413	13	213	2	85	0	0
	県 内	5	97	12	162	1	6	0	0
9	全 体	9	426	4	261	2	466	3	14
	県 内	3	108	0	0	0	0	3	14
10	全 体	253	18,604	23	2,123	11	1,985	4	38
	県 内	99	5,985	12	558	1	40	1	27
11	全 体	62	4,443	37	3,784	10	465	6	50
	県 内	35	2,156	20	1,352	4	120	5	44
12	全 体	17	1,194	7	519	5	178	2	10
	県 内	5	181	5	214	3	101	2	10
15・1	全 体	16	1,250	2	120	2	97	0	0
	県 内	6	501	2	120	1	30	0	0
2	全 体	39	2,773	2	188	1	40	1	10
	県 内	12	658	0	0	0	0	0	0
3	全 体	13	903	3	59	5	435	1	18
	県 内	1	181	1	6	2	320	1	18
合 計	全 体	628	45,025	249	26,926	86	11,642	34	453
	県 内	228	13,214	67	3,547	28	2,422	21	237

(3) 月別・曜日別入館者数

年	月	日曜・祝祭日	土曜日（祝日除く）	そ の 他	計
14	4	14,971	5,762	16,270	37,003
	5	26,183	6,166	32,135	64,484
	6	15,399	10,507	20,826	46,732
	7	15,560	5,964	19,731	41,255
	8	15,441	13,098	43,797	72,336
	9	20,581	6,619	8,970	36,170
	10	12,925	6,250	32,969	52,144
	11	14,685	5,818	17,091	37,594
	12	6,456	2,231	4,984	13,671
15	1	9,797	4,616	4,604	19,017
	2	9,637	4,831	10,484	24,952
	3	13,865	8,164	11,870	33,899
計		175,500	80,026	223,731	479,257
構成割合%		36.6	16.7	46.7	100.0

2 来館者アンケート調査結果報告

来館者動向を把握するために、来館回数、情報源、年齢、居住地などの通常アンケート項目に加えて、2002年度は、よりよい運営を目指すために、企画展示や満足度などに関する項目を追加して行った。

回	調査期日	回答者数
1	2002年8月18日～20日	331人
2	2002年11月22日～22日	153人

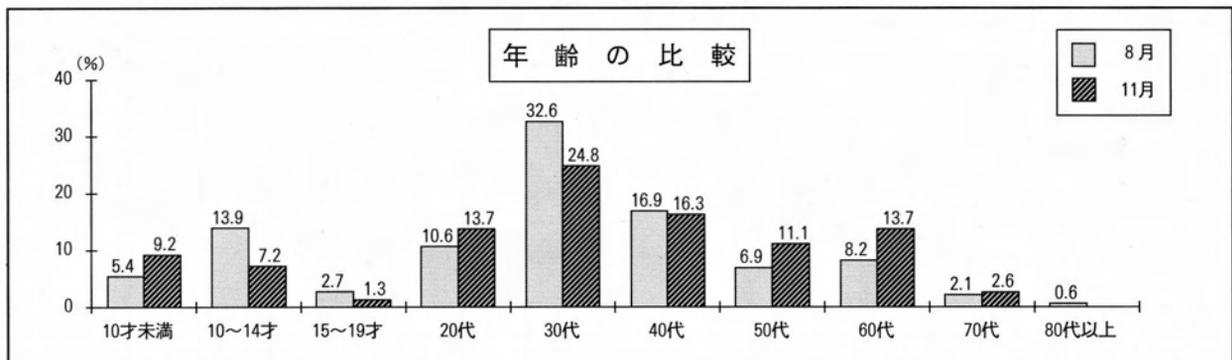
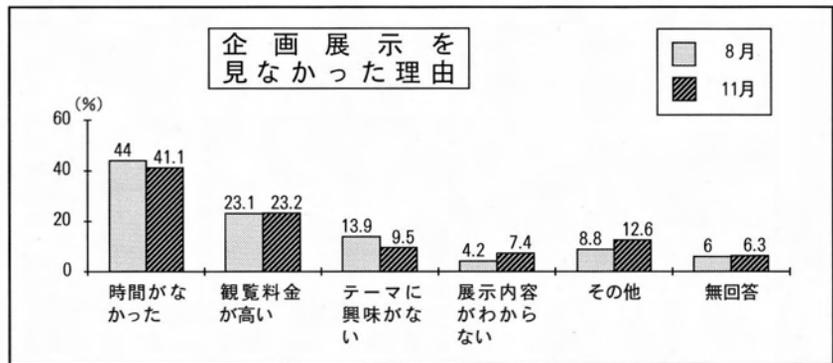
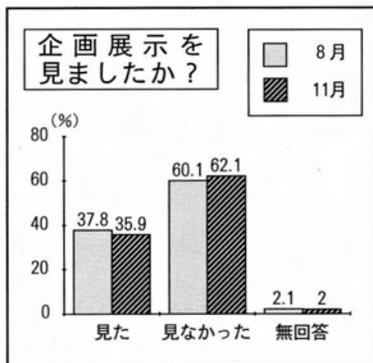
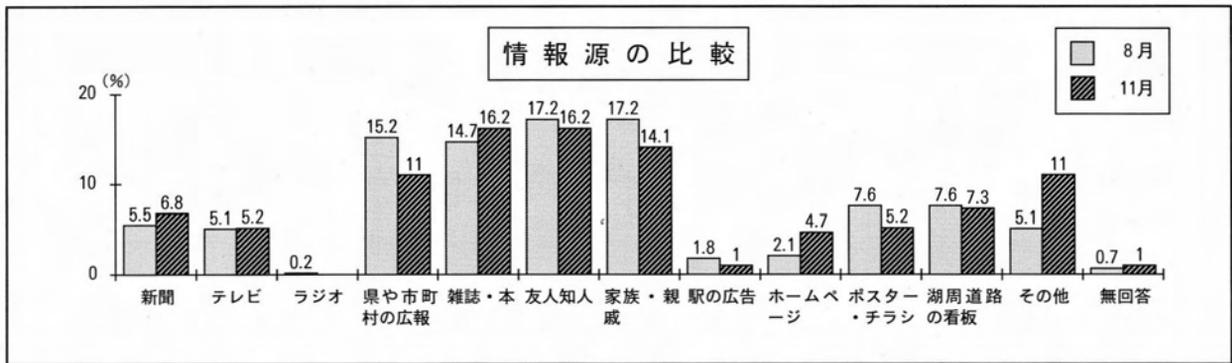
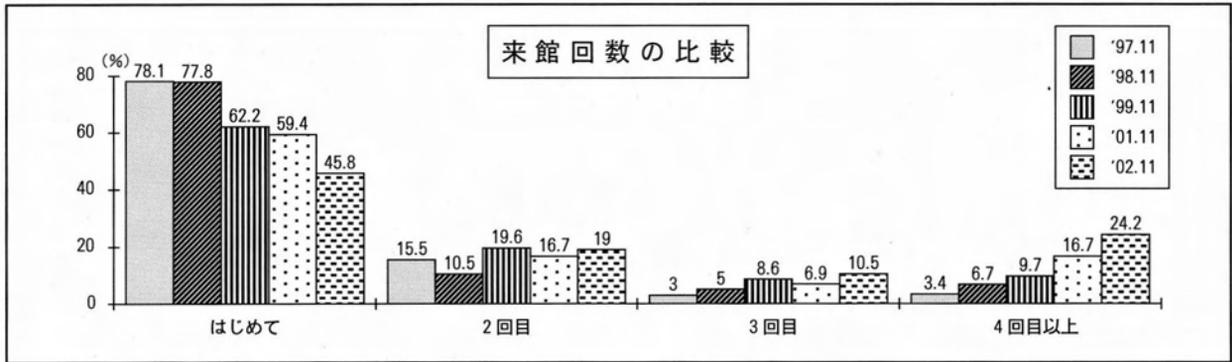
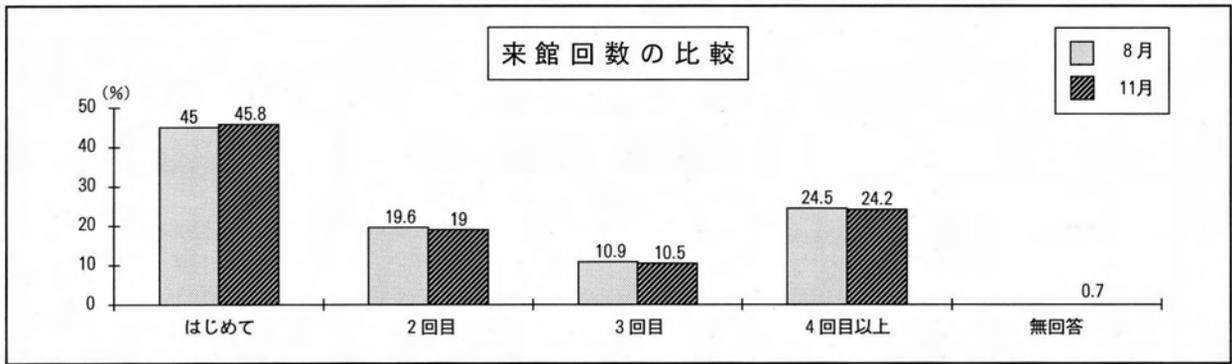
【来館者の動向】

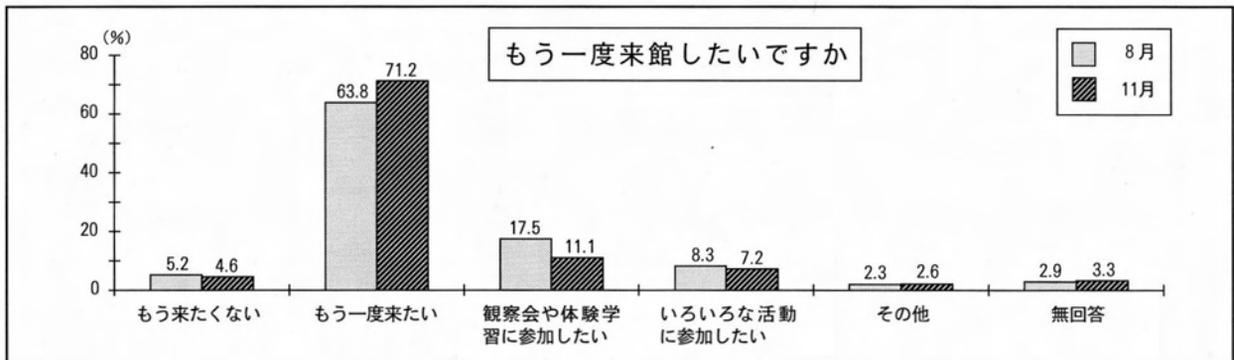
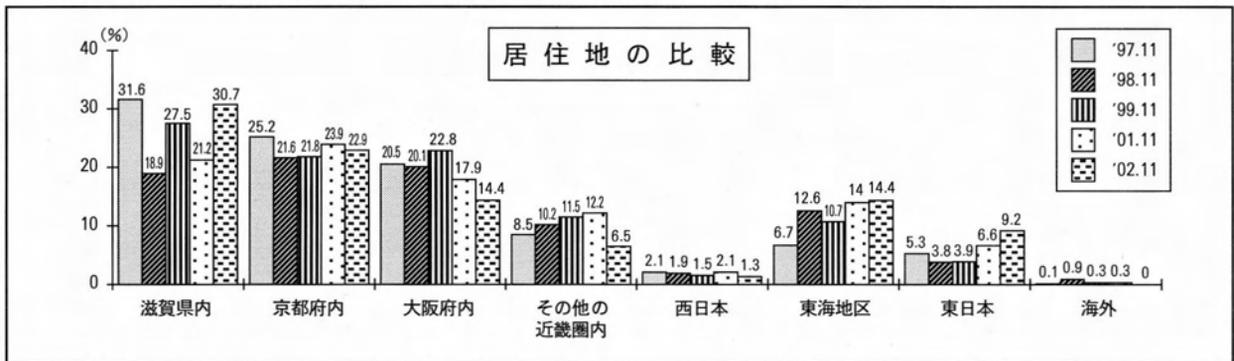
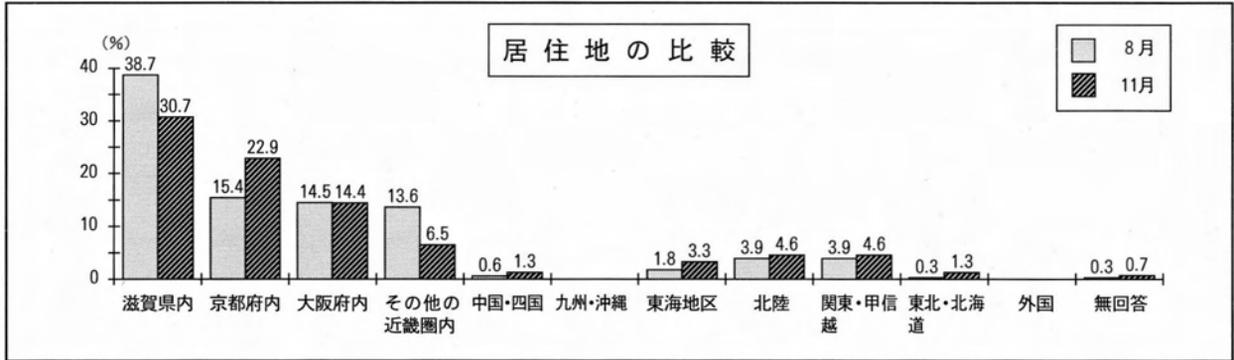
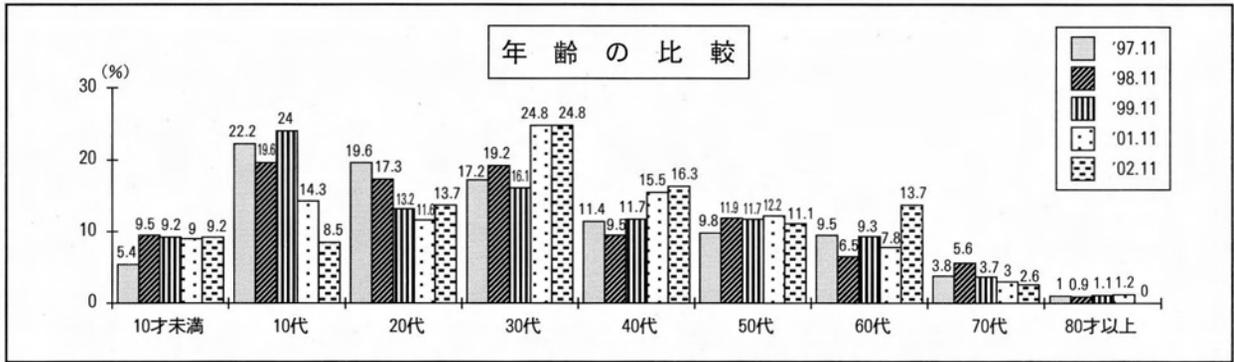
来館回数の比較では、1999年以降、「はじめて」という人の割合が60%弱で、「2回目」「3回目」「4回目以上」のリピーターの割合が40%強で推移してきたが、2002年度は「はじめて」の人とリピーターの割合が逆転し、特に4回目以上という人の割合が増加した。

情報源の比較では、友人や家族の口コミや雑誌が多く、新聞・テレビ・ラジオのマスコミや行政の広報を上回っている。

年齢の比較では、30代が最も多く、10代の微減傾向が続いている反面、40代は微増傾向にある。居住地の比較では、県内が30%以上となっており、また、大阪は微減傾向にあるが、東海や、北陸、関東甲信越などの東日本地域からの来館者が増加傾向にある。

企画展示に関する質問では、「見なかった」と回答した人が60%以上あり、その理由としては「時間がなかった」というものがもっとも多かった。また満足度に関して「もう一度来館したいと思いますか」という質問には、70%以上の人々が「もう一度来たい」と回答され、さらに「展示を見るだけでなく、観察会や体験学習、いろいろな活動に参加したい」人々の割合も20%前後ある。





3 新聞掲載記録

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
4 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布	4 28	湖南に自生の竹を素材にした楽器「竹鼓」のコンサートが県立琵琶湖博物館で開催	朝日新聞
1	各紙折り込み、各戸配布 琵琶湖博物館で復元木船や小銅鐸を「湖の十字路」展で紹介	京都新聞	28	コウラ 捨てるな！ ベット？カミツキガメ拾われ琵琶湖博物館にて特別展示	京都新聞
3	みんなで見よう 面白い「滋賀のカメたち」県立琵琶湖博物館で開催	毎日新聞	29	細密画楽しんで 今森洋輔さんが県立琵琶湖博物館で絵画教室開催	読売新聞
3	滋賀のカメたち 環境とのかかわりを知ろうという生態の紹介展 琵琶湖博物館	朝日新聞 (7171AI滋)	5 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布
5	毎週土曜日に子ども対象に琵琶湖博物館など県の6施設が無料開放	毎日新聞	1	地域の自然に親しませようと琵琶湖博物館では毎週土曜「体験学習の日」と定め親子に開放	毎日新聞
6	学校5日制初の土曜 琵琶湖博物館など滋賀の6施設観覧無料「体験学習の日」始まる	産経新聞	2	県立琵琶湖博物館 側溝を清掃中発見のどう猛なカミツキガメを企画展で展示	中日新聞
9	環境問題カメに学ぶ 琵琶湖博物館で11種25匹展示、パネル啓発も	読売新聞	8	大きくなったら捨てられました カミツキガメを琵琶湖博物館が紹介文と展示	毎日新聞
10	琵琶湖で環境学ぶ 嘉田由紀子教授の発案で水質や透明度調査	京都新聞	8	「研究最前線コーナー」を琵琶湖博物館が設置	中日新聞
10	カメと人の関係紹介 琵琶湖博企画展に11種25匹	京都新聞	10	今森洋輔「琵琶湖の魚」原画展が県立琵琶湖博物館で18日から開催	産経新聞
12	近江の先進地あかす考古資料一堂に環濠集落、古墳、渡来人…174点	朝日新聞	10	「環境バイオ産業フォーラム」が琵琶湖博物館で開催	京都新聞
13	烏丸半島開発問題 バブルの夢引きずる	毎日新聞	11	トンボ標本4200点データベース化進む さらににネット検索もと八尋克郎主任学芸員の話	京都新聞
13	琵琶湖博物館でシンポジウム 湖岸では外来魚駆除釣り大会	朝日新聞	12	自然博物館、集客力誇る 竹鼓のワークショップを琵琶湖博物館で開催	日本経済新聞 毎日新聞
14	琵琶湖博物館で学校5日制の初日、ヨシぶきに子供ら挑戦	産経新聞	?	手作りの竹筒演奏会 琵琶湖博物館で	?
14	県立琵琶湖博物館で、野原でつんだ草花使い、春を感じるしおり作りの体験学習会	朝日新聞	16	安心院化石群の報告書 琵琶湖博物館の高橋啓一専門学芸員の話	大分合同新聞
14	県立琵琶湖博物館で、親子で押し花、農業 楽しく地域に学ぶイベント開催	毎日新聞	17	7月公開 絵図を基に忠実に中世の機織り機復元	京都新聞
17	春に感動、草花でしおり 博物館体験学習	京都新聞	19	今森洋輔さん作品展「うろこの輝きに魅せられて」が琵琶湖博物館で始まる	朝日新聞
18	外来魚駆除へ釣り大会 21日に琵琶湖博物館周辺で	京都新聞	20	500年前の機織り機復元で麻布織り 琵琶湖博物館体験教室	毎日新聞
20	大阪で総合学習の支援の在り方のシンポジウム開催。琵琶湖博物館中川修さんの話	京都新聞	21	丸太にカメ 甲羅干しの楽園に 琵琶湖博物館学芸員の話	京都新聞
22	シンポジウム「ブラックバス問題から水辺の自然を考える」が琵琶湖博物館で開催、関連イベントで外来魚駆除の釣り大会も	朝日新聞	22	動物化石研究で報告書をまとめた琵琶湖博物館高橋啓一専門学芸員の話	朝日新聞
25	疏水でコイ増加 カワナナ食べ、ホタル減少心配、滋賀県立琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員の話	京都新聞	24	外来魚いない琵琶湖へ 駆除釣り大会	朝日新聞
27	琵琶湖博物館きょうからカミツキガメ展示 外来種問題に警鐘	読売新聞	24	琵琶湖の魚生き生きと 今森さんが琵琶湖博物館で原画展	毎日新聞
			24	京滋地球環境カレッジ講座開講 琵琶湖博物館でも	読売新聞
			25	「はしかげさん」で身近 琵琶湖博物館でボランティア事業本格化	京都新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
5	25 環境史テーマに琵琶湖博物館で連続講座	京都新聞	7	11 50～60年代湖東地域の記録浅岡利三郎さん遺作写真展で嘉田由紀子京都精華大教授の話	朝日新聞
	25 琵琶湖博物館など県5施設で環境学習プログラム「水の旅」参加者募集	京都新聞		12 企画展「魚の群れ探検」が明日より琵琶湖博物館で開催	京都新聞
	26 「環境バイオ産業フォーラム」が琵琶湖博物館で開催	朝日新聞		13 博物館に行こう!	朝日新聞(夕刊)
	27 外来魚160キロ退治 琵琶湖博物館多目的広場で開催	朝日新聞		18 琵琶湖博物館が夏休み期間休まず開館 毎月曜日上映会など催し多彩	京都新聞
	29 みずべの思い①水の神さま 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞		20 肌で実感して!中世の近江の暮らし 特別展、琵琶湖博物館できょう開幕	中日新聞
	29 環境史テーマに琵琶湖博物館で連続講座開講	京都新聞		22 琵琶湖のギャングしょうゆに 滋賀県立琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員の話	朝日新聞(夕刊)
6	1 滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布	29 全国から「こども特派員」学習船へ 琵琶湖で環境考える	毎日新聞	
	1 「はしかげさん」制度について滋賀県立琵琶湖博物館川那部浩哉館長の話	日本経済新聞	29 自由研究のコツ伝授、琵琶湖博物館夏休み講座	京都新聞	
	2 第3日曜から琵琶湖博物館などで水を学ぶエコスクラム「水の旅」観察会開始	中日新聞	31 みずべの思い③ 洗うを洗う 嘉田由紀子研究顧問の話	京都新聞	
	4 河川整備転換めぐりシンポジウム開催、嘉田由紀子研究顧問等がパネル討論	京都新聞	31 中世の暮らし知って 県立琵琶湖博物館の橋本道範主任学芸員の話	読売新聞	
	5 琵琶湖博物館で今森洋輔さんイラストレーション教室開催	読売新聞	31 琵琶湖で外来魚大量死 県立琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員の話	読売新聞	
	7 「安心院」報告書を琵琶湖博物館が刊行	読売新聞	8	1 滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布
	8 県立琵琶湖博物館協議会委員2名募集	朝日新聞		1 琵琶湖伝統の定置網「えり漁」を体験、県立琵琶湖博物館が企画	毎日新聞
	12 ブルーギルを醤油に 外来魚問題に詳しい琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員の話	京都新聞		6 琵琶湖博物館でヨシ笛コンサート、親子ら作り方も見学	京都新聞
	13 修学旅行誘致 既に琵琶湖博物館では環境学習実施	日本経済新聞		6 外来種を考える② 琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	京都新聞
	14 「エコ草津体験隊」スタート 琵琶湖博物館でプランクトン観察	京都新聞		7 琵琶湖博物館でこども環境特派員事業閉幕、155人に修了証	毎日新聞
	20 初の一般向けブラックバス解説書を執筆した琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	京都新聞		7 スジシマドジョウ繁殖成功 琵琶湖博物館松田征也主任学芸員の話	京都新聞
	21 琵琶湖博物館ではプランクトン観察 エコ草津探検隊始まる 琵琶湖博物館で投網体験	産経新聞		9 琵琶湖博物館がスジシマドジョウ小型種琵琶湖型を人工授精で繁殖に成功	毎日新聞 (7171A1)産
	26 琵琶湖・淀川の未来考えるシンポ開催、嘉田由紀子研究顧問の意見	朝日新聞 (7171A1)産		9 外来種を考える⑤ 琵琶湖博物館中島経夫総括学芸員の話と川那部浩哉館長の話	京都新聞
	28 トンボ4244個体収録した貴重な標本目録を琵琶湖博物館が刊行	京都新聞		11 楽しい!中世の遊び 県立琵琶湖博物館で木の毬投げて打つのを体験	読売新聞
7	1 滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布		13 新しい教育の場 「科学する目」育てる	中日新聞
	3 マラウイで調査演習、嘉田由紀子京都精華大教授と4学生	京都新聞		14 スジシマドジョウ小型種 人工繁殖に成功 松田征也主任学芸員の話	読売新聞
	5 高島に保育所でカメ産卵	京都新聞		17 絶滅危惧のスジシマドジョウ、琵琶湖博物館が繁殖成功 松田征也主任学芸員の話	産経新聞
	5 体験学習「エコ草津体験隊」が琵琶湖博物館などで実施	毎日新聞		18 県立琵琶湖博物館で中世の暮らし探検を 橋本道範主任学芸員の話	産経新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
8 19	いろんな貝があるね! 琵琶湖博物館で水辺の貝を親子で採取する観察会開催	中日新聞	9 7	琵琶湖のレジャー利用、条例めぐり白熱論議 京都精華大学嘉田由紀子教授や琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員等が発言	京都新聞
21	琵琶湖のレジャー規制、理解を 来月シンポジウムを開催 京都精華大学嘉田由紀子教授・琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員等が討論	京都新聞	7	琵琶湖レジャー利条例案規制内容巡り論議、県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員や京都精華大学嘉田由紀子教授が発言	読売新聞
21	びわこ会議でレジャー利用条例制定推進、県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員が外来魚問題を述べる	中日新聞	13	どうして魚は群れをつくる? 県立琵琶湖博物館で企画展	産経新聞
21	世界水フォーラムプレイベントが琵琶湖博物館で開催 湖上で環境学が	産経新聞	15	ネットで博物館めぐり、琵琶湖博物館の仮想見学ツアーの紹介	読売新聞
21	世界水フォーラムプレイベント UNDP大使紺野さん訴え	朝日新聞	21	琵琶湖博と中国・水生生物研が研究交流強化へ中国・水生生物研が研究交流強化へ	京都新聞
21	世界水フォーラムプレイベント 貧困救済で紺野さん講演	中日新聞	21	琵琶湖博と中国・水生生物研が研究交流強化へ	京都新聞
21	草津でプレイベント 分け合う心大切に 国連開発計画親善大使紺野さん講演	京都新聞	22	琵琶湖博物館が中国の研究機関と交流へ 中島経夫事業部長の話	朝日新聞
21	「水の大切さ考えて」 草津琵琶湖博物館で紺野美沙子さんが講演	毎日新聞	23	「琵琶湖ルール」全国が注視、嘉田由紀子研究顧問の意見	日本産経新聞
22	魚はなぜ群れをつくる!?14種を展示、解説 草津の県立琵琶湖博物館で	中日新聞	23	川那部浩哉会長の淀川水系流域委員会琵琶湖部会が丹生ダム予定地を視察	京都新聞
23	憂楽帳(コラム)	毎日新聞		川那部浩哉会長の淀川水系流域委員会琵琶湖部会が丹生ダムを調査	朝日新聞
25	宿題さあ追い込み、夏休み相談室盛況 草津の琵琶湖博物館で	中日新聞	23	京の河川、在来魚危機 日中研究者でシンポジウム開催	京都新聞
25	夏休みの宿題、出来たかな?琵琶湖博物館で学芸員がアドバイス	京都新聞	23	県立琵琶湖博物館が研究交流 水生植物研究所(中国科学院)と同意書	中日新聞
26	学芸員宿題お手伝い 県立琵琶湖博物館で相談室	読売新聞	25	みずべの思い⑤蛇口がなくなっても 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞
28	みずべの思い④ 風呂と水 嘉田由紀子研究顧問の話	京都新聞	27	リリース禁止をめぐって 命の重み薄れる恐れと嘉田由紀子研究顧問の話	読売新聞
28	中世のむら探検-近江の暮らしのルーツを求めて-県立琵琶湖博物館11月24日まで開催	朝日新聞(7171A12頁)	30	琵琶湖博物館協議会委員、ブライアン・ウィリアムズ氏が琵琶湖を語る	日本経済新聞
28	琵琶湖の生態系潜水調査 県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	京都新聞	10 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布
29	魚、水草、石…丸ごと採集、琵琶湖の生態系を琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員等が潜水調査	京都新聞	1	外来魚リリース禁止② 中井克樹主任学芸員の話	産経新聞
30	瀬田でザリガニ大量発生 水中生物の生態が専門の県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の見解	読売新聞	1	湖南観光バスで回ろう 琵琶湖博物館を含む2コースを運行	京都新聞
30	夏の体験忘れない!全国の小学生達琵琶湖で環境学習	日本教育新聞	6	嘉田由紀子琵琶湖博物館研究顧問が水辺にまつわる景観変遷で講演	朝日新聞
9 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布	6	「私たちの暮らしと密接な関係」と嘉田由紀子琵琶湖博物館研究顧問が景観シンポ	毎日新聞
5	古琵琶湖層群からカタヤ属花粉化石が発見 県立琵琶湖博物館山川千代美主任学芸員の話	中日新聞	6	淡水魚を脅かす!外来魚の実態 生態系保全と釣りの魅力との葛藤と中井克樹主任学芸員の意見	中日新聞(サンデー版)
7	「琵琶湖レジャー規制化」東京でもシンポ、パネリストに県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員等	朝日新聞	6	琵琶湖博物館協議会委員、ブライアン・ウィリアムズ氏の絵画展が近江八幡市で開催	産経新聞

月 日	記事タイトル	新聞社名	月 日	記事タイトル	新聞社名
10 7	暮らしは湖と共に 京都精華大嘉田由紀子教授と学生がアフリカ・マラウイを調査	毎日新聞	11 22	400万人目は石川県の山口さんと背戸さん 開館6年、存在が定着	毎日新聞
7	ビワコオオナマズの写真提供	中日新聞	23	琵琶湖博物館の来館者400万人超	朝日新聞
8	中井克樹主任学芸員の外来魚に対する意見	THE JAPAN TIMES	23	来館者400万人 琵琶湖博物館開館6年	読売新聞
19	琵琶湖・竹生島の森林被害深刻、県立琵琶湖博物館亀田佳代子学芸技師の分析	中日新聞(夕刊)	26	県公共施設 管理業務入札前倒し	中日新聞
19	子ども水フォーラム第1回実行委開く 委員の嘉田由紀子京都精華大教授の話	京都新聞	26	「世界湖沼ビジョン」を議論するシンポジウムが12/15に琵琶湖博物館で開催	京都新聞
26	第3回世界水フォーラム関連行事◇今昔写真で見る世界の湖沼百年	京都新聞	27	みずべの思い⑦地下水に社会の眼を 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞
30	みずべの思い⑥子どもは水辺が好き? 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞	27	丸子船が湖上遊覧に活用	京都新聞
30	外来魚問題について、琵琶湖博物館中嶋経夫総括学芸員のコメント	DAIRY YOMIURI	12 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布
11 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布	6	県内の小中高生の環境学習の成果を琵琶湖博物館で展示	京都新聞
2	草津・琵琶湖博物館でフィンランドと日本の子供達の交流絵画展開催中	朝日新聞	7	人間列島 滋賀県1 琵琶湖博物館館長の川那部浩哉の語る琵琶湖	読売新聞(夕刊)
2	「偉大なるナマズたち」滋賀県立琵琶湖博物館のミュージアムショップ紹介	岐阜新聞	13	県環境学習フェアが琵琶湖博物館で開催 36小中高が成果交換	毎日新聞
4	ナマズ描いたグッズが人気 行ってみよう滋賀県立琵琶湖博物館ミュージアムショップへ	河北新聞	15	淀川水系流域委琵琶湖部会が提言案で意見交換	毎日新聞
5	淀川水系流域委が県内初の公聴会 琵琶湖の水質悪化懸念	京都新聞	15	体験学習でもちつき楽しむ 琵琶湖博物館で	読売新聞
6	「野洲川の化石」で滋賀県立琵琶湖博物館高橋啓一専門学芸員が指導	中日新聞(夕刊)	15	淀川流域委琵琶湖部会提言の表現で議論	京都新聞
7	男性に人気ナマズグッズ 滋賀県立琵琶湖博物館のミュージアムショップ紹介	東奥新聞	16	途上国で汚染防止をと「世界湖沼ビジョン」のシンポジウムが琵琶湖博物館で開催	京都新聞
13	アフリカの水事情紹介 嘉田由紀子研究顧問が「もしも蛇口が止まったら」と題して講演	京都新聞	16	世界湖沼ビジョンのシンポが琵琶湖博物館で開かれ、課題・解決策探る	朝日新聞
14	奇形バス、複数確認 滋賀県立琵琶湖博物館の楠岡泰主任学芸員の話	秋田魁新報社	19	世界湖沼ビジョン、100人参加、琵琶湖博物館でシンポ	産経新聞
15	県とフィンランドの子どもたち“湖国つながり”の絵画展が県立琵琶湖博物館で開催	京都新聞	19	水再考 琵琶湖の汚濁3分の1が生活排水 嘉田由紀子研究顧問の話	産経新聞
19	国際会議「森林と水」が琵琶湖博物館で開催	京都新聞	22	琵琶湖だけの木造和船「丸子船」きょう進水式	毎日新聞
20	琵琶湖博物館 来館者400万人突破	中日新聞	23	2002滋賀の主な出来事 8月6日スジシマドジョウが繁殖	京都新聞
20	県立琵琶湖博物館オープン6年で入館者400万人突破	京都新聞	25	みずべの思い⑧ 琵琶湖の水位 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞
20	草津の県立琵琶湖博物館入館者400万人突破	産経新聞	28	外来魚料理の紹介と琵琶湖の現状について、琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	産経新聞
21	国際会議「森林と水」が県立琵琶湖博物館で開催	毎日新聞	1 1	滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布
21	アジア途上国の森林保全、取り組みの専門家会議が県立琵琶湖博物館で開催	中日新聞	1	嘉田由紀子研究顧問に聞く 意識の上では遠くなった「近くの水」を見直そう	毎日新聞
			3	琵琶湖水位調節 生態系に配慮 滋賀県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	毎日新聞
			3	体験学習「化石にふれてみよう」情報	朝日新聞(7/17/1A1滋賀)

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名	
1	7 釣ったバスを琵琶湖博物館の入場料等に使用できる地域通貨に交換	読売新聞	2	1 滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内&こどもプラスワン「琵琶湖博物館の舞台裏」の巻	各紙折り込み、各戸配布	
	7 加藤登紀子さん、嘉田由紀子研究顧問と語る 子どもたちの水学校 体験と研究を通して大切さを考える機会に	京都新聞		2 380万年の琵琶湖をパネルで再現 県立琵琶湖博物館常設展	朝日新聞	
	8 「森づくり 琵琶湖をはぐくむ森と人」展が来月28日まで琵琶湖博物館で開催	毎日新聞		7 琵琶湖博物館「古代」コーナー—新研究成果生かし壁画や化石50点展示	京都新聞	
	11 琵琶湖の新帝王？ ガー、脅威の侵入 県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	京都新聞		8 ゆうかんさろん 丸子船の技術伝える	中日新聞(夕刊)	
	15 琵琶湖の粘土でオカリナ制作	朝日新聞		9 県立琵琶湖博物館にてわらですだれ作り 農家の知恵学ぶ	読売新聞	
	15 中国、フィンランドの絵本・おもちゃを県立琵琶湖博物館で展示	(7/17/1A1)産経		11 米国人画家ブライアンさんが描く琵琶湖(祖先)の姿	読売新聞	
	15 凡語(丸子船について)	京都新聞		12 カワウのフンで竹生島ピンチ 滋賀県立琵琶湖博物館の亀田佳代子主任学芸員の話	毎日新聞(夕刊)	
	15 県立琵琶湖博物館芦谷美奈子主任学芸員が「水辺の生態系とヨシの浄化能力」と題して講演	京都新聞		17 琵琶湖はきれい？汚い？お登紀さんと考えたヨ	京都新聞	
	15 県立琵琶湖博物館で中国、フィンランドの絵本、おもちゃを展示	毎日新聞		17 児童と加藤登紀子さん 水問題を話し合う	中日新聞	
	17 加藤登紀子さんを先生に「地球の水」「生命の不思議」考えよう 嘉田由紀子研究顧問も参加	産経新聞		22 動植物生き生きと 380万年前の琵琶湖を再現	朝日新聞	
	18 淀川水系のダム凍結提言 環境保全と再生重視 川那部浩哉琵琶湖博物館館長のコメント	京都新聞		23 世界水フォーラム 「水」を学ぼう子ども車座会議	朝日新聞	
	18 発信機でブラックバスを追跡し行動範囲を探る実験に、琵琶湖博物館と近畿大学の共同グループが着手	毎日新聞		26 みずべの思い⑩ 水フォーラムに向けて 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞	
	20 外来魚による生態系破壊をどう食い止めるのか 滋賀県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	産経新聞		3	1 滋賀プラス1 琵琶湖博物館の催し物案内	各紙折り込み、各戸配布
	21 外来魚増え在来魚激減 県立琵琶湖博物館中井克樹主任学芸員の話	京都新聞			5 琵琶湖の水守るのは今 「加藤登紀子と未来たち学校」	京都新聞
	23 「湖の国」の絵本など展示 琵琶湖博物館「中国」「フィンランド」コーナー開設	産経新聞			6 県のHP新たに若者向けサイト開設 データスポットとして琵琶湖博物館などを紹介	京都新聞
	23 湖国同士どこが似てるかな 琵琶湖博物館「世界の子どもたちコーナー」衣替え	京都新聞			8 外来魚”ノーリリース”PR琵琶湖博物館などで釣り大会開催	産経新聞
	24 草津第二小6年生 郷土学習の成果冊子に	読売新聞			9 生息減の淡水生物展示を琵琶湖博物館で開催 ヨシ帯消失なども紹介	京都新聞
	25 淀川水系整備見直しへ委員会審議 川那部浩哉委員(琵琶湖博物館館長)のコメント	毎日新聞			11 水の未来 私たちの視点で伝えたい”子ども特派員”独自の新聞発行	京都新聞
	26 悠久の生物に思いはせ 琵琶湖博物館で化石のレプリカ作り	京都新聞			11 草津、大阪の児童 水環境を熱く語り合う 「子ども水フォーラム」開催	京都新聞
	27 外国人客誘致へPR 韓国マスコミなどを琵琶湖博物館などへ招待	京都新聞			12 外来魚の再放流禁止を考えるシンポ 琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員達5人が話す	京都新聞
	28 釣った外来魚どうする 県立琵琶湖博物館で外来魚駆除シンポジウムが開催	朝日新聞			12 ニコルさんの講演と外来魚釣り 会場は琵琶湖博物館など	読売新聞
	28 500グラム釣れば100円券 ノーリリース協力求め配布	京都新聞			13 大阪で子ども水フォーラムを海遊館、水道記念館、琵琶湖博物館が共同開催	朝日新聞
	29 みずべの思い⑨ 蛇口のむこうの雪 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞			13 「水を守ろう」大阪・滋賀の小学生が討論	産経新聞(夕刊)
					12 外来魚の影響など研究の成果発表 大阪で草津・常磐小	読売新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
3 13	ブラックバス工夫してレストランの食材に 琵琶湖博物館のレストランで	朝日小学 生新聞	3 22	美しい絶滅危惧種「イチモンジタナゴ」	中日新聞
13	世界水フォーラム 専門家座談会	読売新聞		滋賀県立琵琶湖博物館秋山廣光専門学 芸員の話	
14	「環境・人」生かす河川工法	朝日新聞	23	外来魚放流大津でシンポ ニコルさん や中井克樹主任学芸員らが出席	京都新聞
16	フォーラムに期待 水と人 語ろう	京都新聞	23	琵琶湖の固有種を守るため、再放流禁 止に理解をと大津でシンポ 中井克樹 主任学芸員が参加	読売新聞
18	なぜ?なに!イラスト探検隊 エリ漁 について琵琶湖博物館井戸本純一主査 の解説	京都新聞	23	「琵琶湖は世界の宝物」大津のシンポで ニコル氏講演、中井克樹主任学芸員も 参加	朝日新聞
18	水と文化を考える2 嘉田由紀子研究 顧問のコラム	朝日新聞	26	「田んぼ体験教室」の紹介	朝日新聞 (7171A1滋賀)
22	水の文化肌で体験 新旭で海外の若者 と交流 琵琶湖博物館前畑政善専門学 芸員らが子供らに説明	中日新聞	26	みずべの思い① 子どもたち報告 嘉田由紀子研究顧問のコラム	京都新聞
	「生きた水」を誇りに 嘉田由紀子研究 顧問の話				

4 雑誌等掲載記録

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
4	琵琶湖博物館の催し紹介 速報 2001年の国内観光地の動き アミューズメントスポットリスト「滋賀県立琵琶湖博物館」 エンターテイメント編<博物館>琵琶湖博物館	れいかる<春> 旅行・観光地動向フェイル(2002年春号) 春びあ(関西版) Kansai Walker 増刊号	8	琵琶湖博物館催し物紹介 施設案内、琵琶湖博物館企画展紹介 夏休みには動物園、植物園に行こう!琵琶湖博物館紹介 トピックス 滋賀の博物館・美術館①	にゅーすもりやまNo.328 遊び・体験ワクワク情報誌 12号 ステーション 9 信用保証レポート平成14年夏号 経済人 9月号
5	琵琶湖博物館催し物紹介 2002夏 近くて、いい旅。電車&ウォーク「動物園・水族館・植物園」 ミュージアムガイド 琵琶湖博物館 5月6月の特別展(全国の博物館) インフォメーション 滋賀県立琵琶湖博物館「滋賀のカメラたち」	文化情報誌 NEEDS(ニーズ) JR西日本パンフレット 「たびゅうど」 全科協ニュース ネイチャーサイエンスNo.9	9	美術・博物の窓 琵琶湖博物館の紹介 遊園地&テーマパーク 琵琶湖博物館の情報 琵琶湖博物館 体験学習「草木染めを体験してみよう」の紹介	関西1週間 no.919/17号 にゅーすもりやまNo.329
6	家族でお出かけ 山科・醍醐から日帰りで行けるインドアスポット「滋賀県立琵琶湖博物館」 琵琶湖博物館6・7月の催し物「滋賀県立琵琶湖博物館」無料入場券10名にプレゼント あなたの身近な歴史博物館 3号特別付録	feel(フィール) Vol.2 びいめ〜る Vol.26 J・one ジェイ・ワン 週刊朝日百科3 日本の歴史	10	アミューズメントスポットリスト「滋賀県立琵琶湖博物館」 琵琶湖博物館 体験学習「紙すきをしよう」の紹介 琵琶湖博物館イベント紹介	秋びあ 関西版 にゅーすもりやまNo.331
7	琵琶湖博物館 はしかげさん水についてもっと知りたい人は見てみよう「琵琶湖博物館」 7月8月の特別展(全国の博物館) 特集 琵琶湖畔での環境学習・自然体験 夏のおすすめスポット「滋賀県立琵琶湖博物館」 アミューズメントスポットリスト「滋賀県立琵琶湖博物館」 琵琶湖博物館催し物紹介 鮎家の郷おでかけマップ 琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館催し物紹介 全国美術館・博物館ミュージアムグッズ大集合!! 夏休みイベント完全ガイド 夏の大自然満喫ドライブ 滋賀・琵琶湖ドライブ ▼特集▼2001年の国内観光地の動き 琵琶湖博物館8・9月の催し物	にゅーすもりやま No.326 チャレンジ4年生 73号 全科協ニュース 教育旅行情報 かわら版 2002前期 Vol.21 CARD PRESS Vol.68 夏季号 夏びあ 関西版 文化情報誌 NEEDS(ニーズ) 鮎家の郷 れいかる<夏> にゅーすもりやまNo.327 小学五年生 8月号 関西ファミリー・ウォーカー 8/18号 関西ファミリー・ウォーカー 8/18号 旅行・観光地動向フェイル(2002年夏号) びいめ〜る Vol.27	11	「あしななをつくろう」、フィンランドと日本の子どもたちの交流絵画展「森と湖と私」 琵琶湖博物館催し物紹介 催し案内、琵琶湖博物館企画展紹介 2002冬 近くて、いい旅。電車&ウォーク「動物園・水族館・植物園」 琵琶湖博物館12・1月の催し物 琵琶湖博物館イベント紹介 「かがみもちをつくってみよう」 アミューズメントスポットリスト「滋賀県立琵琶湖博物館」 レジャー&レクパーク総覧 2003 第3回世界水フォーラムin滋賀 イベントスケジュール 「冬の植物観察会」紹介 1月2月の特別展、「よみがえれ写真たち」事業とその目的	にゅーすもりやまNo.333 文化情報誌 NEEDS(ニーズ) 遊び・体験ワクワク情報誌 13号 JR西日本パンフレット びいめ〜る Vol.29 にゅーすもりやまNo.335 冬びあ 関西版 総合ユニコム 第3回世界水フォーラム 滋賀県委員会事務局 子供の科学 第63号 全科協ニュース vol.33
8	琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館 体験学習「化石に触れてみよう」の紹介 フォトニュース「滋賀県環境学習フェア」の紹介 「化石に触れてみよう」紹介 琵琶湖博物館イベント紹介 「近江の酒づくりにふれてみよう」、「わら細工で楽しもう」	れいかる<冬> れいんぼう 1月号 にゅーすもりやまNo.337 教育しが no.202 子供の科学 第64号 にゅーすもりやまNo.338	12	2002冬 近くて、いい旅。電車&ウォーク「動物園・水族館・植物園」 琵琶湖博物館12・1月の催し物 琵琶湖博物館イベント紹介 「かがみもちをつくってみよう」 アミューズメントスポットリスト「滋賀県立琵琶湖博物館」 レジャー&レクパーク総覧 2003 第3回世界水フォーラムin滋賀 イベントスケジュール 「冬の植物観察会」紹介 1月2月の特別展、「よみがえれ写真たち」事業とその目的 琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館催し物紹介 琵琶湖博物館 体験学習「化石に触れてみよう」の紹介 フォトニュース「滋賀県環境学習フェア」の紹介 「化石に触れてみよう」紹介 琵琶湖博物館イベント紹介 「近江の酒づくりにふれてみよう」、「わら細工で楽しもう」	にゅーすもりやまNo.337 冬びあ 関西版 総合ユニコム 第3回世界水フォーラム 滋賀県委員会事務局 子供の科学 第63号 全科協ニュース vol.33 れいかる<冬> れいんぼう 1月号 にゅーすもりやまNo.337 教育しが no.202 子供の科学 第64号 にゅーすもりやまNo.338

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
2	琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館観察会紹介「水族展示の舞台裏」	はたらくなかま 創刊号 (情報折込誌) にゅーすもりやま No.339	3	全国おすすめ水族館MAP アミューズメントスポットリスト「滋賀県立琵琶湖博物館」 おでかけレシピ 施設紹介 琵琶湖博物館催し物紹介 インターネット上の博物館情報 の安定性 主任学芸員戸田孝 ミュージアムガイド 琵琶湖博物館の行事予定 2003春 近くて、いい旅。電車&ウォーク「動物園・水族館・植物園」 春らんまんおでかけスポット 琵琶湖博物館紹介 丸子船が見ることができる琵琶湖博物館	ミマン 4 春びあ 関西版 家族でおでかけ 日帰り 京阪神 通刊1121 文化情報誌 NEEDS(ニーズ) 博物館研究 vol.37 No.11 「たびゅうど」2003春 JR西日本パンフレット シティリビング 257号 Duet vol.82
3	ぶらすわん情報 「わら細工で楽しもう」紹介 ミュージアムレポート 琵琶湖のすべてがわかる博物館 特集/滋賀県立琵琶湖博物館 琵琶湖の自然と歴史を感じて みませんか? 滋賀県立琵琶湖博物館の催し物 ■琵琶湖の漁業を体験しよう ■体験学習「ヨシ笛をつくってみよう」 水フォーラムイベント紹介 イベント&アミューズメント紹介	滋賀プラスワンvol.4 特別号 子供の科学 第65号 AQUA LIFE no.284 FOREST(フォレスト) Vol.62 れいんぼう 3月号 あいあいAI滋賀 第136号 リビング滋賀 983号 関西1週間 no.104			

5 テレビ放映・ラジオ放送記録

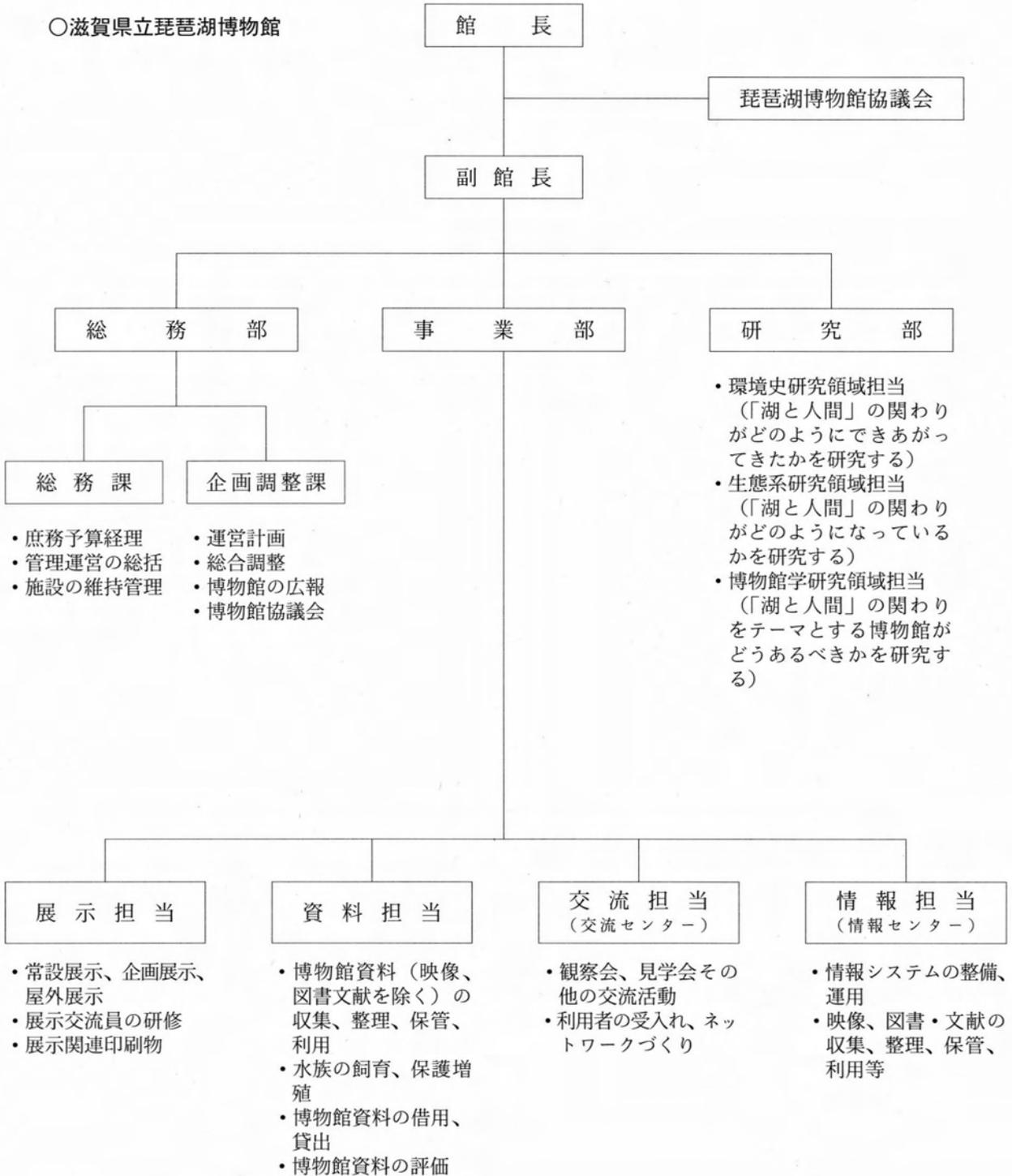
放送日	番組名	内容	媒体	
4	16	ニュースパーク関西	ギャラリー展「湖の十字路」紹介	NHK
	21	うおーたんの子どもプラスワン	琵琶湖博物館の水族展示を探検しよう	びわこ放送
		ニュースパーク関西	企画展示関連「ヨシ葎き」	NHK
	26	ニュースパーク関西	「滋賀のカメたち」展紹介	NHK
5	1	夕方5時ですとっておき関西	カミツキカメと「滋賀のカメたち」展紹介	NHK
	10	県政テレビ滋賀プラスワン	カミツキカメと「滋賀のカメたち」展紹介	びわこ放送
	13	県政テレビ滋賀プラスワン	今森洋輔「うろこの輝きに魅せられて」原画展	びわこ放送
	31	「いくよくるよの 知っとこ滋賀」	琵琶湖博物館週末イベント情報	E-radio FM滋賀
	31	ニュース関西発	今森洋輔「うろこの輝きに魅せられて」原画展紹介	NHK
6	19	夕方5時ですとっておき関西	琵琶湖の誕生と移動・生態系について	NHK
7	5	ニュースパーク関西	県条例バスリリース禁止	NHK
	12	県政テレビタ刊プラスワン	「魚の群探検」紹介	びわこ放送
	26	「いくよくるよの 知っとこ滋賀」	夏休み毎日開館!及び催しについて	KBSラジオ
	30	ニュースパーク関西	「中世のむら探検?近江の暮らしのルーツを求めて?」企画展の紹介	NHK
8	2	田淵岩夫の『得ダネ!てれび』週刊金よ〜び	「中世のむら探検?近江の暮らしのルーツを求めて?」企画展の紹介	KBS京都
	7	特ダネてれび	保護・収容されたオオサンショウウオについて	フジテレビ
	19	ニュースパーク関西	カイツブリの給餌解説について	NHK
	22	ニュース	今森洋輔イラストレーション教室 子供絵画作品展	NHK
	22	滋賀プラスワン インフォメーション	企画展と関連イベント及び夏休み相談室について	E-radio FM滋賀
	23	県政テレビタ刊プラスワン	夏休み相談室の紹介	びわこ放送
	26	『笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ』	琵琶湖の生態系や水環境への取り組みについて	KBSラジオ
9	5	遠足TV!	琵琶湖博物館の紹介	関西テレビ
	6	県政テレビタ刊ニュースプラスワン 週末おでかけ情報	企画展「中世のむら探検」の紹介	びわこ放送
	10	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	企画展「中世のむら探検」の紹介	びわこ放送
	19	「科捜研の女4」最終回スペシャル	楠岡主任学芸員のプランクトン映像資料	朝日放送
	21	鋭ちゃんのあさいちラジオ		MBSラジオ
10	13	『遠くへ行きたい』	琵琶湖博物館とヨシの付着生物の世界の紹介	読売テレビ・日本テレビ
	16	午後は〇〇思いっきりテレビ	琵琶湖の富栄養化防止条例について	日本テレビ
	18	関西クローズアップ	外来魚リリース禁止条例について	NHK
	25	県政テレビタ刊プラスワン	紙すきをしよう	びわこ放送

放送日	番組名	内 容	媒 体	
11	2	朝日ニュースター「地球家族」	琵琶湖博物館紹介、学芸員インタビュー	C S衛星放送
	16	明日どこいこー温湖知新・草津を巡る旅ー	琵琶湖博物館紹介	阪神シティーケーブル
	23	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	3府知事水談義、丸子船について	びわこ放送/KBS京都
12	6	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	滋賀県環境学習フェアの紹介	びわこ放送
	11	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	フィンランド絵画展、世界のこどもたちコーナー紹介	びわこ放送
	18	サンサンワイド滋賀	水族展示、琵琶湖の生態系・外来魚問題について	KBSラジオ
		ニュースパーク関西	自然環境改善に役立つ魚、ゲンゴロウブナ・ワタカについて	NHK
1	2	滋賀プラスワン インフォメーション	ギャラリー展「森づくり」について	E-radio FM滋賀
	8	滋賀プラスワン インフォメーション	琵琶湖博物館1月の予定	E-radio FM滋賀
	15		ディスカバリールーム、フィンランドコーナー紹介	滋賀ケーブルテレビ
	17	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	体験学習「化石にふれてみよう」紹介	びわこ放送
	30	滋賀プラスワン インフォメーション	琵琶湖博物館2月の予定	E-radio FM滋賀
2	9	うおーたんの子どもプラスワン	琵琶湖博物館でふしぎ発見	びわこ放送
	9	うおーたんの子どもプラスワン	ギャラリー展「森づくり」について	びわこ放送
	14	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	ギャラリー展示「森づくり」文字情報	びわこ放送
	28	「いくよくるよの 知っとこ滋賀」	博物館イベント情報	KBSラジオ
3	3	滋賀プラスワン インフォメーション	琵琶湖博物館3月の予定	E-radio FM滋賀
	13	県政テレビタ刊ニュースプラスワン	ギャラリー展「世界の水辺の暮らし百年」の紹介	びわこ放送
	31	滋賀プラスワン インフォメーション	琵琶湖博物館4月の予定	E-radio FM滋賀

Ⅲ 組織および運営

1 組 織

○滋賀県立琵琶湖博物館



職員構成 (2002年4月1日現在)

区分	館長(非常勤)	行政職	研究職	教育職	小計	嘱託等	合計
人数(名)	1	12	29	2	44	16	60

2 職 員

- 館 長 川那部 浩 哉
- 副館長 重 野 良 寛

総務部

- 部 長 森 十四明
- ◇ 総務課
 - 課長(兼) 森 十四明
 - 課長補佐 白 川 重 義
 - 主 幹 西 澤 崇
 - 同 奥 野 昭 子
 - 主任主事 西 村 佳 子
 - 同 谷 口 ゆかり
 - 主 事 中 山 将 人

◇ 企画調整課

- 課長(兼) 用 田 政 晴
- 課長補佐 藤 川 剛
- (兼) 楠 岡 泰
- (兼) 牧 野 久 実
- (兼) 松 田 征 也
- (兼) 矢 野 晋 吾

事業部

- 部長(兼) 中 島 経 夫
- ◇ 展示担当
 - G.L.(兼) 山 川 千代美
 - (兼) アンドリュー ロンター
 - (兼) 野 崎 信 宏
 - (兼) 井戸本 純 一
 - (兼) 戸 田 孝
 - (兼) 橋 本 道 範
 - (兼) 亀 田 佳代子
 - (兼) 宮 本 真 二

◇ 交流担当(交流センター)

- G.L.(兼) 前 畑 政 善
- (兼) 杉 谷 博 隆
- (兼) 高 橋 啓 一
- 主査(併任) 森 田 光 治
- (兼) 長 崎 泰 則
- (兼) 草 加 伸 吾
- (兼) 桑 原 雅 之
- (兼) 牧 野 厚 史
- (兼) 芳 賀 裕 樹
- 主任主事(併任) 西 垣 亨

◇ 資料科

- G.L.(兼) マーク J. グライガー
- (兼) 八 尋 克 郎
- (兼) 中 藤 容 子
- (兼) 榭 永 一 宏

◇ 情報担当(情報センター)

- G.L.(兼) 秋 山 廣 光
- (兼) 中 井 克 樹
- (兼) 芦 谷 美奈子
- (兼) 里 口 保 文
- (兼) 大 塚 泰 介

研究部

○部長(兼) 布谷 知夫
 研究顧問 嘉田 由紀子

◇ 環境史研究領域

G.L. 専門学芸員 高橋 啓一
 S.G.L. 総括学芸員 中島 経夫
 専門学芸員 用田 政晴
 主任学芸員 牧野 久実
 同 山川 千代美
 同 橋本 道範
 学芸員 里口 保文
 同 榊 永一宏
 同 宮本 真二

◇ 博物館学研究領域

G.L. 総括学芸員 布谷 知夫
 S.G.L. 主任学芸員 八尋 克郎
 専門学芸員 秋山 廣光
 主査(併任) 森田 光治
 主任学芸員 戸田 孝
 同 芦谷 美奈子
 主任主事(併任) 西垣 亨

◇ 生態系研究領域

G.L. 専門学芸員 アンドリュー ロンター
 S.G.L. 主任学芸員 亀田 佳代子
 専門員(兼) 杉谷 博隆
 専門学芸員 前畑 政善
 同 マーク J. グライガー
 主任主査(兼) 野崎 信宏
 主査 井戸本 純一
 主査(兼) 長崎 泰則
 主任学芸員 草加 伸吾
 同 楠岡 泰
 同 中井 克樹
 同 松田 征也
 同 桑原 雅之
 同 牧野 厚史
 同 芳賀 裕樹
 学芸員 中藤 容子
 学芸技師 矢野 晋吾
 同 大塚 泰介

注) G.L.はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

臨時的任用職員・嘱託員

楠本 優子	総務事務	山口 幸江	昆虫標本整理
小川 貴子	同 (H14.4～10)	國分 政子	歴史民俗資料整理
小菅 由有子	館長秘書	中井 大介	植物標本整理
宮田 輝美	同	杉江 鉄之介	実習補助・団体利用受付
山中 裕子	ディスカバリールーム運営	北川 峰男	屋外展示運営
松尾 知	同	青木 伸子	交流事業
大澤 勉	展示物の製作・維持補修	天野 好美	メディアラボ業務機器保守管理
野間 恵美子	地学標本整理 (～H14.6)	中西 美智子	図書情報利用室運営・図書資料整理
小泉 誠	地学標本整理 (H14.7～)		

県職員以外の職員等およびフィールドレポーター・はしかけ登録者

◇ 特別研究員

高橋 鉄美、大原 健一

◇ 海外研修生

曾 志新

◇ 研究の補助

打越 崇子、宇野 美香、大久保 綾子、大島 輝美、岸 妙子、白井 幸子、瀬川 也寸子、田尾 稲子、高田 千都子、谷川 真紀、中山 法子、西山 佳奈、西山 順子、平野 文子、丸山 真史、山本 亜紀

◇ フィールドレポーター

尾形 勇、阪口 進、小倉 市子、奥村 恵子、前田 雅子、伊東 貴美子、本田 典子、江尻 清子、中島 いずみ、青井 千佳世、有田 重彦、中西 健、小野 恵、澤島 篤、谷元 峰男、門脇 きみ子、松田 常子、武田 繁、松本 重子、遠阪 聡子、白井 幸子、井谷 和美、松本 勉、桑村 邦彦、東野 重信、大住 光生、大住 純子、井門 静夫、小林 光子、杉江 ミサ子、小西 昌子、古谷 善彦、中後 佐知子、小原 比良司、川口 薫、伊吹 達郎、小林 隆夫、青木 伸子、小原 寿子、山崎 千晶、橋本 峯治、山本 恵美子、川北 浩史、高瀬 喜久男、村上 博史、北側 忠次、津田 國史、浅井 良英、奥村 恵津子、高田 正一、津田 正澄、高田 節子、森 擴之、井上 弘司、椛島 昭紘、椛島 奈美子、安井 加奈恵、寺田 誠、雲川 弘子、森 小夜子、中村 かをる、青山 喜博、石井 秀憲、浅井 融、坪田 敏男、田中 明子、加固 啓英、寺村 知子、田中 昭一、北川 幸雄、加藤 広康、澤田 弘行、江竜 昭、口分田 政博、大橋 義孝、梶本 さつき、水相 修躬、小西 光代、土田 正文、岩根 健治、中川

徳司、早田 幸子、角井 俊明、堀野 善博、平井 政一、中塚 幸二、志茂 文明、岡田 幹夫、
奥山 正史、井野 勝行、岡崎 直純、京 美季男、黒野 茂子、奥村 勤、小利池 享良、岡田
さゆり

◇ はしかけ

池藤 孝彦、池藤 佳子、池藤 仁美、長谷川 倫人、斎藤 眞由美、斎藤 眞琴、北側 忠次、
北村 美香、有田 重彦、永野 麻也子、古谷 善彦、村上 靖昭、森本 香、藤野 未音、藤野
美由紀、武田 広志、金山 雅幸、金山 美佐子、金山 耕、木下 多津江、森本 和征、矢原
功、高田 昌彦、瀬尾 好英、川南 仁、後藤 眞吾、小西 春次、水戸 基博、水戸 涼介、
吉田 洋、吉田 順子、吉田 和加、瀬川 也寸子、木瀬 昭子、杉江 明、山本 篤、桑垣 瑞、
竹内 正吾、竹内 芳子、山本 恵美子、吉井 隆、吉野 千栄子、植村 眞由美、植村 友美、
植村 公則、今橋 克寿、小原 寿子、西川 学、橋本 峯治、小林 智子、小林 蒼馬、坪井
美智子、竹谷 満弘、佐々木 行忠、藤野 あぐり、茂森 美代子、金山 玲子、中田 智佳子、
大谷 利秋、大住 光生、中村 峰子、西村 義隆、中村 美緒、片山 好彦、中村 眞美、水上
二巳夫、立石 文代、小林 隆夫、佐藤 義信、松本 勉、青山 喜博、尾形 勇、岸本 順次、
津田 國史、中後 佐知子、村上 五十三、天津 浩之、大原 怜奈、谷元 峰男、森永 紗江子、
木戸 美知留、西脇 実代、天野 優子、中川 雅博、芦田 弘美、松岡 治子、遠藤 吉三、
吉村 仙二郎、武田 繁、澤村 武雄、前田 雅子、角田 典久、高瀬 喜久男、中井 大介、
津屋 結唱子、津屋 有李、佐藤 俊明、藤田 裕子、和田 善一郎、戸田 顕治、富岡 親憲、
西田 翔太郎、花田 美佐子、渡邊 一郎、渡邊 康子、松田 澄子、中川 修、亀田 洋典

◇ 情報システム管理

津田 厚弘、佐本 泉

◇ 図書運営

青合 香代、日下部 純子、後藤 嘉治子、中西 かよ子、野口 比佐江

◇ 資料整理員

赤石 直美、阿刀 陽子、石田 未基、今井 一矢、上原 千春、内田 京子、太田 学、木内
加奈子、岸田 紗希、日下部 麻里、黒田 耕平、今野 一郎、佐々木 剛、佐々木 みき、杉野
由佳、高橋 綾子、武田 恵理子、田中 多恵子、辻 美穂、坪井 美智子、出口 武洋、中野
康司、西川 佳子、藤井 路子、細川 真理子、村田 千夏、物申 仁美、山本 眞彩子

◇ 水族飼育員

岡本 博仁、長田 智生、柴山 弘史、関 慎太郎、安川 浩史、吉川 眞一郎、中本 巨樹、
佐藤 智之、池田 康秀、岡田 隆、深野 絢子、右川 洋一、山田 康幸、橋本 禪

◇ 展示交流員

齊藤 晶久、北村 奈津江、芦田 弘美、荒井 紀子、奥村 恵子、福井 明美、松岡 治子、
今泉 美保、北川 喜美栄、岩見 勉、大川 篤子、近藤 摩子、澤 淳子、中澤 真由美、
三輪 尚子、池畑 慎吾、中村 とく子、井出 範子、犬塚 菊美、岡本 晴行、北田 昌子、
寺井 さやか、森永 紗江子、吉田 治美、大林 博子、折中 康子、杉本 和子、橋本 富栄、
山本 孝子、釜本 敦子、清水 聡子、寺田 歩、山内 真理、山元 真里、愛須 美由起、石川
寛子、金盛 美和、近藤 由美子、霜野 ゆかり、田村 芳子、大山 綾子、大山 智子、坂井
純子、土井 博子、今泉 千鶴、奥村 麻衣子、近藤 秀憲、中村 瑞穂、村田 左知、
本城 徹也、北村 美香、木下 幸、澤井 秀之、西山 優子

◇ 常設展示補修

牧田 英男、緒方 久美

◇ 企画展示運営

今河 桃子、貝増 千賀子、川那辺 成和、服部 尚子

◇ 警備員

石田 茂雄、佐々 忠政、村上 博、中村 秀夫、羽月 公一、高橋 保二、米山 勇、
山本 秀一、竹内 国憲、須藤 富司夫、大宮 繁雄

◇ 設備管理員

若林 敏雄

◇ 清掃員

滝 勇男、堀井 加代、勝島 道子、北川 智子、平井 千代子、中井 寿美子、天野 泰宏、
伊藤 智子

◇ ミュージアムショップ

森 薫、中島 千賀子、田中 優、高口 恵

◇ ミュージアムレストラン

平井 芳章、井上 ゆき子、伊藤 雅美、清水 令子、中井 和美、堀川 勝義、佐々木 友江、
岡田 真弓美、下園 美栄子、柴田 明美、奥野 香代子、千足 ひろ子、井上 良子、
西村 望美、飯田 昌子

3 予 算

平成14年（2002年）度歳入状況 (円)

科 目	決 算 額
使用料及び手数料	178,637,583
財 産 収 入	2,070,650
雑 入	658,299
合 計	181,366,532

平成14年（2002年）度歳出状況 (円)

事 業 名	事 業 内 容	決 算 額
管 理 運 営 費	施設維持費、烏丸半島整備費、事務費	315,150,723
調査資料収集事業費	研究費、研究備品、資料収集製作、資料整理保管、 水族飼育	234,703,515
展 示 事 業 費	企画展示、常設展示、展示維持管理、展示用印刷物	193,851,797
情報交流事業費	情報システム管理、データ入力、図書整備、交流事 業開催、フィールドレポーター	95,970,948
	合 計	839,676,983

4 滋賀県立琵琶湖博物館協議会

第1回

開催日時 2002年7月28日(日) 10:30~16:00

場 所 琵琶湖博物館 会議室

第2回

開催日時 2002年12月11日(水) 15:00~17:00

場 所 琵琶湖博物館 会議室

第3期委員

(任期:2000年9月1日~2002年8月31日)

氏 名	区 分	現 職 (2002年4月現在)
中 西 洪 之	学校教育	(前) 守山市立速野小学校 校長
南 出 義一郎	学校教育	野洲町立野洲北中学校 校長
木 邊 美	社会教育	(前) ガールスカウト日本連盟滋賀県支部 支部長
東 洋 子	社会教育	滋賀県商工会女性部連合会 会長
荻 野 和 彦	学 識 者	滋賀県立大学環境科学部 教授
西 野 嘉 章	学 識 者	東京大学総合研究博物館 教授
内 田 紘 臣	学 識 者	串本海中公園センター 館長
染 川 香 澄	学 識 者	ハンズ・オン・プランニング代表
上 林 彰	学 識 者	(前) びわ湖放送報道制作局 局長
日 高 敏 隆	学 識 者	総合地球環境学研究所 所長
西 野 麻知子	学 識 者	滋賀県立琵琶湖研究所 総括研究員
岡 本 幸 助	学 識 者	滋賀県脊髄損傷協会 会長
古 田 研 二	学 識 者	草津市長
富 田 裕 作	学 識 者	公募委員
福 田 郁 理	学 識 者	公募委員

第4期委員

(任期：2002年9月1日～2004年8月31日)

氏名	区分	現職(2002年4月現在)
大町一仁	学校教育	草津市立玉川小学校 教諭
澤裕子	学校教育	高島町立高島中学校 教諭
西尾久美子	社会教育	エコ村ネットワーク 副会長
佐藤祐子	社会教育	全国旅館生活衛生同業組合連合会青年部 経営者育成委員
荻野和彦	学識者	滋賀県立大学環境科学部 教授
西野嘉章	学識者	東京大学総合研究博物館 教授
内田紘臣	学識者	串本海中公園センター 館長
染川香澄	学識者	ハンズ・オン・プランニング 代表
岡村恵子	学識者	毎日新聞大津支局 記者
横山俊夫	学識者	京都大学大学院地球環境学堂 地球環境学舎 三才学林長、(併任)人文科学研究所 教授
西野麻知子	学識者	滋賀県琵琶湖研究所 総括研究員
木上秀保	学識者	滋賀県脊椎損傷者協会 副会長
ブライアン・ ウィリアムズ	学識者	風景画家
藤丸厚史	学識者	公募委員
山本真知子	学識者	公募委員

IV 博物館利用のご案内

- 開館時間 AM 9 : 30～PM 5 : 00 (入館はPM 4 : 30まで)
- 休館日 毎週月曜日 (休日である場合を除く) ・年末年始 (12月28日～1月3日)
- 観覧料金 (常設展)

	個 人	団体 (20人以上)	共通券 (*)
小学生・中学生	250円	200円	320円
高校生・大学生	400円	320円	520円
大人	500円	400円	650円

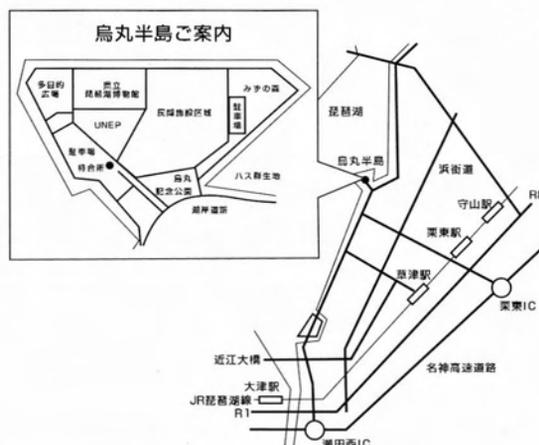
※未就学児、県内居住の65歳以上の方と障害のある方ならびに県内の学校行事としての観覧は無料です。
(詳細についてはご確認ください。)

※企画展は別途料金となります。(開催期間中)

*草津市立水生植物公園「みずの森」との共通券。なお、団体は取り扱いません。

■交通案内

- JR新幹線「京都駅」「米原駅」からJR琵琶湖線(東海道)線に乗り換え「草津駅」「守山駅」で下車。
- ・「草津駅西口」から、近江鉄道バス「烏丸半島」行きで「琵琶湖博物館前」下車(約22分)。タクシーで約20分。
- ・「守山駅西口」からタクシーで約20分。
- 車では、名神高速道路「栗東I.C」から国道1号線を草津方面へ。信号2つ目「上鈎」で右折。湖岸道路につき当たって(「湖岸志那中町」)再度右折し、約1kmで「烏丸半島」へ。
- 航路では、琵琶湖汽船のシャトルボートが「大津港」「びわこ大橋港」「雄琴温泉港」から「草津烏丸半島港」へ
(問い合わせ先: 琵琶湖汽船 077-524-5000)



■駐車料金

大型バス	1,600円	マイクロバス	1,050円
普通車	500円	二輪車	200円

*博物館観覧者が使用する普通車と二輪車は無料扱いとなります。

【館内でののご案内】

質問コーナー: 学芸職員が図書室のカウンターでみなさんからのご質問にお答えしています。

フロアトーク: 原則としてAM11:00から学芸職員が担当の展示コーナーで説明を行っています。

【催し物案内】

ミュージアム観察会: 博物館のまわりで自然観察したり、館内の施設で実験・実習を行います。

フィールド観察会: 県内各地のフィールドで地域の自然や人々のくらしを見つめ直します。

博物館探検: 普段は見ることのできない博物館や展示室の裏側を学芸職員が紹介します。

博物館講座: 一般の方を対象に専門的な内容をわかりやすく数回連続でお話しします。

博物館入門セミナー: 琵琶湖博物館の活動や展示を幅広く知ることのできる連続講座です。

(事前に往復ハガキで申し込んでください。詳しくは、Faxサービス (077-568-4844)、

インターネットホームページ (<http://www.lbm.go.jp/>) で案内しています。)

平成15年度 職員紹介

職員

(2003年4月1日現在)

- 館長 川那部 浩哉
- 副館長 重野 良寛

総務部

- 部長 川原 慎一
- ◇ 総務課
 - 課長(兼) 川原 慎一
 - 課長補佐 白川 重義
 - 主幹 久保 一吉
 - 同 奥野 昭子
 - 主任主事 田中 順子
 - 同 谷口 ゆかり
 - 主事 井上 裕士

企画調整課

- 課長(兼) 用田 政晴
- 課長補佐 杉野 和彦
- (兼) マーク J. グライガー
- (兼) 松田 征也
- (兼) 牧野 久実
- (兼) 牧野 厚史
- (兼) 芳賀 裕樹
- (兼) 里口 保文

事業部

- 部長(兼) 中島 経夫
- ◇ 展示担当
 - G.L.(兼) 山川 千代美
 - (兼) アンドリュウ ロンター
 - (兼) 野崎 信宏
 - (兼) 井戸本 純一
 - (兼) 中井 克樹
 - (兼) 戸田 孝孝
 - (兼) 亀田 佳代子
 - (兼) 中藤 容子
 - (兼) 宮本 真二
- ◇ 資料担当
 - G.L.(兼) 秋山 廣光
 - (兼) 楠岡 道範
 - (兼) 橋本 道範
 - (兼) 榊 永一

交流担当(交流センター)

- G.L.(兼) 前畑 政善
- 主査(併任) 谷口 雅之
- 主任主事(併任) 西垣 亨
- (兼) 杉谷 博隆
- (兼) 高橋 啓一
- (兼) 長崎 泰則
- (兼) 草加 伸吾
- (兼) 桑原 雅之

情報担当(情報センター)

- G.L.(兼) 八尋 克郎
- (兼) 芦谷 美奈子
- (兼) 矢野 晋吾
- (兼) 大塚 泰介

研究部

- 部長(兼) 布谷 知夫
- 研究顧問 嘉田 由紀子
- ◇ 環境史研究領域
 - G.L. 専門学芸員 高橋 啓一
 - S.G.L. 総括学芸員 中島 経夫
 - 専門学芸員 用田 政晴
 - 主任学芸員 牧野 久実
 - 同 山川 千代美
 - 主任学芸員 橋本 道範
 - 学芸員 里口 保文
 - 同 宮本 真二
 - 同 榊 永一
- ◇ 博物館学研究領域
 - 総括学芸員 布谷 知夫
 - G.L. 主任学芸員 八尋 克郎
 - S.G.L. 専門学芸員 秋山 廣光
 - 主任学芸員 戸田 孝
 - 同 芦谷 美奈子
 - 主査(併任) 谷口 雅之
 - 主任主事(併任) 西垣 亨

生態系研究領域

- G.L. 専門学芸員 アンドリュウ ロンター
- S.G.L. 主任学芸員 亀田 佳代子
- 総括学芸員 前畑 政善
- 専門員(兼) 杉谷 博隆
- 専門学芸員 マーク J. グライガー
- 主任主査(兼) 野崎 信宏
- 主査(兼) 長崎 泰則
- 主査 井戸本 純一
- 主任学芸員 草加 伸吾
- 同 楠岡 泰
- 同 中井 克樹
- 同 松田 征也
- 同 桑原 雅之
- 同 牧野 厚史
- 同 芳賀 裕樹
- 同 矢野 晋吾
- 学芸員 大塚 泰介
- 同 中藤 容子

注) G.L.はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

館長 兼 滋賀県顧問 川那部 浩哉 (かわなべ ひろや)

略歴 1960年京都大学大学院理学研究科博士課程修了・京都大学理学博士。同年京都大学助手、1961年同講師、1967年同助教授、1977年同教授、1991年同生態学研究センター長を経て、1996年退官。同年4月より現職。

賞罰 1960年朝日奨励賞、1995年カナダ国ゲルフ大学 (U. of Guelph) 名誉理学博士、1996年京都大学名誉教授・日本学士院賞エディンバラ公賞、1997年アメリカ芸術・科学アカデミー (AAAS) 外国人名誉会員・世界科学協会 (IMS) 会員、1999年京都新聞文化学術賞、2001年世界芸術・科学アカデミー (WAAS) 会員。

役員 日本生態学会元会長、国際生態学連合 (INTECOL) 元副会長・第5回大会会長、応用生態工学会研究会前会長、国際古代湖生物学会 (SIAL) 会長、国際理論応用陸水学会 (SIL) 日本代表・生物多様性委員会委員長、生物多様性科学国際研究計画 (DIVERSITAS) 科学委員会前委員・西太平洋アジア地域ネットワーク (DIWPA) 委員長、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」研究推進委員会委員長、世界自然保護基金ジャパン (WWFJ) 常任理事、第9回世界湖沼会議企画委員会委員長、第3回世界水フォーラム運営委員会委員、など。

専門分野 生態学

研究テーマ 社会と群集の生態学 文化多様性と生物多様性との歴史的関係

1995年以来、アユの社会構造や川や湖の魚の種間関係を、おもに調べてきたつもり。京都府宇川の魚について48年間毎年調査してきた愚直さを、大いに誇りにしている。また、アフリカ大陸のタンガニカ湖などで、1977年ごろから国際共同研究を進めてきたが、極端なまでに地域主義的な発想を持ち、「当該地域の人々が調査のリード役を果し、さまざまな決定はその地域の人々が行うべきだ」との考えのもと、現地の研究者のアドバイザーの役割に徹することに努めてきた。「生物間の関係の総体」の研究が重要だと、40年以上言い続けてきたところ、最近の生態学の国際的流れはこの方向にかなり近づいているようで、いささか満足している。「生物の多種共存機構を促進する相互作用機構」すなわち「地球共生系」の共同研究に引き続いての、「生物多様性を促進する生態複合」すなわち「共生生物圏」の共同研究は、国内的には2002年3月に一応終わったが、その国際共同研究はさらに続いている。琵琶湖博物館に来てからは、従来からの「生物間の関係の総体」を拡張して、「湖と人間の関係の総体の歴史性」を自分なりに考え直しており、「古代湖は生命文化複合体」などと、奇妙な用語を口走ってもいる。『原色 日本淡水魚類図鑑』(1963、76)、『川と湖の魚たち』(1969)、『生物と環境』(1978)、『カラー名鑑日本の淡水魚』(1989)、『生物界における共生と多様性』(1996) など、比較的題名のおとなしい著書もあるが、『偏見の生態学』(1987)、『曖昧の生態学』(1996)、『魚々食記』(2000) など、鬼面人を驚かすような題のものもある。また、私淑していたイギリスの研究者エルトンさんの本を3冊翻訳し、『シリーズ地球共生系』(全6巻)、『共生の生態学』(全8巻)、『ビジュアル科学講座生命の地球』(全13巻)を監修したりもした。最近編集したものに、『タンガニカ湖の魚類群集』(1997、英文)、『古代湖：その文化的・生物的多様性』(1999、英文)、『古代湖：生物多様性・生態・進化』(2000、英文)、『博物館を楽しむ：琵琶湖博物館ものがたり』(2000) などがある。また、『日本の魚類生物学：川那部浩哉に捧げる』(1998、英文)や『川の自然を残したいー川那部浩哉先生とアユ』(2000)などを頂き、光栄に思うと同時にいささか恥ずかしい気もしている。

研究顧問 嘉田由紀子 (かだ ゆきこ)

略歴 1975年米国ウィスコンシン大学大学院修士課程修了、1981年京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得、同年琵琶湖研究所入所。1985年農学博士(京都大学)取得、1991年より滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室、1997年琵琶湖博物館総括学芸員を経て、2000年よ

り現職。2000年より京都精華大学教授。

専門分野 環境社会学、文化人類学

研究テーマ 琵琶湖周辺の水と人のかかわりの環境史、水域資源管理の比較文化論的研究、シロウトサイエンスの方法論的研究

中学校の修学旅行で京都・近江にほれこんだのがこちらに住み着くきっかけになる。大学時代にアフリカ調査、大学院ではアメリカに留学し、途上国の経済発展と社会変動の問題を勉強。アメリカでの修士論文で近江の農村社会研究をとりあげる。昭和56年、琵琶湖研究所に入所。人と琵琶湖のかかわりを文化人類学的に行うことを目的とし、滋賀県内での聞き書きをベースに、県内3000自治会と120水系を対象に環境情報データベースづくりも行う。地域で出会った人たちに教えられながら、水や土地など環境資源管理の智恵とその文化を学ぶ。昭和60年代初頭から、琵琶湖をめぐる歴史や自然、文化を一般にひろく伝達する施設の必要性を強く感じ、当時うごきはじめて琵琶湖博物館づくりに参加。地域の人たちとともに調査や資料づくりを行う参加型の博物館を理想とし、県内各地のフィールドワークを続ける。最近ではアフリカなど海外湖沼との比較文化研究にも取り組み始める。著書に『水と人の環境史』（共編著）、『滋賀県地域環境アトラス』（共編著）、『環境民俗学の試み』（共著）、『私たちのホタル』（1号～7号）（共編著）、『生活世界の環境学』、『水辺遊びの生態学』（共著）、『共感する環境学』など。

◇環境史研究領域

総括学芸員 中島 経夫（なかじま つねお）

略歴 1972年東京都立大学理学部化学科卒業、1980年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、同年日本学術振興会奨励研究員、岐阜歯科大学歯学部、1982年理学博士（京都大学）取得、1990年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1997年より現職。1997年生態学琵琶湖賞を受賞。

専門分野 魚類形態学

研究テーマ コイ科魚類の咽頭歯の研究

コイ科魚類に特有な咽頭歯の形の美しさに魅かれて、研究を始めた。コイ科魚類の仔稚魚の数10ミクロンの小さな歯からコイ科の進化をさぐり、化石のデータと合わせながらユーラシア大陸や日本列島の数千万年の大地の歴史を紐解いている。その一端を「東アジアの化石コイ科魚類の時空分布と古地理学的重要性」に著した。また、小さな咽頭歯は化石としてよく残り、琵琶湖やそこにすむコイ科魚類の生い立ちを語っている。そのささやきから、明らかにされた琵琶湖の環境の移り変わりを「琵琶湖の自然史」（八坂書房）に著した。最近では、遺跡に残された咽頭歯化石から当時の人の活動やそのフィルターを介した古生態系の復元に興味をもち、「縄文時代遺跡から出土したコイ科のクセノキプリス亜科魚類咽頭歯遺体」（地球科学）、「赤野井湾遺跡から出土した絶滅種を含むコイ属咽頭歯遺体」（COPEIA）を著し、歴史時代にも琵琶湖魚類の絶滅したことを明らかにしている。

専門学芸員 高橋 啓一（たかはし けいいち）

略歴 1979年日本大学文理学部応用地学科卒業、1979年～1980年京都大学理学部研修員、1980年～1990年日本歯科大学新潟歯学部口腔解剖学教室助手、講師、1990年歯学博士（日本歯科大学）取得、同年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職。

専門分野 古脊椎動物学

研究テーマ ゾウ化石を中心とした東アジアの古脊椎動物の変遷

大学入学と同時に入った野尻湖発掘調査団をきっかけに、幾つかのゾウ化石の発掘を経験し、ゾウ化石の研究を行うようになった。大学に就職してからは、比較解剖学に興味を持ち、人体解剖や歯の形態を学生に教育する傍らで基本的な体制を堅持する軟骨魚類の頭部解剖を実体顕微鏡下で毎日続けた。学

位論文は「軟骨魚類の口腔底を支配する顔面神経の解剖学的研究?鼓索神経の相同性について-」。

ゾウ化石の研究を始めたのは、単なる偶然のように思っていたが、実はここに日本の鮮新?更新世という地質時代にみられる日本列島の動物相の特徴があることに気づいた。それは、この時代の脊椎動物化石は、非常にゾウが多いのである。そのために、私は度々ゾウの発掘にめぐりあうことになったのである。いわば、日本列島の動物相がもつ特異性によって、必然的に私の研究対象が決定したのである。

古琵琶湖層群からは、多量の足跡化石や比較的豊富な脊椎動物化石が産出する。脊椎動物化石の産出する地層で、400万年間も連続し、地質学的に詳細に調査された地域は他ではみられない。このようなよいフィールドを活用して、古琵琶湖から産出する脊椎動物化石がどのような意味をもつのか東アジア全体の中で位置づける仕事を現在続けている。

専門学芸員 用田 政晴 (ようだ まさはる)

略歴 1979年岡山大学法文学専攻科史学専攻考古学コース修了、岡山県総務部県史編纂室、滋賀県教育委員会文化財保護課、琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 考古学

研究テーマ 古代国家成立前史

遺跡は文化財であり、国民共有の財産であるといわれている。永く後世に伝えることは、人類の義務でさえあるといわれている。では、何のために残し、伝えようとするのか。将来の研究のため、歴史学習の素材として活用するため?

私をはじめ古墳の上に立った時、土器のかげらを手にした時、城跡の石垣に触れた時、いい知れぬ思いがこみあげてきた記憶がある。人は、生まれながらにして、時間をさかのぼって感動をおぼえる能力を潜在的に備え、また、その権利ももっている。これは歴史環境享有権、あるいは文化環境甘受権と言いかえられるかも知れない。

私は、こうした感動を、みんなが受けられる世界を残しておきたいと考えている(琵琶湖博物館C展示室『考古学徒からみた歴史環境』より)。

主任学芸員 牧野 久実 (まきの くみ)

略歴 1988年慶応義塾大学大学院文学研究科修士課程修了、文学修士、1989?91年テルアビブ大学考古学研究所留学、同期間日本学術振興会特別研究員、1991年慶応義塾大学大学院博士課程単位取得、1991年国立民族学博物館外来研究員、1992年国立民族学博物館共同研究員、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 民族学

研究テーマ 湖環境の比較文化史的研究

私は水辺が好きだ。育った神戸では瀬戸内海を、留学先のテルアビブでは地中海を、そして今は琵琶湖を、日々眺めながら暮らしている。オーストラリアの先住民が描く絵に砂漠とオアシスを描いたものがあるが、私の頭の中にもちょうどあの様な水辺を中心にした心の地図がある。各地の水辺の文化にはさまざまなものがある。通常歴史学ではその地域性に目を向けるが、地域性と同時に普遍性にも目を向けていこうとするのが民族考古学の立場である。一見異なるものに潜んでいる同じもの、一見同じものに潜んでいる異なるもの、そういった事象を比較研究することで、琵琶湖の文化により深く迫って見たいと思う。

主任学芸員 山川千代美 (やまかわ ちよみ)

略歴 1987年北海道教育大学釧路分校中学理科課程卒業、1989年兵庫教育大学修士課程学校教育自然系コース修了、教育学修士、1989年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年

より現職。

専門分野 古植物学

研究テーマ 新生代における植物化石の研究

私は、新生代の大型植物化石を対象に、過去の植物相を解明し、その変遷や古環境を紐解いていく研究をしている。大学時代、研究室の教授に私の郷里で化石採集をするから、よかったら来てみないかと誘われたのが、きっかけであった。もともと、幼少の頃から植物に接することが好きだったので、訳なくのめり込んだ。また、「博物館大好きっ子」だったので、博物館へ出入りするようになり、気がつけばこの道を歩んでいた。今後、古琵琶湖層群をはじめ、日本や東アジアにおける新生代の植物群の変遷や古植生、さらに種の移り変わりを形態学的な視点から系統進化を究明していきたいと思っている。

主任学芸員 橋本 道範 (はしもと みちのり)

略歴 1993年京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中退、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 文献史学

研究テーマ 13世紀における社会経済構造の変動

私の手元にはいま、1963年に撮影された一枚の空中写真がある。現在の写真と見比べてみると、ここ数十年の間に一変した景観に驚かされる。私たちは伝統的なたんぼの姿、日本の農村の姿を見ることができた最後の世代である。

ところで、そうした「伝統的な」たんぼの姿や村の景観は、決して大昔からかわらずあったわけではない。それぞれの時代の人々が、それぞれの自然条件や社会的条件に応じてそのときどきでもっとも望ましい形に変化させてきたのである。それは、どのような変化であったのであろうか。過去の人々の達成と限界を捉える作業は、現在を相対化し、常に未来をみすえるという姿勢を我々に与えてくれるはずだ。

いま私の手元にある空中写真は、犬上川中流域のものである。たんぼの規格化が進み、かつての様子はもはや空中写真や地形図などと実際にその場所で生活していた方々の記憶の中にしか残されていない。今後、それらの方々から聞き取り調査を行い、過去の変化を捉えるための基礎資料としたいと考えている。また、過去の記憶をよびおこすこの調査が、身近な自然や文化の変化を見つめ直してもらうきっかけとなればと願っている。

学芸員 里口 保文 (さとぐち やすふみ)

略歴 1997年大阪市立大学理学研究科後期博士課程地質学専攻学位取得後修了、理学博士、同年より現職。

専門分野 層序学

研究テーマ 古琵琶湖層群の火山灰層と他地域の鮮新?更新統中の火山灰層との関係

”滋賀県の近くに火山なんか無いのに火山灰をやっているんですか?”この問に対する答えは、”琵琶湖周辺に火山は無いが、火山灰層は多く存在する”である。この事実はあまり一般の人に知られていない。火山灰は火山の爆発的な噴火活動によって広域に拡散する。それが堆積し、地層中に残っている。その拡散範囲は火山噴火の規模や形態にもよるが、最大級のものになると本州全土を覆うものもある。日本全国どこにでもあるのではないか?と思われるほど火山灰はある。

古琵琶湖層群には、多くの火山灰層が挟まっている。これらはどこから来たのか。また、他の地域に同じ火山灰があるのだろうか?それぞれの火山灰はどんな特徴があるか?それらはいつ、どこで、どのように噴火して、どこまで拡散したのか?自然が残してくれたヒントを頼りにその答えを解明するにはどうすればよいのか、それを考えていきたい。

学芸員 宮本 真二 (みやもと しんじ)

略歴 1993年立命館大学文学部地理学科地理学専攻卒業、1996年東京都立大学大学院理学研究科地理学専攻博士課程中退、理学修士、同年5月より現職。

専門分野 微古生物学

研究テーマ 堆積物試料の各種分析 (おもに花粉化石) ・測定による第四紀の古環境変動の復原
まだ過去を振り返るほど老いていないが、今の研究の原点は幼年期にあったと思う。田舎だったので、美しい自然に囲まれて成長してきた。それが、そもそものきっかけだったと感じている。

おもに堆積物中に含まれている花粉化石の分析から、自然環境の変化と人との関係の歴史を復原するという、研究をやっている。

自然のイメージを色にととえると、私は森の緑と答える。その緑は、世界的に急速に減少している。その破壊の一番の原因が、我々人類なのだ。

中東、アフリカ、ヒマラヤ、オーストラリアなど、海の外のフィールドから感じる日本の森は、とても、とても美しい。自然の偉大さを痛感せずにはいられない。

博物館では研究から展示という流れを通じて、自然の偉大さ、大切さ、また恐さも知っていただける活動を行ってゆけたら、と思っている。

学芸員 榎永 一宏 (ますなが かずひろ)

略歴 1994年九州大学農学部農学科卒業、2000年九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程単位取得、同年より現職、2002年九州大学博士 (理学) 取得。

専門分野 水生昆虫学

研究テーマ 水生昆虫の分類、系統進化、生物地理

小学生の頃からの新種を見つけないかという思いが、昆虫の研究ができる大学を選択させた。なぜ、ハエを研究しているのかと聞かれることがよくある。理由は2つある。一つに小型の昆虫はほとんど研究されておらず新種が多いこと、もうひとつは人に話してもなかなか理解されにくいのだが、アシナガバエは非常に美しいということである。

大学学部時代から現在まで双翅目アシナガバエ科の系統分類学的研究を行ってきた。現在は分子系統学的手法を用いた系統推定も行っている。アシナガバエ科は150属6000種からなる、双翅類のなかでも大きな一群である。本科の成虫は淡水域から海水域まで、様々な水辺環境への進出に成功し、適応放散により進化してきたグループである。大学院時代には海岸の岩礁域に棲むイソアシナガバエの研究に力を入れ、日本中の海岸線をなぞるようにテントを積んだ原付きバイクで走ったことがある。中国大陸の海岸も中国人の大学院生と2人でバスと自動車を利用し、中華料理を楽しみながら、分布調査をした。また日本周辺の離島の調査数も30島に及ぶ。

今後は、滋賀県において双翅目を中心とした水生昆虫相の解明を進めたい。また代表的な世界の古代湖の水生昆虫を収集し、各古代湖における歴史的、地理的、気候的環境を踏まえて、それぞれのもつ動物相の固有性や類似性に関する分類学的・進化学的研究を行いたい。世界の古代湖の生物相の成り立ちの比較研究により、琵琶湖の特殊性や重要性を浮かび上がらせるような研究活動をしたいと考えている。

◇生態系研究領域

総括学芸員 前畑 政善 (まえはた まさよし)

略歴 1974年高知大学大学院農学研究科修士課程栽培漁業学専攻中退、1974年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1997年より現職。2002年理学博士 (京都大学) 取得。

専門分野 水族繁殖学

研究テーマ 日本産ナマズ類の産卵生態

魚類を選んだのは、小さい時から魚を取ったり食べたりするのが大好きだったから。高知大学在学中は、ダムのない大河・四万十川の下流部で、アユの産卵生態や生理を研究していた。もちろんアユはたらふくたべた。1974年4月から1996年の3月まで滋賀県立琵琶湖文化館に勤務し、この間、日本産希少淡水魚の繁殖やブラックバスの食性、それから最近ではビワコオオナマズをはじめイワトコナマズ、ナマズなど日本産ナマズ類3種の繁殖生態・行動等を研究している。特に、ナマズ類の研究のきっかけは、1988年にたまたまビワコオオナマズの産卵を間近に見、ひどく感動したことから始まり、それは現在の研究のテーマともなっている。昔からそうだが、感動しないものに対しては、研究対象としないという性分らしいと本人は考えている。最近では、種の保全、あるいは生態系の保全は地域の人びとの関心なしではありえないと確信するに至っているが、その各論のありかたになやんでいる。

専門学芸員 アンドリュー ロシター (Andrew Rossiter)

略歴 1979年英国ウェールズ カーディフ大学理学士取得、1983年同北ウェールズ バンゴー大学理学博士取得、英国王立学士院及び日本学術振興会特別研究員資格を得、京都大学特別研究員、カナダ国ゲルフ大学研究員、1995年愛媛大学助教授を経て1997年より現職。

専門分野 国際湖沼学

研究テーマ 魚類行動、進化、生態学(湖沼・河川・海洋) / 陸亀生態、進化

動物というものの魅力にとりつかれてから、もう随分長い間になる。幼少時、恐竜や古代人についての本をむさばり読み、庭をフィールドに実行したネアンデルタール人の発掘作業、両親を冷や冷やさせ、むろん失敗に終わったが、その教訓から、私の興味の対象はひたすら生きた動物へと移行していった。特に10歳の時祖父からクリスマスにもらったLife in Lakes and Rivers (T.T.Macan and E.B.Worthington 著) これは10歳という年齢には難しい内容ではあったが、この本との出会いが私の進路を大きく決定づけたといえる。その後、益々魚や水生昆虫の世界にのめり込んでいくこととなった。カーディフ大では教師や先輩から多くの貴重な励ましと助言を得た。博士号取得後、わずか5日後には、京大の研究員として、京都の小川で水生昆虫研究にいそしんでいた。その間、アフリカのタンガニーカ湖での研究チャンスを得たことから、現在まで、魚類研究中心に専心している。

今日世界中で知られている魚の種数はおよそ24,630種、生息している脊椎動物種数の半数以上を占めている。その内の少なくとも数種についての知識を駆使し、研究者としての持てる限りの能力を発揮し、この琵琶湖博物館の湖沼研究に貢献して行きたい。

現在の研究分野はチョウザメ(北米)、珊瑚礁魚類(石垣島)、タンガニーカシクリッド(アフリカ)、淡水ハゼ ヨシノボリであるが、琵琶湖の魚類群は勿論、陸亀の進化と生物地理学についての研究も今後の課題分野である。

専門員 杉谷 博隆(すぎたに ひろたか)

略歴 1981年京都大学農学部農業工学科卒業、1981年滋賀県職員(農業土木技術吏員)採用、耕地課、水産課、湖西地域振興局田園整備課勤務を経て、2002年4月より現職

専門分野 農村計画

研究テーマ 住民参加による農村環境保全運動

滋賀県が平成8年度に策定した「みずすまし構想」は、「水・物質循環」「自然との共生」「住民参加」の3つの大きな理念から成り立っている。この構想推進に4年間現場で携わった経験をもとに、農村地域における水質保全・生態系保全といった活動に住民自身が主体的に関わり、そうした活動が地域の魅力の再発見となり、新しい町づくり・村づくりへと発展していくことを願っている。その活動を支援する有効な制度や手法について研究を進めていきたい。

専門学芸員 マーク ジョセフ グライガー (Mark J. Grygier)

略歴 1984年米国カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリップス海洋学研究所海洋生物学博士取得。コペンハーゲン大学及びワシントンD.C.のスミソニアン研究所国立自然史博物館研究員、1988年から90年、1992年から93年、1996年から97年琉球大学研究員。日本学術振興会特別研究員として京都大学瀬戸臨海実験所、團国際生物科学基金を得、広島大学研究員。この間オーストラリア、ロシア、フランス、米国、オーストリアの博物館及び大学で短期研究、スミソニアン研究所国立自然史博物館では独立研究。1997年より現職。

専門分野 生物多様性学

研究テーマ 甲殻類分類学、魚類寄生虫調査、田んぼにおけるエビの生態発生学、海洋寄生虫

大学院の論文には囊胸類の分類学、比較形態学、幼生の生育を扱った。このグループの研究は現在も続けている。コペンハーゲンでは“y 幼生”の研究に着手し、瀬戸臨海実験所では、著名な甲殻類研究学者、故伊藤立則博士の研究課題を引き続いて研究した。沖縄の瀬底島では珊瑚礁寄生虫を研究、又多様な甲殻類グループの幼生生育を比較研究した。広島大学では主としてカイアシ類モンストリラ目の研究に専念、スミソニアン研究所では棘皮動物の寄生性の研究を中心に行った。

大学院では囊胸類をテーマに選んだ。今まで知らなかった分野だったからだ。13歳から海洋生物学や無脊椎動物学の教科書を読んでいたが、これに関しては未知であったため、研究に値するフィールドであると思い、これを選んだ。その後、甲殻類の系統学に関する多くの疑問が徐々に解明出来始めたことから、将来は同じようにまだ解明されていない無脊椎動物に焦点を当ててみようと思った。この内の多くが寄生虫であることを強調したことが、日本で研究を始めるきっかけとなった。1997年までは海洋動物だけを研究対象としてきたが、淡水の琵琶湖や水田ではほぼ同じテーマで未知の分類群に取り組み、系統学的な謎を解明して行きたい。特に、カイエビという甲殻類に興味を持っている。

主任主査 野崎 信宏 (のざき のぶひろ)

略歴 1984年大阪大学工学部土木工学科卒業、同年滋賀県職員(土木技術吏員)、1998年?1999年大阪府土木部河川課都市河川室(滋賀県より派遣)、2002年より現職。

専門分野 河川工学

研究テーマ 多自然型川づくりに関する研究

県職員として、これまで主に都市計画(土地区画整理事業)の仕事に従事してきたが、1996年に河川管理を担当したのを転機として、これ以降は河川の仕事に携わってきた。

過去を振り返ると、滋賀県は昭和28年の台風13号や昭和34年の伊勢湾台風など幾度も大きな水害が発生し、その当時の社会的要請を受け、多くの川では「治水」という単一目的で整備が行われてきた。それによって、大きな恩恵を受けてきたのは確かだが、本来川が持っている自然環境が失われ、地域に根ざした人と川のつきあいを希薄にし、人間と自然の両方にストレスを募らせてきたのではないか。

このような反省から「多自然型川づくり」が導入されたが、多くの河川技術者は頭を悩ませているように思う。ここに1本の川がある。「治水」のみを目的とする場合、最も効果的、経済的な整備手法を選択すればよいが、「自然環境」や「地域の水文化」なども含めて多面的に川の整備を考えた場合、その解は無限に広がるからである。

既に各地で「多自然型川づくり」が取り組まれているが、果たして十分な成果が得られているだろうか。博物館ではその現状を見つめ直し、今後活かせるような「多自然型川づくり」のあり方を探っていきたいと考えている。

主査 長崎 泰則（ながさき やすのり）

略歴 1986年島根大学農学部林学科卒業、同年滋賀県職（林業技術吏員）を経て、1999年より現職。

専門分野 林学

研究のテーマ 里山の再生と活用に関する研究

里山は、豊富な山の幸をもたらすことで、日本文化を担ってきたともいえる。しかし、昭和30年代以降、燃料革命等から里山の利用価値が低下し、手入れされない状態の里山や開発により消滅した里山が急増した。

近年、里山の生物多様性や保健文化的役割からその重要性が再び見直されてきているが、現在の里山の生活は、過疎化、高齢化、木材価格の低迷等から十分な維持管理が出来ない状況にある。里山ブームといわれる状況の中でも、里山へのあこがれを持つ都市住民と農山村住民の考え方には、未だ大きなギャップが存在する。里山の現状をもう一度見つめ直し、適正な保全と有効な利用法について追求していきたいと考えている。

主査 井戸本純一（いどもと じゅんいち）

略歴 1988年近畿大学大学院農学研究科水産学専攻修士課程修了、同年滋賀県水産試験場、滋賀県醒井養鱒場を経て、2001年より現職。

専門分野 魚類遺伝育種学、水産増養殖学

研究テーマ 琵琶湖や内湖における水産生物の微小環境に関する研究

「食糧危機がやってくる・」、「石油はあと〇十年で底をつく・」、小、中学校のころ大阪でこの手の話をまにうけて育ったせいか、なんとなく一次、二次産業にコンプレックスを抱いている。そんなわけで農業高校に進んだものの、どう間違ったか水産の世界に迷い込んでしまった。

滋賀県に来てからは、琵琶湖のほとりの水産試験場（宿舎も場内・）に8年間引きこもってセタジミの研究に没頭し、種苗の大量生産から放流効果調査にいたるまでの技術を一通り開発することができた。醒井の山中では、大学以来の専門である細胞遺伝学的手法による魚類の育種技術開発に再び携わった。ところが、これらの技術は琵琶湖が健全であること、遺伝的に多様な魚が豊富にいることが前提になっているのに、いまの琵琶湖はそこがかなり危うい。かといって、自然を改変しなければ人間は生きていけないのも現実だろうし、というジレンマに陥っている。とりあえず、博物館にいるあいだは、貝や魚の目になって、琵琶湖の現状を見つめ直してみたいと思っている。

主任学芸員 草加 伸吾（くさか しんご）

略歴 1990年大阪市立大学大学院理学研究科博士課程単位取得、学術修士。同年滋賀県教育委員会事務局文化振興課を経て1996年より現職。

専門分野 森林生態学、森林水文学

研究テーマ 植生の水質調節機能、森林土壌での水質形成過程と伐採前後の変化

「空青し山青し海青し・・・」と歌われた自然豊かな熊野の地に育ち、おいしい水を飲んで育った。山歩きが好きであったことも手伝って、森と水の両方に興味を持つようになった。そして、これまで、森林と水の関係を解きほぐす研究を中心に行ってきた。南アルプスの山々を歩き回り、大学時代には、寸又川流域の植生調査・植物相調査などを手がけた。その後、広島江田島では山火事が森林の水や栄養塩類など物質の循環に与える影響を調べ、また貴重な原生林の残る奈良春日山地域では、植生の発達度の違いが水質調節にどのように影響するかなど、主に森林の水質調節機能に関する研究を手がけてきた。現在は琵琶湖の安曇川流域で、森林伐採が環境に及ぼす影響について、伐採前後の水質や土壌の変化などの解明を担当し、あわせて、博物館の環境展示に役立つ新しいデータを得るため、調査を続けている。

これらの研究を通して、人間の森林に対する管理・働きかけが、森林の物質循環や水質調節機能にど

のような影響を及ぼすか、水量・水質調節機能の大きい森林とはどのようなものか、また下流域の河川や琵琶湖、海などの水環境に対する負荷の少ない森林管理の方法を探っていきたい。

博物館の展示では環境展示の「水をはぐくむ森林」や「森林、農地、市街地を通る水」、「多雪地の植物」等、野外展示全体のとりまとめと森の育成計画および植栽を担当した。

主任学芸員 楠岡 泰（くすおか やすし）

略歴 1985年東京都立大学理学研究科博士課程生物学専攻単位取得、理学博士（東京都立大学）取得、日本学術振興会特別研究員を経て、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室、1996年より現職。

専門分野 微生物生態学

研究テーマ 繊毛虫の生態学

物心ついたころから、虫やカエル取りが大好きな少年。横浜市立大学では授業をさぼって大学の裏山をほっつきまわる。チョウと食草の関係について卒業研究をおこなう。筑波大学修士課程では、水生昆虫と付着藻類の関係について研究するつもりが、水中の石をおおっている付着藻類のマットにハゲができていたのをたまたま見つけ、その原因を探っているうちに、アメーバが付着藻類にあたえている影響について研究。博士課程では毎日どぶ川にかよい、原生動物のツリガネムシを個体識別して、その生活史を追っかける。

現在は琵琶湖の繊毛虫と共生藻類について、研究している。

主任学芸員 中井 克樹（なかい かつき）

略歴 1992年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、日本学術振興会特別研究員（1990?1992年）を経て、1992年滋賀県教育委員会事務局（仮称）琵琶湖博物館開設準備室、1996年京都大学博士（理学）取得、1996年より現職。

専門分野 魚類生態学

研究テーマ 湖沼沿岸域の生態系、外来水生生物の生態、陸生貝類の地理的変異

大阪のベッドタウン、豊中市の団地に生まれ、物心ついたときには捕虫綱を振り回していた。幼稚園の時、南紀白浜の海岸でタカラガイを拾ったことで貝にも興味を持ち始め、小学校低学年以来、だんだんと陸貝に染まっていき、昆虫からは遠ざかる。大学の卒業研究では溪流の水生昆虫、修士1年では比叡山麓のカタツムリの変異を扱う。修士2年にアフリカ・タンガニーカ湖の調査に参加させてもらい、魚類に寄生する甲殻類の生態と、魚類のなわばり行動を潜水調査する。博士課程でもタンガニーカ湖に丸1年潜り続け、魚の繁殖生態を研究する。1990年からは、琵琶湖の北端部でオオクチバスとブルーギルの繁殖生態を調べ始め現在も継続している。勤め始めた1992年に琵琶湖で見つかったカワヒバリガイも、継続して追い続けている。「虫屋」のいなかった博物館準備に関わって、長年眠っていた虫への関心もよみがえり、開館までの3年ほどは、県内の公衆便所にも捕虫網を手に出没した。

主任学芸員 松田 征也（まつだ まさなり）

略歴 1983年近畿大学農学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 底生動物学

研究テーマ 淡水産貝類の滋賀県内における分布状況調査。琵琶湖湖底に生息するビワコミズシタダミ、水田に棲むマルタニシ、移入種のカワヒバリガイの生態調査。

滋賀県下にはおよそ60種類の淡水棲貝類が生息しているが、その分布状況および生態については一部の種類を除いてほとんど分かっていない。また、環境変化に伴い淡水棲貝類の中にも絶滅の危機に瀕する種類が見られるようになった。このようなことから、知られないうちにいなくなる種類が一つでもい

なくなり、貝類が人間と共存できるような環境を提案できるよう研究を進めたい。

主任学芸員 桑原 雅之 (くわはら まさゆき)

略歴 1982年愛媛大学理学部生物学科卒業、1984年三重大学水産学研究所修士課程中退、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族生理学

研究テーマ 琵琶湖固有亜種であるビワマスと、琵琶湖流入河川に生息するアマゴとの関係

海に囲まれた長崎県で育ったため、もっぱら海水魚に興味を持っていたが、ひょんなことからサケ科魚類であるイワナとアマゴの関係について卒業研究を行った。それ以来淡水魚（というよりもサケ科魚類）にのめり込み、三重大学修士課程ではアマゴの成長と社会行動の関係について研究を進めていた。しかし、中退して滋賀県に来てからは、琵琶湖の固有亜種とされるビワマスと流入河川に生息するアマゴとの関係、さらにはビワマスの成立機構に興味を持ち、現在はその前段階として、十分に解明されたとは言い難いビワマスの生活史に焦点を当て研究を進めている。

主任学芸員 牧野 厚史 (まきの あつし)

略歴 1984年関西学院大学経済学部卒業、1990年関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程単位取得退学、関西学院大学社会学研究科研究員を経て、1999年より現職。

専門分野 地域社会学

研究テーマ 環境問題についての地域社会学的研究

最近の環境問題の研究には、生活や生活者ということばがやたらに使われるようになってきた。それはとてもよいことだろうけど、生活という言葉を使うとき、私は少しばかり考えこむことがある。琵琶湖博物館には「湖の環境と人々の暮らし」をテーマとした展示室があり、ごく最近まで琵琶湖の周囲で人々が営んでいた日常生活が紹介されている。この展示室は、琵琶湖博物館の特色をよく表していると同時に、みる人によって評価が分かれる展示室でもある。たとえば、実際の暮らしの中で、展示の世界を経験してきた人々が、展示をみて常識的と判断するのは理由のあることだ。けれども新興住宅地で生まれ、物心ついた頃から、水道の蛇口をひねれば水がでて、トイレは水洗という生活をおくってきた私にとって、展示されている「生活」は、全く経験したことのない未知の世界である。このように、博物館の展示を常識と受けとめる人々の暮らしがある一方で、展示の内容を未知の世界と感じる人たちの生活がある。それらのことなる暮らしを営んできた人々によって生活世界が成り立っているならば、私たちは、地域環境に生じてくる問題について判断をどのように下していくことになるのだろうか。また私たちの下す判断は、私たち自身の生活を変えていくけれども、それはどのような方向へと向かっているのか。ここに私の基本的な研究テーマがある。

主任学芸員 芳賀 裕樹 (はが ひろき)

略歴 1994年名古屋大学理学研究科博士課程大気水圏科学専攻単位取得、同年滋賀県教育委員会事務局（仮称）琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年理学博士（名古屋大学）取得、1996年より現職。

専門分野 陸水化学

研究テーマ 湖水中の生態系と環境の相互作用

私たちの体の中には無数の細胞がいて、それぞれが大切な仕事をしている。私たちが健康な日々を送るためには、各細胞がバランスよく働いていなければならない。なにかの病気になったときには、どのようにバランスが崩れたのかを調べることで、病気の原因や直し方、予防法がわかる。こうしたバランスを研究する分野は、人間を対象にする場合には生理学（代謝学）、そしてその応用の医学ということ

になる。

「湖沼代謝学」というのは、湖をひとつの生き物に見立て、その中身（生態系）がどのようなバランスで働いているかを調べる研究分野である。内容としては、基礎科学の生理学に近く、病気の直し方よりも、生態系のなり立ちや調節の仕組みを調べることに主眼をおいている。

私が扱うのは、主にミジンコよりも小さな生き物たちで、それらの生き物が琵琶湖の中で果たす役割を調べている。手法には、化学分析を使う。例を挙げれば、植物プランクトンが作り出した炭水化物がミジンコにいくのか、それとも湖水中に溶け出してバクテリアにいくのか、といったことや、窒素やリンが食物網の中をどのように受けわたされていくのかを調べている。

主任学芸員 亀田佳代子（かめだ かよこ）

略歴 1996年京都大学大学院理学研究科博士後期課程動物学専攻修了、博士（理学）取得、京都大学生態学研究センター研修員を経て、同年12月より現職。

専門分野 鳥類学

研究テーマ 生態系における鳥類の役割に関する研究

特に鳥だけが好きだったわけではないが、子供の頃から野生動物や自然について興味があった。その中で鳥を研究対象にしている理由は何かといわれると、ひとつは鳥の「飛ぶ」という能力にある。もちろん全ての鳥が飛べるわけではないが、飛翔能力を得たことで渡りなど長距離移動が可能になったり、さまざまな生息環境を利用して生活することができるようになった。たとえば、琵琶湖を訪れるガンやカモの仲間は、湖だけでなく陸上のたんぼでえさをとったりヨシ帯で休憩したりしている。春になれば日本を離れてロシアにまで渡り、そこで繁殖を行う。こうした鳥の移動が、水域と陸域、繁殖地と越冬地の環境にどのような影響を及ぼしているのか。またここまで広範囲でなくても、湖で魚を食べ森林で営巣しフンを落とすカワウは、水域から陸域への物質移動にどのくらい関与しているのだろうか。こうした鳥のダイナミックな動きは、生態系や他生物になんらかの影響を及ぼしていることは確かだ。また逆に、食物条件や他生物などの環境の違いによって、鳥の側も柔軟に反応する。大学院時代に研究したキジバトではピジョンミルクという物質を分泌し、雛の食物とすることで繁殖期間が延長し、1年で何回も繁殖することがわかっている。つまり雛を育てるために必要な食物があれば、ハトでなくても何回も繁殖したり繁殖期間が延びる可能性があるわけである。このように、鳥と環境との相互作用において鳥類の役割とは何なのか、少しでも明らかにすることができればと考えている。

滋賀県あるいは琵琶湖は、たくさんの面白い特徴を持っていながらまだまだそれが十分に生かされていない。博物館が県内各地の人のネットワークを作ったり、世界と琵琶湖をつなぐパイプ役をつとめることで、広く世界に情報発信していけたら、というもの大それた夢の一つである。

主任学芸員 矢野 晋吾（やの しんご）

略歴 1988年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、日経マグロウヒル社（現・日経BP社）入社、経済・経営雑誌、建築雑誌の記者を歴任、1993年同社退社、1995年早稲田大学大学院人間科学研究科（生命科学専攻・地域環境論講座）修士課程修了、2000年早稲田大学人間科学研究科博士後期課程修了、同年博士（人間科学・早稲田大学）取得、2000年より現職。

専門分野 環境社会学

研究テーマ 地域（主として農・山・漁村）社会における生活と自然環境の関連についての社会学的研究

幼い頃、私の育った東京・練馬は武蔵野の雑木林（平地でもヤマと呼ぶ農用林）に囲まれ、ミヤマクワガタが捕れた。しかし、その林はことごとくマンションになっていった。周りの大人は「経済が発展した」とか「近代化して便利になった」と言ったが、私には大切なものが、どんどん失われていったと

しか思えなかった。そんな疑問から学部は経済に進むが、人間が見えない“科学”に大きな違和感を感じ、民俗学のサークルに入り村に通い始める。村の生活を通して、自分の生きた「高度経済成長期」と、それを支える論理である「市場」を考える必要性を痛感する。マスコミの世界に入ってから企業経営者（特にベンチャービジネス）に取材する日々を送りながら、日本企業は経済学の生まれた欧米とは異質の合理性で動いている現実を目の当たりにする。その合理性とは、「家」や「村」にみられる行動論理であった。家・村は、今でこそマイナスのイメージが強いが、本来はその地域の人々が、生活空間である自然環境（人為的なものを含めて）をうまく利用しながら日常生活を送るために長時間をかけて作り上げた仕組みである。それをもう一度考えることが現代、そして将来の日本社会を考える上で重要だということを改めて理解した。その後、日本社会を知るために、農・山・漁村に滞在し、そこで生活する人々と共に時間と体験を共有しながら、人間社会と自然との関係について教えていただいている。

学芸員 大塚 泰介（おおつか たいすけ）

略歴 1998年京都大学大学院農学研究科博士課程熱帯農学専攻修了、博士（農学）取得、島根大学汽水域研究センター非常勤研究員（講師）を経て、2000年より現職。

専門分野 陸上生態系学

研究テーマ 付着珪藻の分布

魚を研究しようとして水産学科に入ったのに、気がついたら「珪藻」などというマイナーな生物を研究していた。川にはいるとよく、石に付いたヌルヌルに足をとられるが、あのヌルヌル（水垢）の主な成分が珪藻である。もっとも、珪藻がマイナーなのは大半の人間の認識においての話である。実際には水気のある場所ならばどこにでもいて、水域で光合成をする生物としては最も重要なものの一つである。種類も多く、少なくとも万の単位だと言われている。

しかしこの珪藻、どこに、どんな種類が、どれくらいいるのか、ほとんど解っていない。研究している人も結構多いのだが、何せ種類と生息場所が著しく多様なので、とても調べきれないのである。そこで私も、この問題に取り組むことにした。水田、水たまり、動物の体表など、まだ珪藻がほとんど調べられていない場所が、すぐ近くにたくさんある。多分、一生かかっても研究のネタが尽きることはないだろう。

移り気なので、10年後に何をやっているかは自分でも見当がつかない。今のところ、付着珪藻の群落を、統計手法を用いて記述することに精を出している。

学芸員 中藤 容子（なかとう ようこ）

略歴 1996年京都大学大学院文学研究科修士課程地理学専攻修了、文学修士、同年5月より現職。

専門分野 民俗学

研究テーマ 琵琶湖水系における伝統的な資源利用とその変化

長い学生生活に終止符をうち、琵琶湖博物館開館の年、民俗学部門担当の学芸員となる。大学では文学部の地理学研究室に籍をおき、日本の地域社会に見られる社会集団と空間との関係を解明すべく、学部時代は村落を、修士課程時代は都市を駆けめぐった。近代化した生活様式の裏側でなおムラ的な社会集団が残っていることに非常に興味を覚えたのである。

学芸員となってからは、近江の祭を見てまわったり、観察会の広報ポスターをつくったり、生活実験工房の田んぼの田植えをしたり、収蔵庫にこもって民具資料の整理をしたりと慌ただしい。これらの民具たちを研究の材料として、これから少しずつ彼らが語ってくれる物語を紹介していきたいと思っている。

◇博物館学研究領域

総括学芸員 布谷 知夫 (ぬのたに ともお)

略歴 1974年京都大学大学院農学研究科博士課程中退、農学修士、同年大阪市立自然史博物館、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 博物館学

研究テーマ 利用者の視点からみた博物館 遺跡木材遺物による古環境復元

大学では林学を学び、林縁植生をテーマに研究を行ったが、実際には自分の研究よりも研究室仲間の仕事を手伝って、日本各地の山を見ることができたことのほうが有意義であったような気がする。博士過程に進んですぐに博物館に就職し、学芸員としての仕事を始めたが、博物館の学芸員にたいして、多くの利用者が期待する内容と大学時代に身につけた知識との差は大きく、とまどった覚えがある。

就職した博物館は、利用者との関係においては日本でも最も先進的な試みを行っていることで評価の高い博物館であり、博物館の在り方については貴重な体験ができた。そして博物館の学芸員は専門分野の知識をいかしながら、博物館そのものについてももっと積極的に発言をすべきであると考えようになった。博物館について議論する日本の博物館学は、大学の研究者が中心になっていて、現場の学芸員の声があまりに少ないためである。

琵琶湖博物館開設の仕事を担当するようになってからは、理想とする博物館像に近づけるための努力をしてきたつもりではあるが、まだまだゴールは遠い。

専門学芸員 秋山 廣光 (あきやま ひろみつ)

略歴 1974年日本大学農獣医学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族病理学

研究テーマ ズナガニゴイの繁殖行動、ギギの発音機構

子供の頃は無類の虫好き。でも、どういう訳か、標本にするのが嫌で、飼育観察するのみ。しばらくして、魚を飼育し始め、昆虫の飼育では難しかった環境を作り出すことが容易であることに魅せられる。以後魚一辺倒の人生を歩むことになる。しかし、一人で飼育をしたり、研究したりするのではなく、魚に対する想いを少しでも多くの人に伝え、魚大好き人間を増やしたいと念じている。琵琶湖文化館時代に、水族部門で撮り貯めした写真映像資料(主に35mmフィルム)の整理を行い、写真活用が十分にできるようにした。百聞は一見に如かず、の例えのように実物から得られる知識は必要十分なものであるが、映像資料からも聞いたり読んだりすることより実物にずっと近い知識が得られる。蓄積された写真資料は多岐にわたり、6万点を超える資料数に達していた。完全な整理にはまだ時間を要するものの、今後撮影してゆく映像とともに、琵琶湖博物館の貴重な資料となるだろう。写真撮影とその整理・利用は、博物館の重要な業務と考えるが、私自身の興味は生態学や行動学にあり、現在は魚の産卵行動や声の研究を行っている。

主任学芸員 戸田 孝 (とだ たかし)

略歴 1991年京都大学理学研究科博士課程地球物理学専攻単位取得、同年科学技術庁防災科学技術研究所特別研究員(非常勤)、1992年理学博士(京都大学)取得、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 地球物理学

研究テーマ 人工衛星や航空機からの観測による琵琶湖の流動の実態解明

「地球物理って何ですか。」と、聞かれたら「気象庁の仕事にかかわる基礎研究全て」だと答えることにしている。大気の動きはもちろん、海水や雨水の動き、地震の発生などについて、その原因まで含めて探求する学問である。私の専門は、その中でも海や湖などの「大きな水たまり」の中の水の動きを調

べることだ。この水の動きを、人工衛星や飛行機などで遠くから観測する「リモートセンシング」という方法で調べるのを得意としている。琵琶湖博物館へ来るまでは、黒潮の暖かい水がどのように沿岸へやってくるのかを、人工衛星のデータで調べていた。琵琶湖博物館では、同じような方法で、琵琶湖の水の流れの細かいところを調べていこうと思っている。リモートセンシングを使うと、広い範囲の細かい情報を一度に観測することができる。つまり、一度の観測で大量のデータが得られる。リモートセンシングでは、この大量の観測データをどうやって効率的に処理するかが重要になる。そこで、コンピュータの使い方も並行して研究していたら、ずいぶん詳しくなってしまった。こういう縁で、琵琶湖博物館では、情報システムの整備も担当させていただき、最近では「博物館情報論」も研究テーマに加えている。

主任学芸員 八尋 克郎（やひろ かつろう）

略歴 1994年九州大学大学院農学研究科博士後期課程昆虫学専攻修了、博士（農学）取得。九州大学農学部研究生、国際協力事業団派遣職員を経て、1996年より現職。

専門分野 陸上昆虫学

研究テーマ オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究

大学に入ってから現在まで、オサムシ上科甲虫の、形の不思議さや生態のおもしろさにひかれて研究を行ってきた。漫画家の手塚治虫が、ペンネームをこの虫にちなんでつけたことを知る人は以外に多い。オサムシは他の昆虫にはあまりない“飛べない”という大きな特徴を持っている。そのため、地方色豊かな方言と同じように、同じ種でも地域ごとに違いが見られる。地域特性の代弁者であるオサムシから、日本あるいは世界の中で琵琶湖とその集水域がどのような地域なのかを考えてみたい。そして、オサムシがどのような過程で現在の分布に至ったのかを明らかにしたい。

琵琶湖とその集水域はその豊かな自然環境から、オサムシのほかにも実に多くの種の昆虫類が生息している。しかしながら、何がどこに生息しているのかという基礎的な事さえほとんど解明されていない。琵琶湖とその集水域の昆虫相を地域に住む一般の人達や専門家と一緒に調べてみたい。

琵琶湖周辺には古琵琶湖層群をはじめ昆虫化石も多く出てくる。他の分野の研究者とも連携し、博物館でしかできないような研究を行い、展示、交流、資料整備、情報事業などの博物館活動に展開させたい。

主任学芸員 芦谷美奈子（あしや みなこ）

略歴 1990年千葉大学理学研究科修士課程生態学専攻修了、理学修士、同年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 水生植物学

研究テーマ 水生植物の繁殖と成長の研究

水生植物の生態学が専門。沈水植物の繁殖生態の研究の一環として、イバラモを対象とした調査を行っているほか、沿岸帯の種類組成やその役割についても調べている。最近では、水中だけではなく水辺の植物にも興味を広がりつつあり、特にヨシ（およびヨシ帯）の生態系に人の利用がどのように絡み合っているかについても、そのうち調べたいと考えている。生物の研究以外には、博物館の教育活動や触れる展示手法と利用者のメッセージの受け取り方について、実践的な取り組みも含めて調べてきた。

事業部では、長年ディスカバリールームの計画と運営に関わってきたが、平成12年度から情報センターで図書の仕事を担当。いずれの仕事においても、利用者の方々にとって博物館という場が、利用しやすく、楽しく知的刺激にあふれた場所にしたいと考えている。

主査（教員） 谷口 雅之（たにぐち まさし）

略歴 1986年滋賀大学教育学部地学研究室卒業。滋賀県公立小学校教員を経て、2003年より現職

専門分野 教育学

研究テーマ 体験学習プログラムの開発

子どもの頃から家族でよく琵琶湖へ出かけた。そして、日本一大きな湖「琵琶湖」を故郷にもっていることが、いつの間にか私の自慢となった。また、自然科学が好きで、特に地球（空・天気）や宇宙に興味を持っていた。大学では、地球や宇宙を研究対象とできる地学研究室に入り、地球物理学を専攻した。そして、船で琵琶湖に出ての水温や湖流の観測、湖岸での風の観測などを通して、琵琶湖の大きさからおこる「湖陸風」に関心を持ち、滋賀県と近隣府県のアメダスのデータから「湖陸風」について研究した。大学を卒業してからも、風を感じるたびに、琵琶湖を思い浮かべて過ごしてきた。また、宇宙に関しても興味を持ち続け、天体観望会にも定期的に参加している。

教師として、人として、子どもたちにいつも五感をいっぱい使って生活して欲しいと願い、子ども自身の気づきや考えを大切にしてきた。

そこで、琵琶湖博物館でも子ども達が五感をフルに使い、自ら考えることができる体験学習プログラムを開発していきたいと考えている。そして、私自身も五感をみがき、「湖と人間」を見つめていきたい。

主任主事（教員） 西垣 亨（にしがき とおる）

略歴 1986年滋賀大学教育学部地学研究室卒業、滋賀県公立中学校教員を経て、2002年より現職

専門分野 教育学（中学生対象）

研究テーマ 体験学習プログラムの開発

生まれは京都府の北端、宮津市である。小さい頃から近くの山をかけまわり、天橋立を見ながら海水浴をし、丹後の田舎の大自然に親しんで育ってきた。18才の春に初めて琵琶湖を見た時、あまりの雄大さに「これは海じゃないのか!？」と驚いた記憶がある。大学では漕艇部に入部。最初はうまく漕げなくて湖に落ちた時、飲んだ水が「辛い」ことにまたまたショックを受けた思い出もある。

そんな琵琶湖との出会いであったが、大学では地球物理学教室に所属し、船の上で星を見ながら湖流や水温の定点観測をしたり、バルーンを打ち上げて気温観測をしたりと、楽しく琵琶湖に触れる中で、琵琶湖に対する思いがどんどんふくらんできたように思う。

このたび博物館教員として勤務することになり、今までとは違った子供たちの表情が見られることが楽しみでならない。16年間理科の教師をしてきて、「理科はわからないから嫌い。」という生徒が増えていくことを肌で感じてきたし、それは自然体験の乏しさと大いに関係している。子供たちが目を輝かせて体験学習ができる手助けをしたいと思う。

琵琶湖博物館 年報 第7号

2003年(平成15年) 月 発行

編集・発行 滋賀県立琵琶湖博物館
〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091
電話 077-568-4811

印刷 株式会社スマイ印刷工業

©滋賀県立琵琶湖博物館 2003

Printed in Japan

R100 この冊子は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

